

第V章 結 語

第1節 今帰仁城跡出土の元・明青花磁の分類と年代的位置付け

金武正紀

(今帰仁村発掘調査アドバイザー)

1. 今帰仁城跡出土元青花磁と比較資料による優品性の証明

今帰仁城跡主郭（註1）、志慶真門郭（註2）の発掘調査で破片数で400点以上の元青花が出土している。その破片資料から図上復元できたのが第1図である（註3）。今帰仁城跡出土の元青花磁で注目されるのは大型の壺と盤である。特に大型壺が3点図上復元できた。それが第1図1～3に示した壺である。

沖縄における元青花磁の出土遺跡として主なのは首里城跡（註4・5）、今帰仁城跡、久米島具志川城跡、勝連城跡である。その中で大型壺が図上復元できたのは今帰仁城跡の3点と久米島具志川城跡の2点である。最近、亀井明德を代表とする専修大学アジア考古学チームが首里城跡で1点、勝連城跡で2点の図上復元図を発表している（註6）。

これまで今帰仁城跡出土の元青花磁と久米島具志川城跡の元青花磁については亀井明德を代表とする研究チームが（註7・8）、勝連城跡出土の元青花磁については1975年に矢部良明（註9）が細かくまとめられている。

今回筆者は今帰仁城跡出土の元青花磁の破片資料をいろいろな本に掲載されている完形品と比較しながら、検討してみたい。

図版1の1（第1図1）。口縁部から底部までの資料をその部位に並べた写真である。右の1-aと比較してみると、口縁部に雷文帯、頸部に唐草文、肩部に宝相華唐草文、胴部に龍と牡丹唐草文、最下部にラマ式蓮弁文が描かれている文様構成はまったく同じである。異なる点は、龍の爪が1-aは3本であるのに対して、1は4本爪であるのと、ラマ式蓮弁のすぐ上の細い文様が、1は七宝繁文であるのに対して、1-aは卷草文である点である。なお、破片資料では獸耳は出土していないが、1-aは一对の獸耳が付いていることから、亀井他の実測図第1図1では獸耳も描いている。

この1-aは安宅コレクションの中でも特に優品として有名であることから、今帰仁城跡出土の獸耳壺も1-aと同等かそれ以上の優品であったと考えられる。

※1-aは矢部良明『陶磁大系41-元の染付-』平凡社 1974

図版1の2（第1図2）。この青花壺は胴部に描かれた主文様の白抜龍文が圧巻である。この白抜龍文壺に類似の作品が見つからない。白抜龍文としては2-aが有名だが梅瓶であり器形がまったく違う。2-bに注目したい。主文様の白抜龍文が牡丹唐草文に変わっているが、その上の如意頭窓枠の中に青海波文が丁寧に描かれ、その中に白海馬が描かれている文様帯はまったく同じである。2-bの青花牡丹唐草文獅子鈕双耳壺について佐藤雅彦は下記の『世界陶磁全集13』において「元青花の中でももっともいかめしい、堂堂たる大作で、蓋の伴った唯一の例として知られている。」と述べている。また、2について亀井明德は『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』（註7）において「（2-aの梅瓶などの）類似品と比較して、本出土の青花刻花白竜文罐は、いずれにも優るとも劣らない類を見ないものであり、わが国はもとより、中国を含めて内外の青花瓷の白眉といえる。」と絶賛している。

※2-a、2-bとも『世界陶磁全集13 遼・金・元』小学館 1981

図版1の3(第1図4)。元青花壺の蓋である。蓋甲に葉脈文が描かれ、中心に鈕が付いている。3-aのような身と蓋のセットと考えられる。

※3-aは『亜州古陶瓷研究Ⅱ』 亜州古陶瓷学会 2005

図版1の4(第1図5)。口径42.4cmの大型元青花盤である。内面の文様は内底に牡丹唐草文を描き、内体面に宝相華唐草文を描き、さらに鏤縁面に卷草文が描かれ、内面全体を丁寧な文様を描いて埋めつくしている。外体面にはラマ式蓮弁が丁寧に描かれている。発色もよく、破片ではあるが優品であることは一目瞭然である。右の4-aと文様構成が同じで、丁寧な描き方や発色なども同じである。ちなみに右の4-aは国の重要文化財に指定されている最高級品である。

※4-aは『世界陶磁全集13 遼・金・元』 小学館 1981

図版1の5(第1図6)。元青花玉壺瓶である。左の5と右の5-aの文様を比較すると、まず頸部に下向きのラマ式蓮弁文、その下に卷草文、胴部に主文様、最下部にラマ式蓮弁が描かれている。5の主文様には柳が描かれているが、おそらく右の5-aのような人物文が柳の下に描かれていたのだろうか。主文様のすぐ下に5は卷草文、5-aは七宝繫文が描かれているところは相違する。しかし、器形、文様構成、発色の良さなどから類似の瓶と考えられる。

※5-aは『世界陶磁全集13 遼・金・元』 小学館 1981

図版1の6(第1図7)。口径3.7cm、高さ5.2cm、底径3.5cmの元青花小壺である。主文様は胴部に描かれている菊唐草文である。沖縄では現在のところ、この一点のみの出土である。右の6-aは博多遺跡群第124次調査で出土した元青花菊唐草文小壺である。

※6-aは『亜州古陶瓷研究Ⅱ』 亜州古陶瓷学会 2005

図版1の7(第1図8・9・10)。元青花三足香炉の口縁部である。7の2個は別個体のようなが、文様が同じなのでまとめた。口縁部亀甲繫文は7-aの口縁部に廻っている亀甲繫文と文様構成が同じである。第1図10は亀甲繫文のところが卷草文になっているが器形が同じである。

※7-aは『世界陶磁全集13 遼・金・元』 小学館 1981

図版1の8(第1図11)。口径9cmの小型元青花片口である。内体面に卷草文、外体面にラマ式蓮弁が描かれている。これと同じ文様構成が右の8-aの片口である。

※8-aは『世界陶磁全集13 遼・金・元』 小学館 1981

このように世界に現存する元青花の優品と比較しても同等の優品であることが理解できる。それは山北王が元青花の優品性を評価できたのだと考えられる。そしてそれは権力の象徴として考えられていたと推察できる。これらの元青花を入手したのは『明實録』に登場する山北王帕尼芝と考えられる。

2. 今帰仁城跡出土明青花磁の分類

出土青花は碗、皿、杯、盤などであるが、特に碗と皿が多いので、今回は碗と皿について、比較資料を提示しながら分類を試みた。

(1) 外反碗

I類(第2図1～8、第3図1～3)

下腹れの外反碗で、文様が内外面に丁寧に描かれている。

I-a、第2図1・2で、外面下位にラマ式蓮弁が描かれている。1の内底には白海馬が描かれているが、これは参考1の元青花の白海馬文に近い、また、外面の波濤文の中にも白抜き文様の一部がみられる。2の内底の捻じ花も丁寧である。この2点は元青花のような発色で、元青花の流れを汲む明初の作品と考えられる。

I-b、第2図3・4で、外体面に丁寧な唐草文が描かれている。3は内外面卷草文を全面に描



図版1の1

1-a



図版1の3



3-a



2-a



2-b



4-a



図版1の4



5-a



図版1の5



6-a



図版1の6



7-a



図版1の7



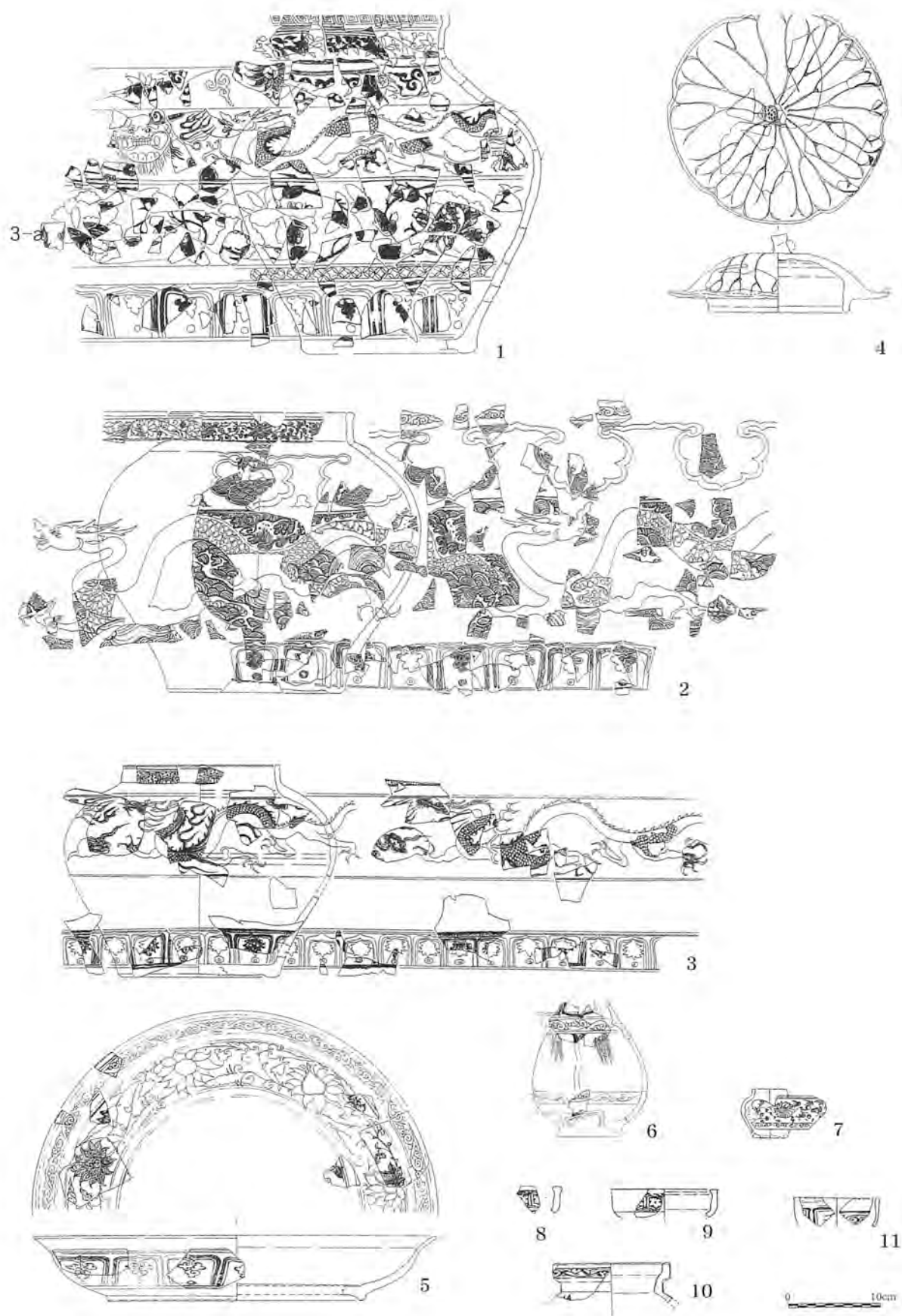
図版1の8



8-a



図版1 今帰仁城跡出土元青花磁と比較資料



第1图 元青花：大型壶（1~3）、大型壶盖（4）、大型盘（5）、玉壶春瓶（6）、小型壶（7）、香炉（8·9·10）、片口（11）

いている。花の部分に網目にして描いているのが大きな特徴である。参考2の内面巻唐草文と同じで、参考2は永楽と考えられており、本品も明初と考えられる。4は参考3と類似の文様構成であり、これも明初と考えられている。

I-c、第2図5で、外体面に雲気文が描かれ、内底に寿の字がみられる。これと類似のが参考4で、洪武・永楽と編年されている。本品も明初と考えておきたい。

I-d、第2図6～8で、内外面に丁寧な文様が描かれている。6・7は外体面に唐草文が描かれ、内底に十字花文がみられる。8は大型の碗で、外体面に人物図が描かれている。

I-e、第3図1～3で、1は内底に梅月文が描かれている。梅月文は明初の宣徳頃から多く描かれるようである。参考5は15世紀前半と考えられている。2・3は外体面に鳳凰文の描かれた非常に薄手碗である。外底に「宣徳年製」の字款があり、宣徳の作品と考えられる。

Ⅱ類（第3図4～7、第4図1）

口縁部が極端に外反する口折碗で、高台がハの字状に開く。4～7は外体面に馬士文が廻っている。第4図1は外面に人物図、口縁内面に四方繡文が描かれている。15世紀中葉と考えられる。

Ⅲ類（第4図2～4）

下脹れしない外反碗で、内底が蓮子。

2は外体面に巻唐草文、内底に花卉文が描かれている。3・4は外体面に蓮池文、内底に花卉文が描かれている。いずれの外底にも「萬福攸同」の字款がある。「萬福攸同」の字款は嘉靖から万暦に多く用いられることから（註10）、16世紀前半から中葉と考えられる。

Ⅳ類（第4図5・6）

Ⅲ類に類似するが、口径が狭く（約12cm）なり、茶碗形となり、内底は平坦である。文様構成では5は3・4と、6は2と類似する。Ⅲ類と同時期の作品と考えられる。

Ⅴ類（第5図1～4）

口径が狭く（約12cm）なり、茶碗形。

口縁に特徴がある。口径内側が凹み、鰻頭状口縁。絵画的図が外体面と内底に描かれている。1は人物文、2は草花文と獅子文、3は外体的と内底に蟠螭文（龍がとぐろを巻く）、4は草花文が描かれている。また、2には「大明萬暦年製」、3には「萬福攸同」の字款があり16世紀後半から17世紀初頭と考えられる。

（2）直口碗

Ⅰ類（第5図5～7、第6図、第7図1～4）

口径が13～15cmで底径（約5cm）より開く直口碗で、内底は凹む蓮子碗。

I-a、第5図5～7で、外体面に唐草文。5・6の口縁内面には四方繡文が廻っている。

I-b、第6図1～3で蕉葉文碗。参考6は嘉靖（1522～1566）の作品と編年されていることから16世紀前半～中葉と考えられる。

I-c、第6図4～6でアラバスク文碗でI-bは同じ時期の作品と考えられる。なお、この碗と同類と考えられるのが第7図5～10の茶碗である。

I-d、第6図7～9、第7図1・2で器形は口径の広い浅碗で、第6図7～9は豹皮文、第7図1・2は豹皮文に近い三葉状の斑点文。この浅碗とI-bと同じ時期の作品と考えられる。

I-e、第7図3・4で、3は飛馬文、4は法螺貝文であり類例がない。16世紀後半～17世紀初頃の作品と考えられる。

Ⅱ類（第7図5～10、第8図1～8）

口径が約12cmの筒形に近い茶碗である。

Ⅱ-a、第7図5～10で、アラバスク文茶碗。内底は平坦。I-cと同じ時期と考えられる。

Ⅱ－b、第8図1～6で、内底が盛り上がる饅頭心の茶碗である。1・2は円文で、3は蟠螭文、4は人物文、5・6は唐草文である。参考7の円文は成化（1465～1487）、参考8は万暦（1573～1615）という年代が与えられているが、器形から考えて、この一群は万暦と考えられる。

Ⅱ－c、第8図7・8で、饅頭心の浅碗である。Ⅱ－bと同時期と考えられる。

（3） 外反皿

I類（第9図1～3）

内底に十字花文、内体面に如意頭繫文、外体面には卷唐草文が描かれている。花の部分を目にして描いている。この文様構成は参考9と同じである。また、この手法は第2図3の碗と同じで、第2図3の碗とセットの皿で、明初作品と考えられる。

Ⅱ類（第9図4～7、第10図1）

第9図4～7は内底に玉取獅子文を描き、外体面に唐草文を描くタイプである。第10図1は内底に園亭図、外体面に唐草文が描かれている。15世紀後半～16世紀前半頃と考えられる。

Ⅲ類（第10図2～6）

小型の皿で、内底に十字花文、外体面に唐草文が描かれている。16世紀か。

（4） 直口皿

I類（第10図7～9）

内底に官人図、外体面に唐草文が描かれている。8・9の外底には「富貴屈器」の字款が書かれている。屈は佳のあて字か誤字と考えられる。一般的には富貴佳器で、富貴佳器は嘉靖（1522～1566）からよく使われているようであり（註10）、この皿は16世紀前半頃と考えられる。

Ⅱ類（第10図10～12、第11図1～8）

いわゆる碁笥底の直口皿である。第10図10は内底に花果文、外体面に唐草文が描かれている。第10図11は内底に寿星図が描かれている。これと同じ寿星図が描かれているのが参考10で、これは景德鎮民窯で弘治（1488～1505）年間の作品とあり（参考図版出典4）、この第10図11も15世紀末～16世紀前半頃と考えられる。第10図12と第11図1～6は外体面に簡略化した蕉葉文が描かれるタイプで、7・8は梵字文が描かれるタイプである。これらの皿は16世紀。

Ⅲ類（第11図9～13）

外体面は無文で、内底に鳥類、花果文、人物文などが描かれるタイプである。16世紀後半～17世紀初頃。

（5） 青花杯（第12図1～5）

1～3は筒形で外体面に1本の凸線が廻っている。4・5は口径がやや開く碗形の杯である。これらの杯は第7図5～10の直口碗と同類である。16世紀。

（6） 青花瓶（第12図6・7）

6・7とも玉壺春碗である。頸部に蕉葉文、胴部に花唐草文、下部に蓮弁文が描かれている。15世紀。

（7） 青花水注（第12図8）

扁壺形の水注で、扁壺の両面に如意頭状窓絵文で、窓枠の中に山水人物図が描かれている。15世紀。

（8） 青花盤（第13図1～4）

1・2は直口盤で、3も高台の造りから直口盤の底部と考えられる。4は鐐縁盤である。内底には2が孔雀図、3が菊花図、4が麒麟図である。15世紀。

3. 今帰仁城跡出土青花磁の山北年代と監守年代

今帰仁城跡は琉球が三つの勢力に分かれていた、いわゆる三山鼎立時代の山北で、中国明代の『明實録』（註11）の中の「太祖實録」「太宗實録」に琉球国中山王、山北王、山南王と記録されている中の山北王の居城である。「太祖實録」「太宗實録」の記録によると、1383年から1415年の33年間に山北王帕尼芝 6 回、山北王珉が 1 回、山北王攀安知が11回中国皇帝へ使者を送り、朝貢貿易を行なったことが記されている。しかし、3代の王が続いた山北は1422年、中山王尚巴志軍の攻撃で滅ぼされて中山による三山統一が成し遂げられる（註12）。1429年には山南も中山に滅ぼされて中山による三山統一が成し遂げられる（註13）。

山北が中国と朝貢貿易を行なった1383年から1415年までが山北の隆盛期である。18回の朝貢貿易で大量の中国陶磁器が入ってくる。しかし、青花磁でみると第1図の元青花磁と第2図の明青花碗、第9図1～3の明青花皿などで、量的には少ない。

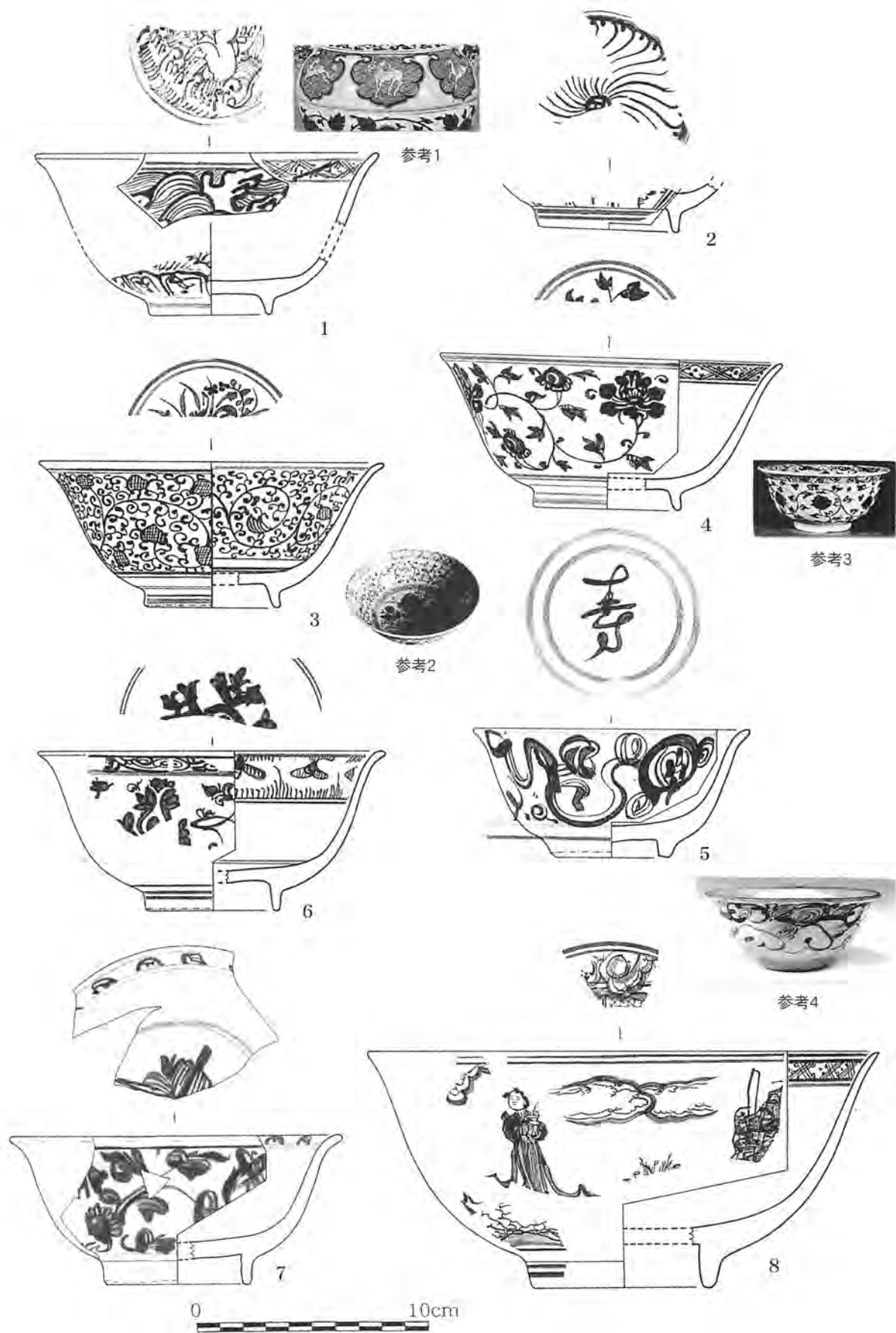
前述した以外の第3図～第13図までのほとんどは中山に滅ぼされ、中山から監守が山北へ派遣された、いわゆる監守時代の明青花磁である。そして、清代の青花磁がほとんど出土していないことから、1609年の薩摩軍による山北城侵攻により監守が城外へ移動したと伝えられているのとは符合する。『今帰仁村史』には薩摩軍侵攻により「北山城炎上のあと、北山監守は、城下の親泊部落にその居を移し、およそ50余年そこに住んでいたが、王命によって首里に引き上げた。これが七代監守であった向從憲である。」と記されている（註14）。

このように、今帰仁城跡出土の青花磁は山北王時代の1383年から1422年までの青花磁と監守時代の1422年から薩摩侵攻の1609年までの青花磁に分けて考えることが重要である。それは山北王が独自に朝貢貿易を行なった山北王時代と中山（首里城）経由の監守時代とは明確に区別されるからである。

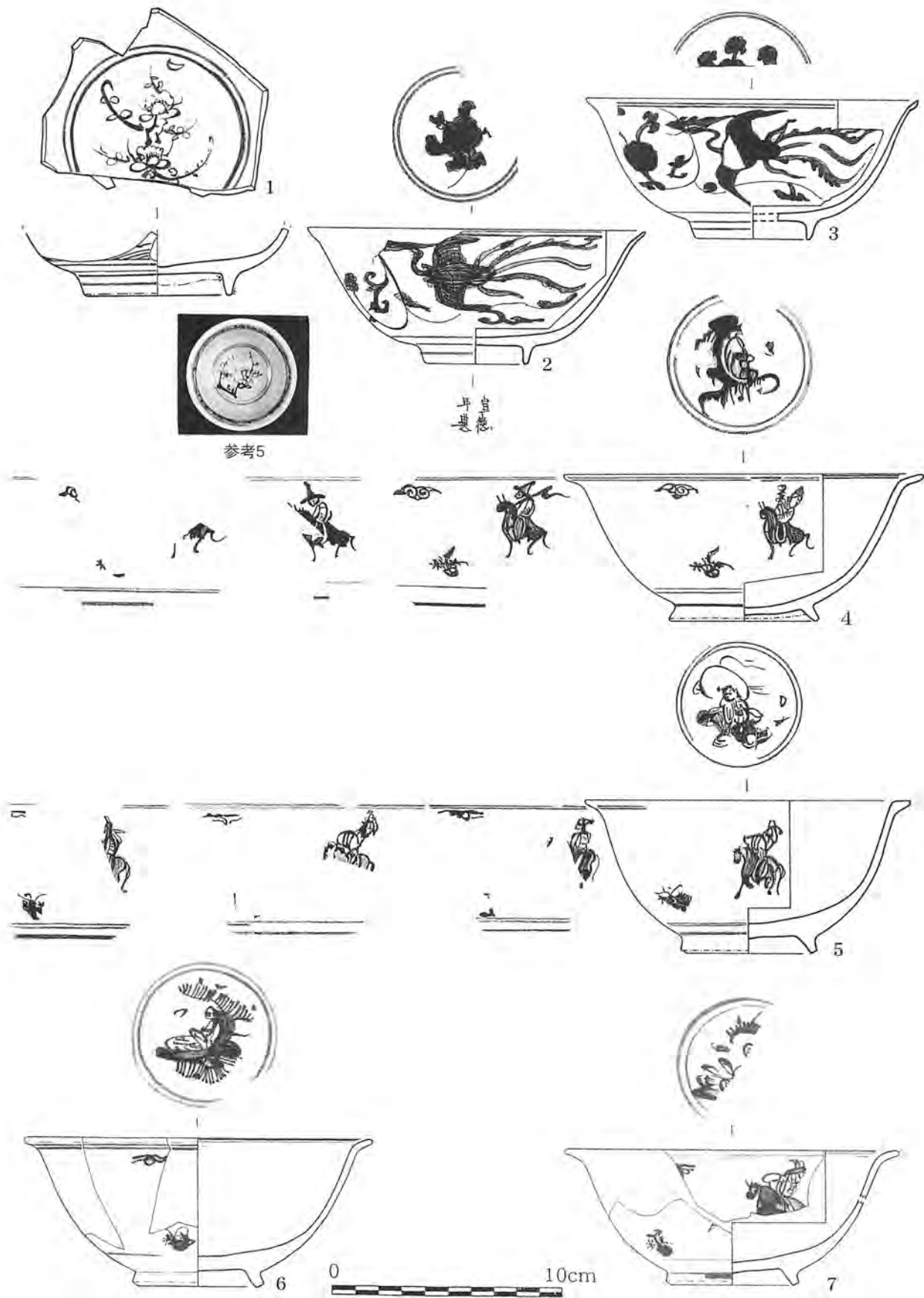
参考図版出典（第2図～第10図）

- 参考1. 『世界陶磁全集13—遼・金・元』 小学館 1981年
- ” 2. 藤岡了一『陶磁大系42明の染付』 平凡社 1975年
- ” 3. 同上
- ” 4. 方李莉『景德鎮民窯』 人民美術出版社（北京）2002年
- ” 5. 参考2と同じ
- ” 6. 『中国陶磁全集19景德鎮民間青花磁器』 中国上海人民美術出版社+美乃美 1983年
- ” 7. 『明代陶器全集』 藝術家出版社（台北） 1983年
- ” 8. 参考6と同じ
- ” 9. 参考2と同じ
- ” 10. 参考6と同じ

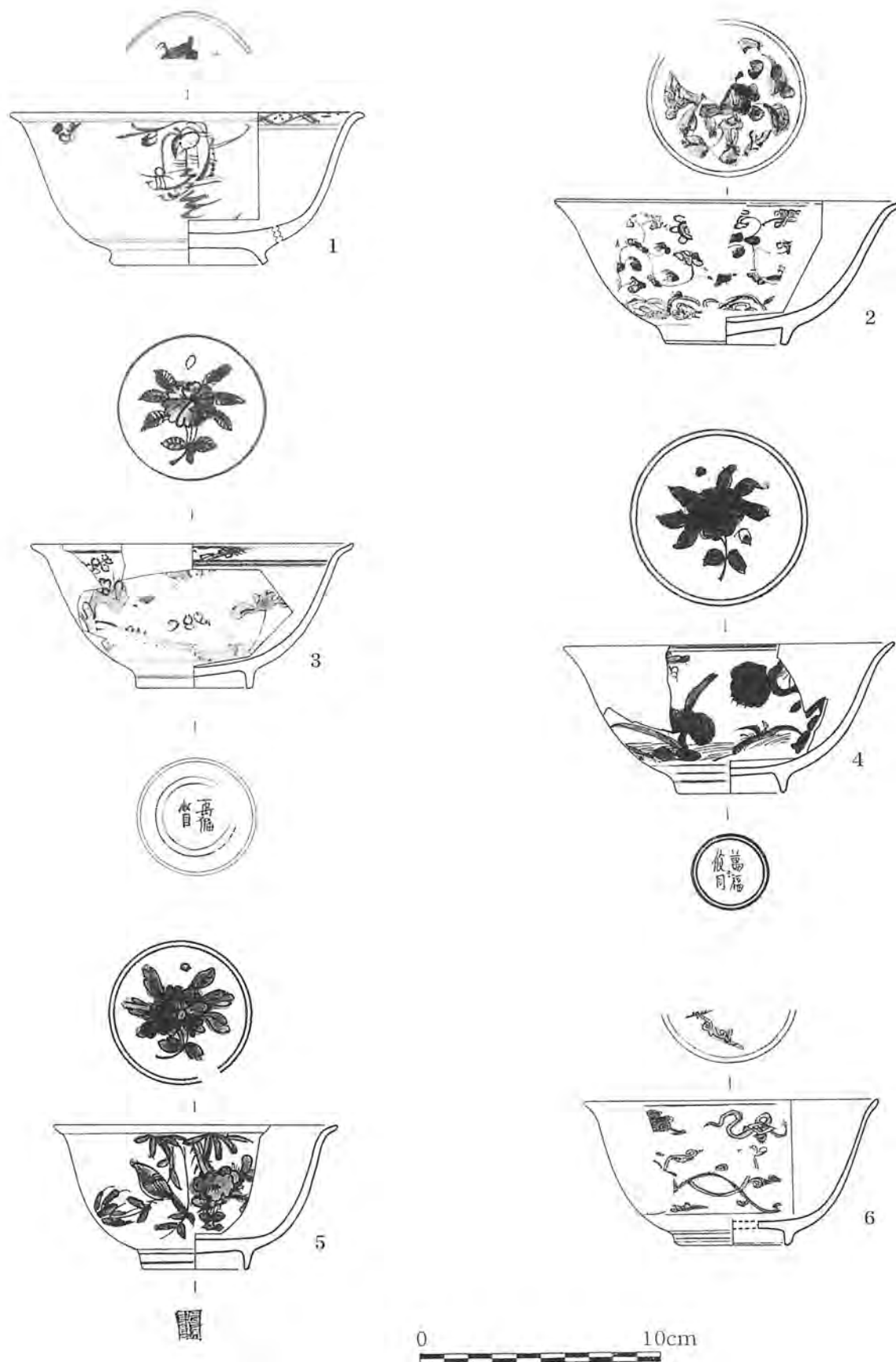
- 註1. 金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』 今帰仁村教育委員会 1991年
- 2. 金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』 今帰仁村教育委員会 1983年
- 3. 第1図1～6・10は亀井明德代表の研究チームの作図『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』今帰仁村教育委員会 2007年
- 4. 金城亀信・上原静・城間肇他『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書—』 沖縄県教育委員会 1998年
- 5. 金城透・瀬戸哲也・片桐千亜紀他『首里城跡—二階殿地区発掘調査報告書—』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005年
- 6. 亀井明德・高島裕之・新島奈津子・山本文子・柴田圭子他『亜州古陶器研究Ⅲ』 亜州古陶器学会2008年
- 7. 亀井明德・柴田圭子・高島裕之・新島奈津子「今帰仁城跡出土青花磁の研究」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』 今帰仁村教育委員会 2007年
- 8. 亀井明・島裕之・新島奈津子・山本文子他『具志川城跡発掘調査報告書Ⅰ』 沖縄県久米島町教育委員会 2005年
- 9. 矢部良明「日本出土の元様式青花磁器について—沖縄、とくに勝連城の出土品を中心に—」『南島考古』第4号 沖縄考古学会 1975年
- 10. 馬希桂『中国青花磁』 上海古籍出版社 1999年
- 11. 中国明代の資料で、日本史料集成編纂会編『中国、朝鮮の史籍における日本史料集成明實録之部（一）』 国書刊行会 1975年
- 12. 和田久徳「琉球国の三山統一についての新考察」『人文科学紀要第二八巻 第2冊』お茶の水女子大学 1975年
- 13. 『中山世譜』伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編纂『琉球史料叢書』四 東京美術1972年
- 14. 『今帰仁村史』今帰仁村史編纂委員会 今帰仁村役場 1975年



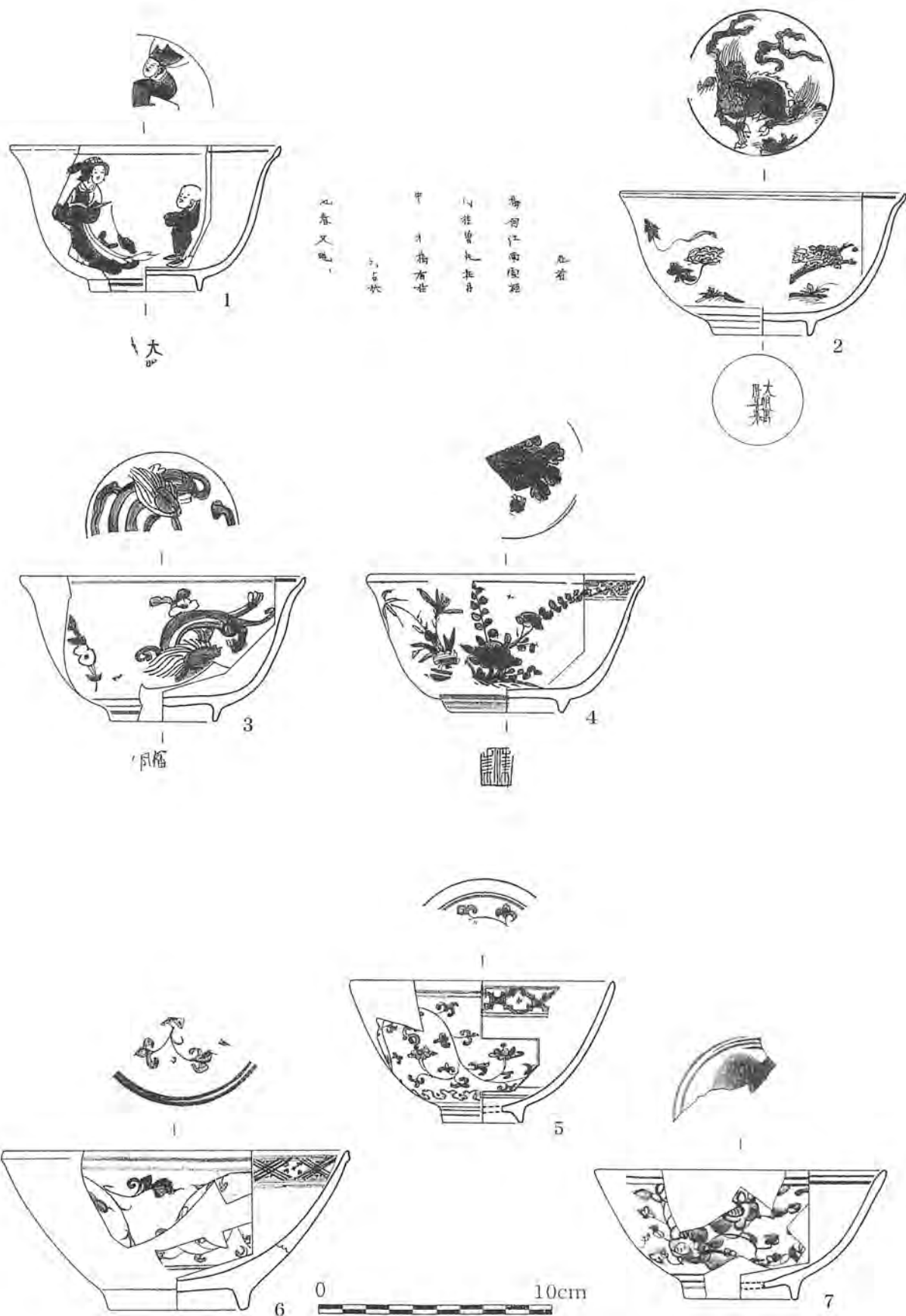
第2図 明青花外反碗：Ⅰ類a (1・2)、Ⅰ類b (3・4)、Ⅰ類c (5)、Ⅰ類d (6~8)。



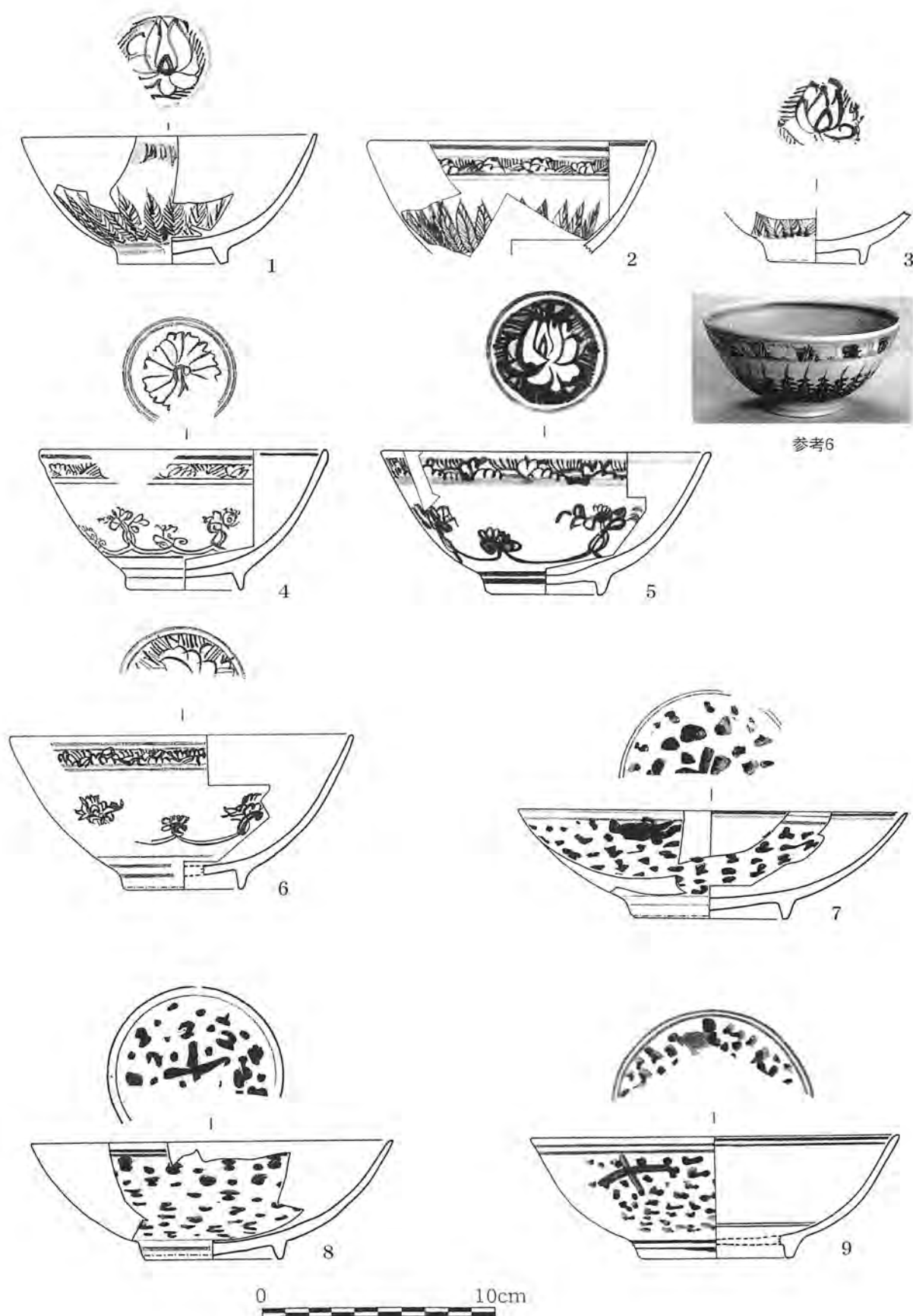
第3图 明青花外反碗：I类e（1~3）、II类（4~7）



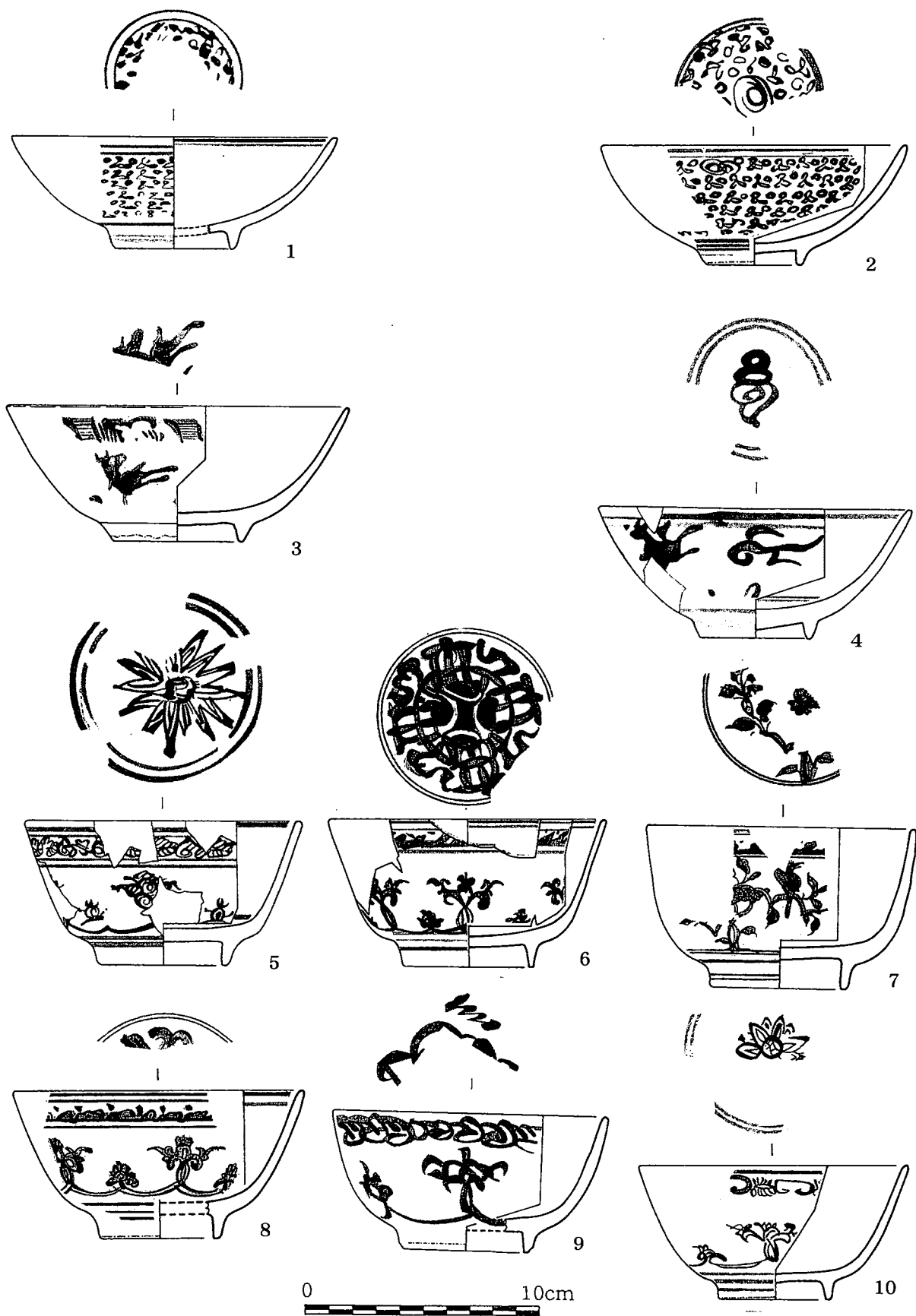
第4図 明青花外反碗：Ⅱ類 (1)、Ⅲ類 (2~4)、Ⅳ類 (5・6)



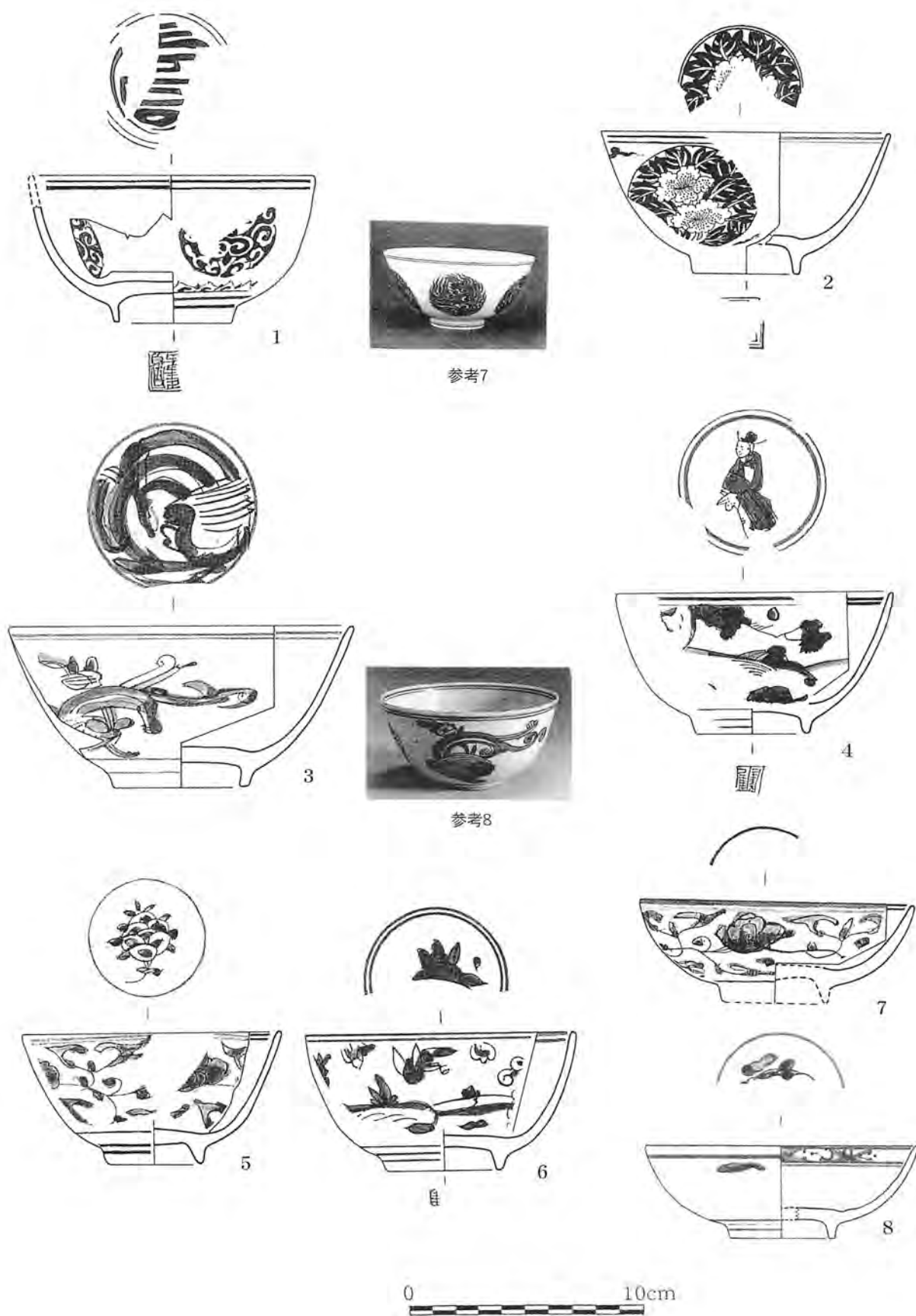
第5图 明青花外反碗：V类（1~4）、明青花直口碗：I类a（5~7）



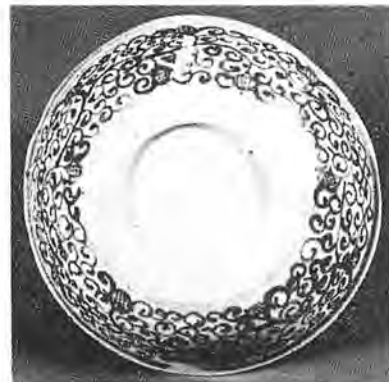
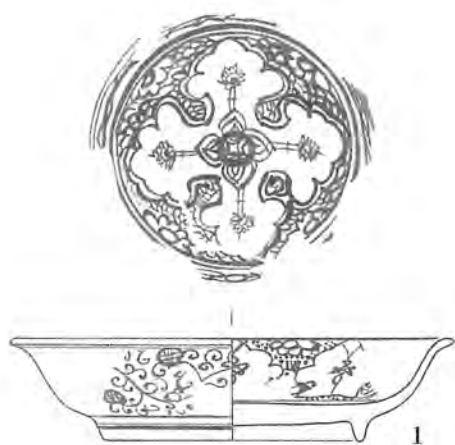
第6图 明青花直口碗：I类b（1~3）I类c（4~6）、I类d（7~9）



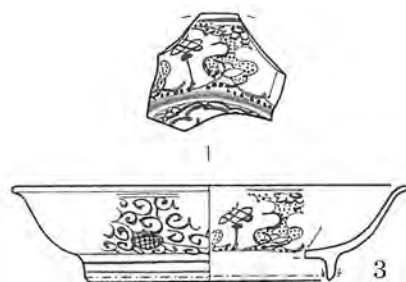
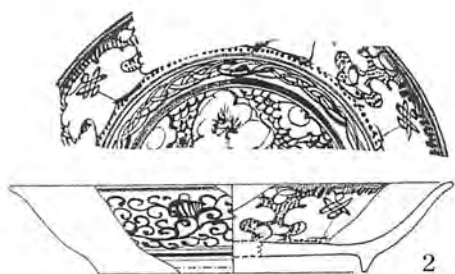
第7図 明青花直口碗：Ⅰ類d (1・2) Ⅰ類e (3・4)、Ⅱ類a (5~10)



第8图 明青花直口碗：Ⅱ类b（1~6）Ⅱ类c（7·8）

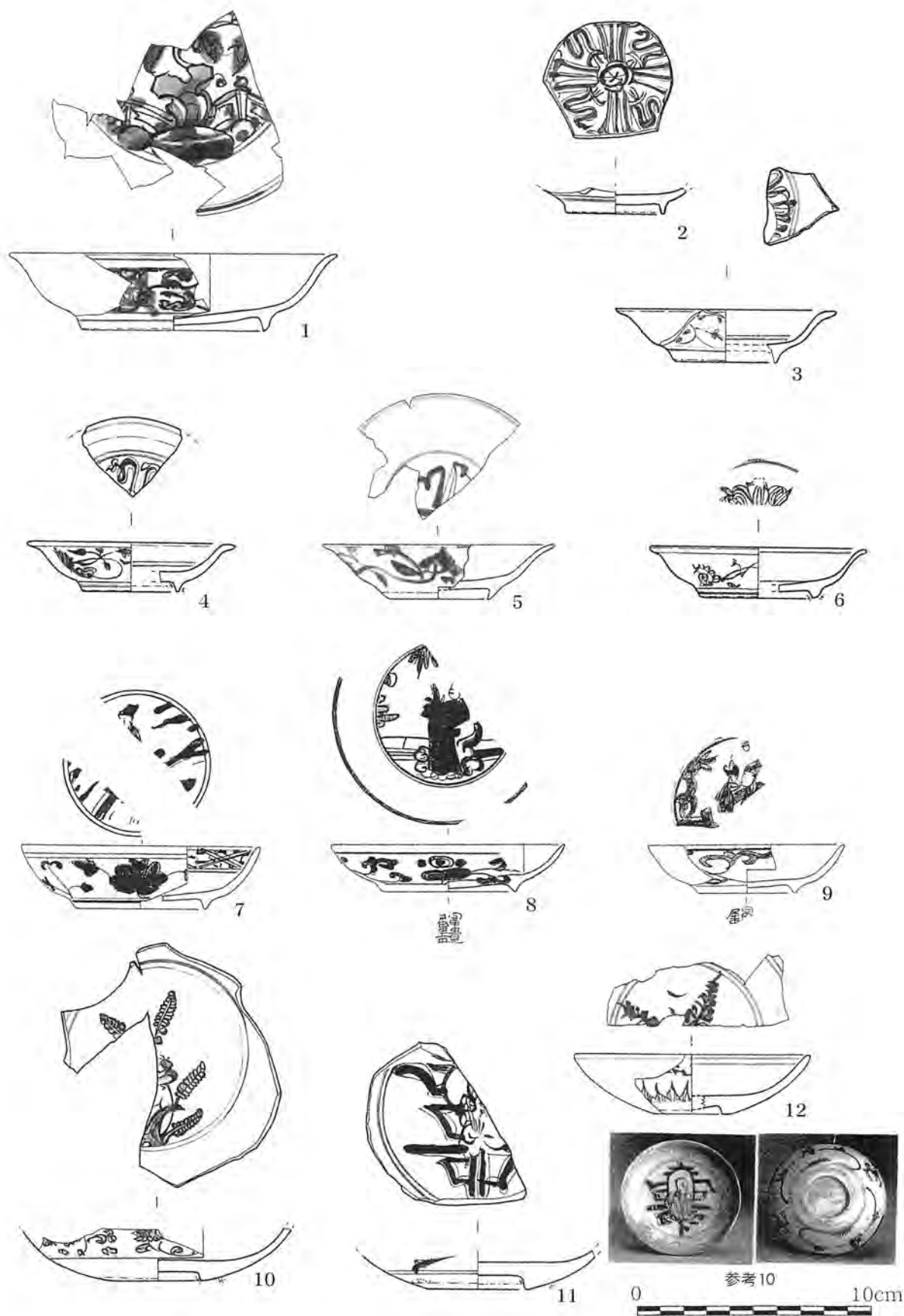


参考9

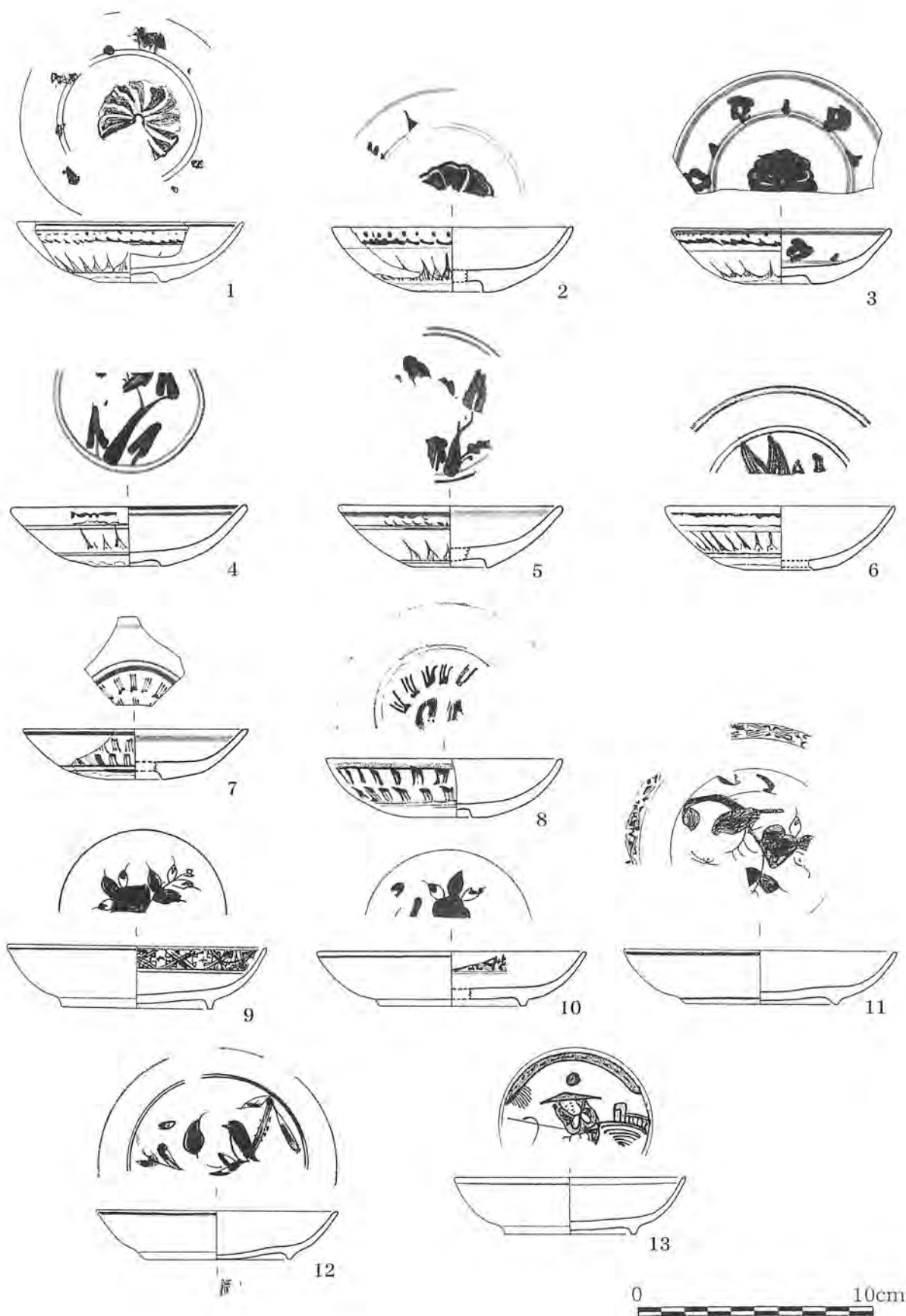


0 10cm

第9図 明青花外反皿：Ⅰ類（1～3）Ⅱ類（4～7）



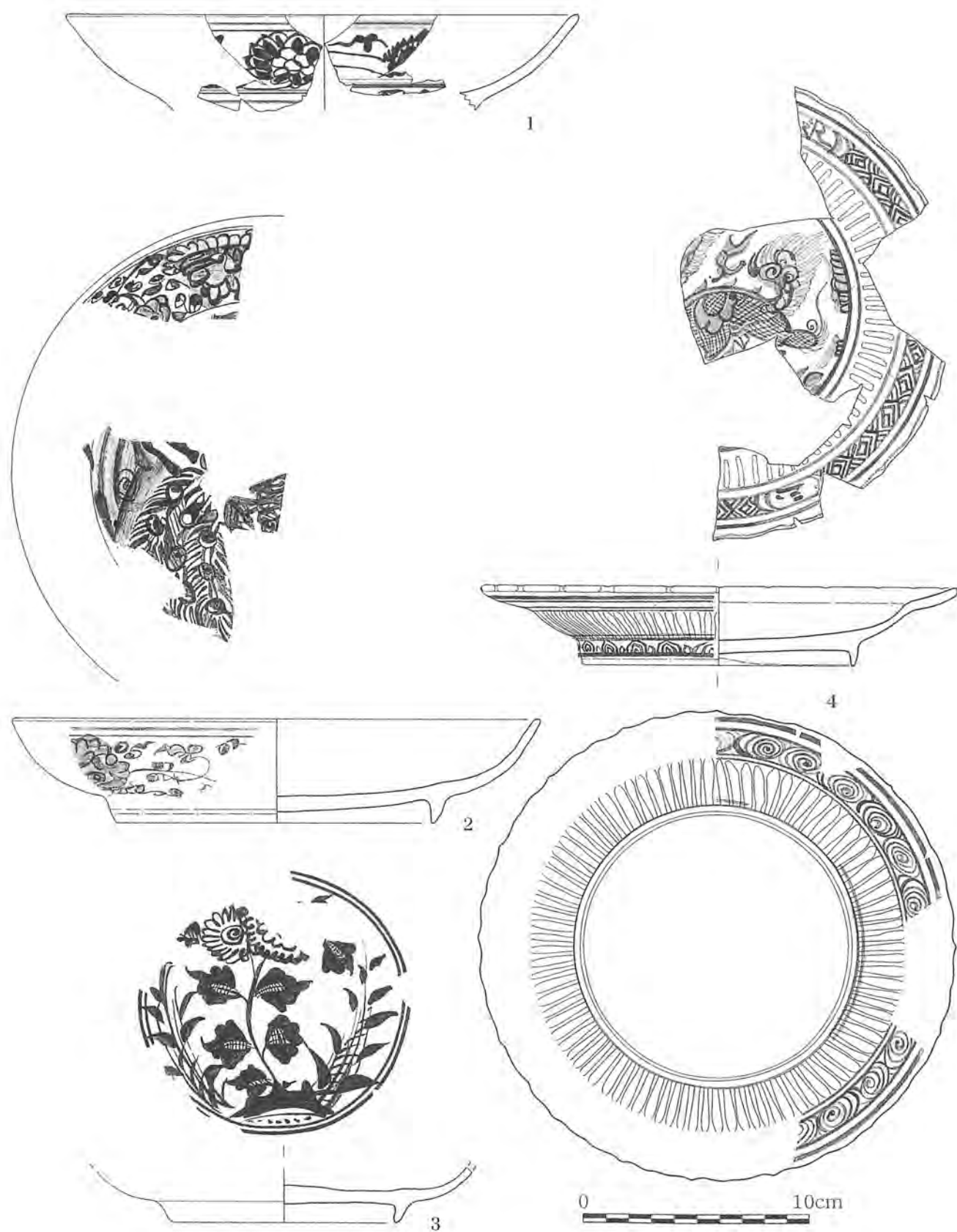
第10图 明青花外反皿：Ⅱ類 (1)、Ⅲ類 (2~6) 明青花直口皿：Ⅰ類 (7~9)、Ⅱ類 (10~12)



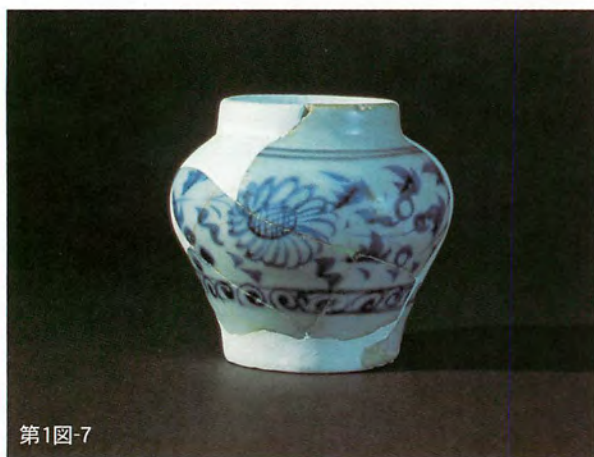
第11图 明青花直口皿：Ⅱ类（1~8）、Ⅲ类（9~13）



第12图 明青花：杯（1~5）、玉壶春瓶（6·7）、扁壶形水注（8）



第13図 明青花：直口盤（1～3）、鐐縁盤（4）



山北王時代の青花磁：第1図（1・2・5・7）、第2図（3・4・5）

第2節 今帰仁城跡出土明代前半期青花瓷の研究

柴田圭子（愛媛県埋蔵文化財調査センター）

高島裕之（駒澤大学禅文化歴史博物館）

新島奈津子（法政大学第二高校）

亀井明德（専修大学文学部）

半田素子（世田谷区遺跡調査会）

1. はじめに

今帰仁城跡の元様式の青花瓷については、2006年までに出土したものを対象に調査を行い、個々の資料を詳細に観察・記録し、個体数を把握し、出土傾向を分析した（亀井明德ほか2007）。その過程において、当初元青花瓷に含めていたもののうち明初までの幅でとらえるべき資料の存在が明らかとなり、本編をまとめることとなった。ここでいう明初とは洪武期から宣徳期までの時期である。またそれらの資料以外にも、今帰仁城跡からは罐、瓶、盤類といった大型の青花瓷が比較的まとまった数量出土しており、その中にも明初、あるいはそれに近い時期と判断されるものがあり本編で紹介することとした。

本編の構成は、各資料の解説、元青花瓷と明初との相違点に関する考察、明初の青花瓷に関するまとめから成る。また、大きくは15世紀代までに生産されたものとして理解される碗類が多数出土しており、それらに関しては大型品の年代を推定する過程で参照したが、全てを分類整理するには至っておらず、傾向をまとめることとした。

実測および執筆は分担して行ったため、項目ごとに文責を記載した。（柴田）

2. 個別資料解説

本項では、明初と考えられる資料について器種ごとに個別解説する。資料の番号は今帰仁村の所管する遺物台帳に拠っている。

盤

No.2 青花牡丹唐草文盤（第1図 図版1）

口沿部から体部下位まで復元できる盤である。文様や形態、釉調に共通性のある破片を同一個体とした。破片数は13片あり互いに接合しない。口径は復元値で36.2cmである。体部は深く丸みをもち、下半に至っても厚さは10mmでさほど厚みが加わらない。釉はやや青みを帯び透明で、鐳沿部に気泡、端部に釉切れが認められる。文様は外側面には牡丹唐草文、鐳に唐草文が配され、内側面に唐草文、鐳沿に卷草文が描かれる。内側面に描かれた唐草文の主文は、葉の形状から牡丹文か菊文である可能性があるが該当する破片がなくどちらとも決め難い。破片を復元配置するに当たっては、先に外面の牡丹唐草文の構成を推定して配置し、内面唐草文は文様構成が不明確であるため外面に合わせて配置している。鐳沿の卷草文の発色は薄く細い線で描かれ、側面の唐草文は濃く描かれる。牡丹と葉は太い線で輪郭を描き、中をだみ塗りしている。葉脈はやや太い線で描かれ、葉の先端に一筆付け足して表現している部分がある。茎は一筆で描いている部分が多い。青料中に黒っぽい斑が少数みられる。胎土は白灰色を呈する。主郭、東壁から多くが出土し、体部2片は志慶真門郭から出土した。

類例としては全く同様の資料を見出すことはできないが、本資料は体部が元青花の盤（亜州古陶瓷学会2008、p.46、fig.31・p.47、fig.32・p.193、fig.5）と比較すると丸みをもって深く、文様の卷草文や葉の描き方に元青花瓷と類似した特徴が見出せるものの、牡丹や葉が太い線で粗く描か

れており明初に下るものと判断される。内外側面に花と唐草文を配する構成は洪武期から宣徳期に一般的に認められるが、本資料は青料の発色が洪武期の特徴とされる灰暗色ではなく、また文様構成も洪武期独特の唐草文とは異なっており、それよりは下り永楽期から宣徳期に近い時期と考える。(柴田)

皿

No. 4 青花皿 (第1図 図版1)

同一個体の3片があり、発見位置はそれぞれ異なるが、器形・釉調・施文の特徴が共通している。口径15.6、器高2.0cmに復元できる碟である。口沿の内側を肥厚し、反転気味につくり、露胎の平底に糸切り痕があり、焼成時に付着した黒色ゴマ状の炭化物がのこる。内側面にみられる文様の原体は巻草文とみるが、現状は波文ないし半弧文の連続にすぎない。釉は厚めにつけられ、ピンホールがみられ、白ないし青灰色である。(亀井)

No. 5 青花皿 (第1図 図版1)

次のNo.6 匜と類似しているが、器形と施文が異なる別個体とみる。体部中位以下は露胎であり、褐灰色をみせている。体部内側に、楔状の文様が斜行に施されている。口径15.7cm。(亀井)

高足杯

No. 46 青花高足杯 (第1図 図版3)

高足杯の脚部である。上位に段があり裾部は広く開き、端部は内外面ともに幅広の面取りを行う。施釉後に削りにより面取りを行っており、面取りを行った部分から内側にかけては露胎となる。釉葉は青味を帯びピンホールがみられる。段の下と裾部に圈線を巡らせる。段の下の圈線は濃く滲みがある。裾部の圈線は発色が薄く不鮮明である。上面に杯部の接着が認められる。胎土は褐色がかった灰色で陶質に近く、黒色粒子を含んでいる。志慶真門郭出土。

形状が類似しているのは出光美術館蔵の樓閣人物文高足杯(出光美術館編1987、no.635)が脚上部に段を設ける形態に共通性があり、個人蔵として紹介されている青花鳥雀文高足杯(穆青他2000、p.102、No.124)は本資料と圈線も共通し、外反形態の杯部が付く。これらから本資料は直上に杯部を接着させていたと考えられる。類例は永楽期から宣徳期であり、本資料もほぼ同時期と考えておきたい。(柴田)

No.47 青花高足杯 (第1図 図版3)

高足杯の脚部である。No.46とほぼ同様の器形であるが、釉葉の青味が強く、ピンホール、気泡が多く見られる。圈線は脚部最上部と段直下、裾部近くに巡らせる。青料の発色は薄く、特に裾部近くの圈線は淡く不鮮明である。脚部内面は無釉だが釉が入り込み2箇所で塊状となっている。胎土は白灰色を呈する。形状の類例はNo.46と同様である。(柴田)

匜

No. 6 青花匜 (第1図 図版1)

B-2Ⅱ出土。体部中位から底部をのこす略描型式の匜の破片である。体部内側には、渦巻文に簡略化した花文を数箇所にかけて配置し、口沿の内外には連続弧文ないし巻草文、内底部には花文の一部がのこっている。釉は白灰色で濁っており、やや上げ底状につくる外底は、灰白色を呈し、ナデの調整痕がみられ、周縁には砂と炭化物が付着し、体部との境目には削りの痕跡がある。(亀井)

長頸瓶

No.60 青花牡丹・宝相華唐草文長頸瓶 (第1図 図版1)

既報告の資料(今帰仁村教委1991, pp.220-221, 第67図(PL.82)-3)であり、新たに同一個体として増えた破片を含め、復元図を作成した。底径5.2cm、頸部下から底部にかけて残存する破片で、総数5点である。出土地点は、主郭B-1区Ⅱ層5-10(1)、C-1区Ⅱ層20-25(1)、D-1区(1)、Ⅱ層下部(1)、主郭東壁表採(1)、東壁フルイ(3)、K-32(1)、東斜面(1)、志慶真門郭第5BテラスⅡ層15-30(1)、第6AテラスⅢ層0-5(3)である。()内は接合前の注記による破片数。

底部の作りは平底で、接地面を除いて内外面共に基本的に施釉されている。底部の露胎の部分は、赤化している。頸部および胴部と腰部との接合痕の残る破片があり、その部分は突起し、釉切れもみられる。また接合部内面には、接合の際の粘土屑が付着している。

文様帯は頸部の回文、肩部の祥雲文、胴部の牡丹と、宝相華唐草文、腰部の変形蓮弁文である。花の形は2種類みられ、回文の描き方は元様式青花瓷器には確認できない連続する反転形である。青色顔料は、全体的に黒ずみ滲んでいて、とくに花の部分は判然としない。この瓶と同じ文様の別個体の長頸瓶が、今帰仁ムラ跡(屋敷地5)で、出土している(今帰仁村教育委員会2008, p.32, 第21図-134, p.98, 図版9)。

また類似文様の描かれ方の瓶は、詳細な地点は不明であるがフィリピンの出土例にみられる(写真1, Larry Gotuaco, Rita C. Tan, Allison I. Diem 1997, p.112, M2)。その資料の年代は宣徳-正統期が推定されていて、写真でみるとフィリピン出土例は、底部に高台がある点など成形が部分的に異なるが、文様構成などは共通すると考えられ、No.60も同じく15世紀前半の年代が考えられる。(高島)



写真1

No.68 青花松竹梅文長頸瓶 (第1図 図版2)

それぞれ胎土や釉調、厚さ、文様の特徴が類似することから同一個体と推定した。接合を終えた段階で、長頸瓶の破片が8片確認できる。これらの破片は頸部から胴下部分までが確認できるので、文様構成や器壁の厚みなどから判断し、図上復元した。

胴下部に最大径をもち、ゆるやかな丸みを帯びた長頸瓶である。胎土は白色で、釉はわずかに青みを帯びた透明釉を内面に施す。青料は鮮やかな青色を呈し、濃淡が明瞭である。接胎については、内面に施釉されていることや、器壁の厚みが元青花瓷と比べて極端に変化しないことなどから、不明瞭ではあるが、頸部と胴下部の2箇所と推測する。

文様は、上から蕉葉文、波涛文、唐草文がおかれ、松竹梅文を主文様にしている。松竹梅文の上下にはそれぞれ二重圈線を配され、区画している。底部付近には変形蓮弁文が描かれている。瓶の文様について、元青花瓷との比較は考察部分で詳しく述べる。主文様の松竹梅文は、元青花瓷と比較すると空白が多い構図となっている。これらの破片は主郭から主に出土し、類列として故宮博物院蔵の青花竹石芭蕉文長頸瓶(写真2、耿宝昌編2000, p.35, no.33, 高32, 8)がある。(新島)



写真2

No.69 青花蓮池文長頸瓶 (第1図 図版2)

頸部下から腰部までの破片で、総数12点である。出土地点は、主郭A-2区Ⅱ層10-15 (1)、B-2区Ⅱ層5-10 (1)、C-2区表土 (1)、Ⅱ層0-5 (1)、5-10 (2)、10-20 (3)、C-3区Ⅱ層30-40 (1)、主郭東壁表採 (1)、東壁フルイ (3)、西壁内 (1) である。() 内は接合前の注記による破片数。

内外面共に施釉され、透明釉は青味を帯び、頸部下部分の内面には、ナデ調整痕が顕著に残る。頸部および胴部と腰部との接合痕の残る破片があり、各々の接合面に釉葉の入り込んだ痕跡が観察できる。また外面には土錆が付着する破片もある。

文様は二重圏線の下に蓮花、および水草文を描き、その下に波の飛沫と青海波を組み合わせた波濤文を配置する。全体的に青色顔料は濃紺色であり、やや滲み黒ずんでいる。蓮花は、器面全体に上下に配置され、蓮葉、蓮実の表現もみられる。花全体の残る破片は確認できなかったが、花の形は梅沢記念館品に類似している (写真3、藤岡了一1975、p.104、図54)。また蓮花と波濤の組み合わせは、景泰末期から天順期と考えられている青花蓮池荷花碗 (写真4、故宮博物院蔵、耿寶昌1993、p.85、図147) にみられ、15世紀中葉から第3四半期前後の年代が考えられる。(高島)



写真3



写真4

No.40- 1～3 青花瓶 (第2図 図版4)

No.40- 1 は口沿部片で外面に2本の圏線が巡り、青料の発色はやや薄く、透明釉が掛かる。胎土は白色緻密である。

No.40- 2 は頸部片で内外面施釉。釉は透明で、青料の発色はやや薄く、胎土は白色緻密である。頸部の圏線の上下に花 (唐草) 文が描かれている。

No.40- 3 は胴下部片である。外面に立てつけで渦巻文が描かれる。青料の発色はやや薄く、釉はやや青み帯びる。胎土は白色緻密である。(半田)

水注

No.44 青花如意頭状窓人物文水注 (第2図 図版3)

胴部上位から底部にかけて復元できる水注である。破片数は23片で、接合後8破片となった。如意頭状の窓 (開光部) 中に人物文が描かれ、窓外の周囲に牡丹唐草折枝文を配する。窓がある面が平坦となり扁壺に近い形態であるが、高台はほぼ円形で径8.0-8.3cmである。器形復元の参考

としたのは首里城跡京の内跡S K 01出土瑠璃釉水注（報告では仙盞瓶・沖縄県教育委員会1998、p.194、第70図）である。ただし注口部の形態に違いがあり、本資料では注口と胴部が接着する部分は扁平で膨らみが少ない。

注口部が接合する部分の胴部は内面を全面施釉後に穿孔を施しており、穿孔部は露胎となっている。注口部も内面は露胎であり、縦方向に深い亀裂が入っている。把手は全て失われているが、3箇所の円形突起をもつ貼り付け痕跡が看取できる。器壁はおおむね厚さ4-6mmで、底部は6mmである。胴部中位に接合部分があり器壁が8mmと厚くなっている。高台はやや外開きで、高さが外側で12mm、厚さは7mmと厚く、畳付両側面下端を粗く面取りする。窓の境は削りにより浅い段を設けている。釉薬は基本的に内外全面にかけられ、前述の注口接合部と注口内面が露胎、畳付は削り取りであるが削りが不十分な部分が全体の3分の1程度観察できる。青料は淡い色調で、線が重なった部分が濃く発色しムラがある。

文様は二つの窓内に異なる人物文を配し、窓外の左右に上下2段の牡丹唐草折枝文を描く。窓は縁取る段に沿って二重圏線で画し、双方ともに窓内右手に松と竹を描き、松の枝の下に人物を配する。片面は水面に釣り糸を垂れる文人とみられる姿であり、今一方は童子を連れ杖状のものを持った人物が描かれている。松は幹と枝の輪郭を線で描き樹皮は不定形の鱗状、松葉は線を放射状に配し楕円形に描いている。人物や波の表現は細い線を用い一筆描きのように簡易である。牡丹唐草文は牡丹を中心に上方に向かう唐草を組み合わせている。花卉や葉は輪郭を一枚ずつ描き、花は輪郭線を太く、その内部は淡く青料をいれている。注口部の縁から下端には如意頭文の縁取りを配する。

胴部最下部から高台には4条の圏線を巡らせている。胎土は白灰色である。主郭、東壁から多くが出土し、志慶真門郭からも一部出土している。

本資料と同様に水注という器形で窓内に主文を描くものは、故宮博物院蔵青花折枝花果文水注（耿宝昌主編2002、pp.48-49、No.19）や上海博物館蔵青花折枝花果文水注（写真5、周鑾書主編1998、p.47）等類型化されたものが永樂期から宣徳期にかけて存在している。それらと本資料を比較すると窓の形態が異なるものの二重圏線で画し主文様を描く点や、窓の周囲に牡丹唐草文を配すること、注口基部を如意頭形の二重圏線とすること、把手貼り付け部の形態などが共通点として挙げられる。しかしそれらの資料は長頸瓶形であり、窓の部分が扁平で扁壺となる本資料とは形態に若干違いがある。胴部形態が一致する資料として



写真5

は、宣徳期の四川省成都市明隆慶太監墓出土の青花竜文水注（四川省博物館蔵、周鑾書主編1988、p.93）があり、注口や把手の形態が特殊であるものの窓の形態は同じである。また、青花ではないが首里城跡京の内S K 01出土紅釉水注と瑠璃釉水注が形態としては最も近く、胴部が扁壺気味となる点や窓の形態も一致しているが、これらは元の資料として紹介されているため一定の留保が必要である。ただし、比較資料として長頸瓶形の高台の形態に着目すると、元青花は貼り付けで高く外開きの形態（亜州古陶瓷学会2008 p.116 fig.166・p.118 fig.170）であるのに対し、15世紀前半から中葉のものは削り出しで直立する形態に変化しており（沖縄県教育委員会1998、p.177、第62図）、本資料の形態は後者に類似する。

文様に関しては、人物文は簡略化されており直ちに比較できる資料を見出せないが、ここでは背後に描かれる松と、窓外の牡丹唐草文に注目してみたい。まず松であるが、元青花瓷に描かれるものは出光美術館蔵騎馬人物文罐（写真6、出光美術館編1987、no.143）にみられるように幹は太

く、全面に規則正しい鱗状の樹皮を表現し、枝が細く松葉は先細りの線を扇形に描いて表現する。これはトブカブ宮殿博物館蔵蓮池水禽文鉢（TKS15/1379、口径36cm）においても同様である。明初の資料では釉裏紅であるがロックフェラー3世夫妻コレクションの松竹梅文壺（写真7、長谷川祥子他1995、図23）において、幹は細くなり樹皮は全面に円形や二重丸を描き、松葉は線を放射状に配して円形となる洪武期の例が認められる。また永楽期とされる故宮博物院蔵・園景花卉文盤（耿宝昌主編2002、pp.82-83、No.40）では、幹が細くなり樹皮は全面に描かれず、松葉が太くしっかりと先端が太く円形に描かれている。宣徳期の上海博物館蔵の松竹梅文碗（写真8、周鑾書主編1988、p.109）では、枝はさらに細く折れ、葉はしっかりと描かれている。無論これらは器形も様々で、官窯、民窯



写真6



写真7



写真8

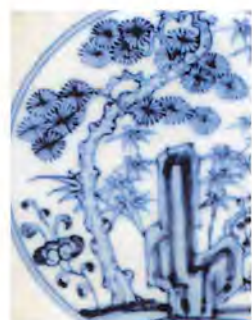


写真9

の違いもあるが、本資料の松の表現は永楽期から宣徳期のものと近いと思われる。それより下の資料では成化期の北京故宮博物院蔵の松竹梅文盤（写真9、周鑾書主編1998、p.153）のように幹の輪郭が細くこぶが強調されて描かれるようになり描き方が異なっている。また窓周辺の牡丹唐草文については、先述した永楽期から宣徳期の水注に描かれたものと最も類似しており、本資料は当該期の可能性が高く、少なくとも成化期までは下らない時期に位置づけられよう。（柴田）

蓋

No.13 青花花文蓋（第2図 図版4）

外面と一部内面やや青味がかった釉が掛かる。青料の発色は良好で胎土は白色緻密である。（半田）

No.31 青花広口罐蓋（第3図 図版4）

同一個体とみる5片があり、広口罐の蓋で、鈕・甲部・沿部がわずかにのこっている。最大径は23.4、器高は8.0cmに復元できるが、小片であり正確は期し難い。沿は波を打たない平沿で、わずかに反りがあり、丸い甲部へつづき、宝珠形の鈕を貼り付けている。罐身には2cmほど嵌入し、身受けの外側端部1cmほどは釉が削りとられ、先端部には炭化物が付着している。内面にも白色ないし、わずかに青みをおびた釉がかけられているが、天井部内面では釉がみられず、淡褐色を呈し、轆轤痕がある。鈕は、卍字形に青料で描かれ、基部に圈線がまわっている。甲部破片の左側は、端部を反転させた葉文、その右は花文とみるが、靈芝形を呈して唐草文につくるのであろうか。二重圈線を挟んでつづく沿部には卷草文と花文をはさむ意匠のように想定できるが、小片のためにその全体の状態はわからない。全体に蓋としては肉厚である。これらの破片は、第6AⅢ10-15、同A-Ⅱ、4次東壁などから検出されている。施文は、いわゆるつけ立てであり、幅広の箇所では内側に釉がたまっているので、濃く発色している。こうした描法は、明初青花瓷の発色に例がある。景



写真10

徳鎮窯珠山中路東段出土の永楽期と考えられている青花牡丹文長頸瓶を例示する（写真10、炎黄芸術館編1999、no.41）。(亀井)

No.74 青花(菊)唐草文蓋(第2図 図版3)

子母口となる平蓋で、C-2区・B-3区から出土した2片が接合する。胎土は白色で、黒色微粒子を多く含み、青みを帯びた透明釉を外面と内側途中まで施釉する。頂部内側の露胎部は黒色の微粒子が表面に付着している。青料は鮮やかな青色に発色し、濃淡が明瞭である。表面は熱を受け、土錆が付着している。受け口部分は釉が付着し、光沢をおびている。また、頂部には鈕が取れた痕が認められる。甲部は平らになり、執壺の蓋となるものと推測する。

文様は、蓋の頂に唐草文が置かれるが明瞭ではなく、葉文や花卉から菊唐草文と推測される。また甲部に唐草文が描かれるが、葉文が淡く文様が不鮮明である。元青花瓷蓋と比較すると、青白色の釉色や青料が鮮やかな青色に発色することは類似しているが、文様が全体的に不鮮明であり、筆致が明瞭に確認できない。(新島)

罐・梅瓶

No.8 青花宝相華唐草文罐(第3図 図版4)

残存するのは肩部から底部までの破片で、接合を終えた状態で、釉調、施文が同じ破片36点を同一個体とした。出土地点は、主郭表採(1)、主郭A-1区Ⅱ層5-10(1)、B-1区Ⅱ層5-10(1)、20-25(1)、B-3区Ⅱ層10-20(2)、20-30(1)、C-1区表土 石(1)、C-3区表土(2)、Ⅱ層10-20(1)、20-30(2)、30-40(3)、C・D-3区表土(1)、Ⅱ層(1)、主郭東壁表採(1)、Ⅰ層(2)、Ⅱ層(1)、東壁篩い(4)、東斜面表採(1)、旧道上(1)、大庭Ⅱ層黒色土層(1)、志慶間門郭第5テラスⅡ層10-15(1)、第6テラス表土(1)、第6AテラスⅡ層(6)、第6Bテラス表土、Ⅱ層(3)である。()内は接合前の注記による破片数。大きく分けると、主郭の調査区では17、東壁では6、志慶間門郭では11という数になり、主郭の調査区Ⅱ層を中心に出土するので、本来は主郭で使用され、廃棄された後に破片が拡散したと推測される。

破片を観察すると内底まで内面が施釉されていることから、罐の破片と推測できる。また肩部を段状にした破片は確認されていないため、罐の種類でも盤口となる獣耳罐形ではなく、直沿形の広口壺形が推測できる。推定底径は23.4cm、口径、高さは不明である。全体にかせて、釉面に白色粒子が浮き、土錆の付着や氷裂のみられる部分がある。また胎土中には不純物が混じり、黒色粒子が観察できる。内底の釉は、不均一で部分的にひび割れが入り、底部と腰部の接合部分は釉切れをおこしている。外底の露胎の部分は、中央に円状の削り調整痕が残り、高台の削り出しは粗く、接地部分は黒く汚れている。

文様帯は肩部、胴部、腰部に大きく分けることができ、腰部の蕉葉文部分を除いて、輪郭線の外側の地を青く塗る白抜き文の文様にしている。肩部の破片は6点で、文様は変形蓮弁文である。蓮弁全体の様相を明確に示す破片は確認できなかったが、白抜きで外枠を二重にし、側面に花卉状の表現がみられる。胴部の破片は22点で、文様は白抜きの宝相華唐草文である。全体像は不明であるが、葉を描く破片、葉および茎を描く破片、花卉および葉を描く破片がある。また上半と下半の境界に破面が直線的となる接合痕が確認できるため、各々の施文状況を確認し、厚さや接合部の位置との関係から、任意に図に配置した。

腰部および底部の破片は、8点である。各々の葉が独立し、葉脈を白抜きにした蕉葉文を描く。蕉葉文下の圈線は、他の圈線と異なり太く、やや不鮮明な形となる。円盤状の底部と、腰部の立ち上がりの部分は、接合の痕跡が確認でき、顕著な凹凸の杓穴組にしている。

胴部の主文様の類例としては、同じ器種ではないが、白抜きで葉の表現などに共通性がみられるフリーア美術館所蔵の「大明宣徳年製」銘の青花宝相華唐草文碗がある(写真11、



写真11



写真12

ジョセフィン・H・ナップ他編1975、図版103)。白抜きの牡丹の例は、出光美術館所蔵のエジプト・フスタート遺跡出土破片にも確認できる(写真12、藤岡・長谷部編1976、p.172.図176)。

No.8罐の花部分の全体像は不明であるが、花卉の先端が尖る形からみると、フリーア美術館品のような宝相華の形になると考えられる。

またこの罐のように、罐や梅瓶の腰部文様として蕉葉文を用いるのは、永楽期以降に一般的になるようであり、白抜きの変形蓮弁文は、宣徳期以降一般的に確認できる。したがってこの資料の年代は、宣徳期以降、15世紀第2四半期以降と考えられる。(高島)

No.28 青花罐 (第4図 図版4)

罐の肩部付近の突帯文であろうか。内外面に施釉され、若干の貫入が認められる。青料の発色は良好で、胎土は白色緻密である。(半田)



写真13

No.36 青花錦文口沿罐 (第4図 図版5)

口沿のみの小破片で、口径は復元できない。罐と推定した。盤口で、口沿がまっすぐに立ち上がり、端部は平坦で内外に肥厚する。ただし外面は欠損している。外面に六角形を繋ぐ錦文を描く。胎土は淡黄色で気泡がある。釉は外面が青味を帯び、内面は白色透明である。青料は濃い青色で、滲みがみられる。



写真14

罐の口沿部の文様として、元青花瓷では菱形繁文の例が多いようであるが、本例のような六角形繁文も少数ながらある。一例として、アルデビル廟旧蔵の牡丹唐草文耳付罐の口沿部を表示する(写真13、三杉隆敏1981、no.11)。この文様は明代に継続しているが、これ

に加えて、菱形繁文を上下に並列したり、より装飾的な六角形繁文が増加する傾向がある。器種は異なるが、故宮博物院蔵松竹梅文三足炉(写真14、耿宝昌主編2002、pp.230-231、No.118)の口沿に描かれた文様が本品に類似している。本資料は小片であり、この部分だけでは、元か明初のどちらかとも決め難い。(柴田)

No.7 青花蓮池文梅瓶 (第4図 図版5)

肩部から底部付近までの破片が出土し、組み合わせ、梅瓶として復元した。これらは器壁の厚みや胎土・釉調・青料の濃淡が類似する同一個体と推定される破片で、24片を数える。口沿部は残存しないが、肩部と底部の径や、破片の厚み、傾きなどから、小口で平底である梅瓶と判断した。

肩部と底部付近の径は、残存状況から復元することが可能で、推定肩径17.0cm、底径付近の径は11.4cmである。これを参考とし、各文様に沿って破片を配置した。最大径は肩下部にあり、胴部から底部にかけて窄まっている。大きく丸みをもって膨らむ肩部は厚みをもち、胴部にかけて薄くなり、胴下部から底部付近にかけて次第に厚くなる。内面の回転痕は明瞭に残っている。

胎土は、白色で黒色微粒子を多くふくみ、全体に緻密であるが、気泡が認められる。わずかに青

色を帯びた透明釉を外面に施釉し、内面は露胎とする。外面に氷裂が認められ、破片によって熱を受け、土錆が付着している。青料は濃青色に発色し、濃淡がある。接合痕は、元青花ほど明瞭ではないが、破片の割れ口などから認められ、頸部から肩部にかけてと、胴下部に確認できる。胴下部の接合痕は断面をみると凹状になっており、上下をはさむ杓穴組みと推測できる。

文様構成は、頸部と肩部に二重圈線を配置し、その間に花唐草文がおかれ、胴部の主文様は蓮池文である。以下、各部の文様をのべる。

肩部の花唐草文は、元青花瓷の唐草文と比較すると空白が目立ち、葉文は輪郭線を描いたあと丁寧に塗りつぶすことはせず、隙間が残っている。しかし、先端を尖らせる筆致にすることは元青花瓷と共通している。花卉は土錆や筆が太く滲んでいるため、明瞭ではないが宝相華唐草文の可能性はある。元青花瓷の場合、上下の圈線は淡く、唐草文を際立たせるように描かれていたが、明初青花の圈線は太く、唐草文と同じ濃淡にしている。

主文様の蓮池文は蓮花・蓮葉・浮草、水草、石が確認できる。文様は底部付近に水草や岩石がおかれ、蓮花や蓮葉がその上に伸びるように描かれている。蓮花は輪郭を描き、外側に隙間を残してダミ塗りになっているが、輪郭線の太さが一定していない。その太さが一定している元青花瓷と比較すると、明瞭に異なっている。また蓮葉も蓮脈を残してダミ塗りしようとしているが、白色の隙間ははっきりとせず、滲んでいる。

これらの破片の出土地点は、東壁が多く、12片が東壁から出土している。その他に、B地区が3片、A-2区、C-3・4区、D-1・3から検出されている。

類例として、青花蓮池水禽図瓶（写真15、藤岡了一他編1976、p.168、No.157）が挙げられ、復元の際に参考にしている。（新島）

No.9-1・2、12、14-1・2 青花宝相華唐草文梅瓶（第4図 図版5）

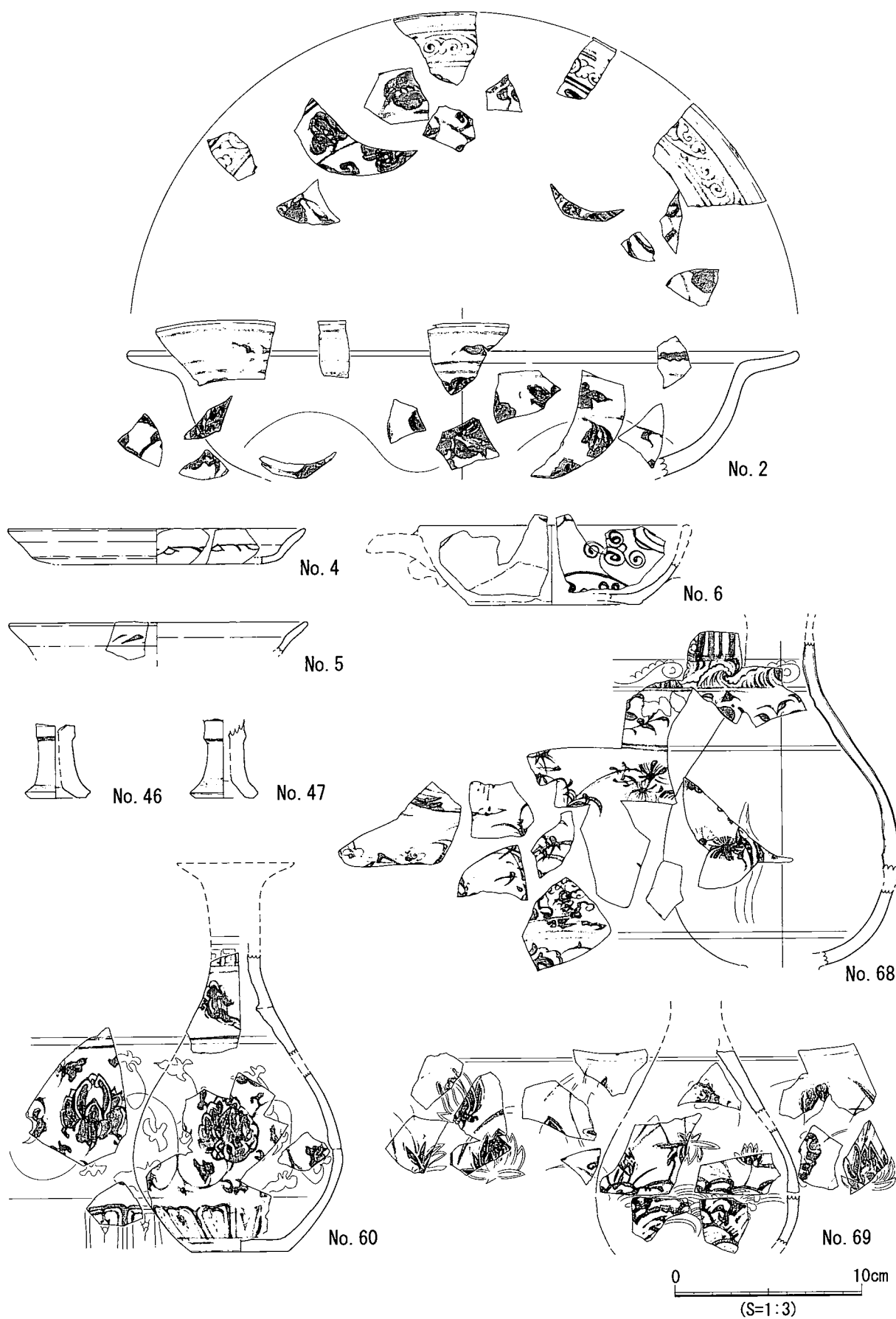
同一個体と思われる宝相華唐草文梅瓶の肩部一胴部片である。No.12は肩部、No.9-1・2、No.14-1・2は胴部である。No.12は一重の沈線の下に蕉葉文を、No.9-2は外面に宝相華花唐草文を描く。No.14の内面一部に施釉されている他は全て外面のみ、やや青味がかかった釉が掛かり、貫入が認められる。青料の発色は良好。胎土は白色緻密である。（半田）

No.10 青花牡丹文梅瓶（第2図 図版5）

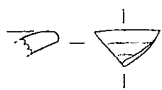
第5次主郭東壁表採。梅瓶胴部の破片であり、花脈を白く抜く表現であり、白地に濃紺色の発色もよい。内面は無釉で淡褐色の器肌である。No.7と施文・釉調が類似している。（亀井）



写真15



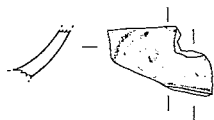
第1図 明青花実測図(1) 盤・皿・高足杯・匜・長頸瓶



No. 40-1



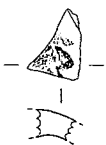
No. 40-2



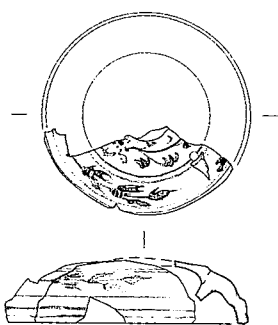
No. 40-3



No. 10

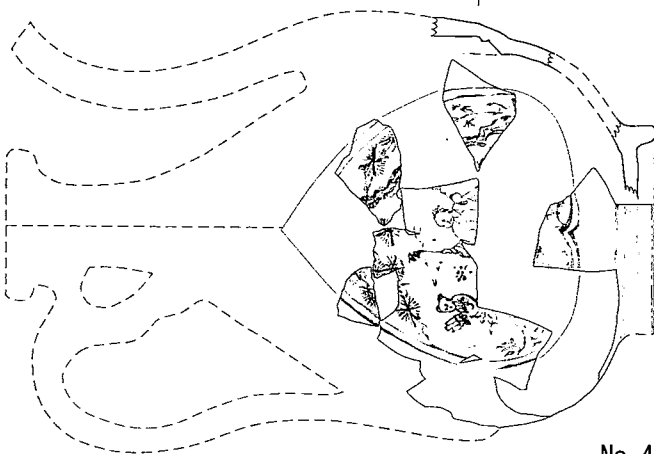
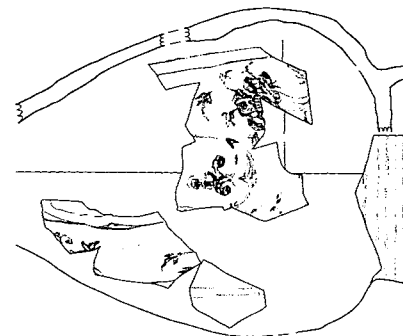
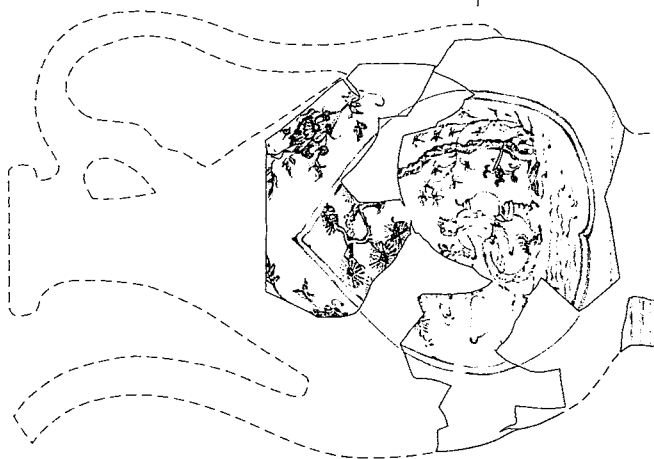


No. 13



No. 74

0 10cm
(S=1:3)

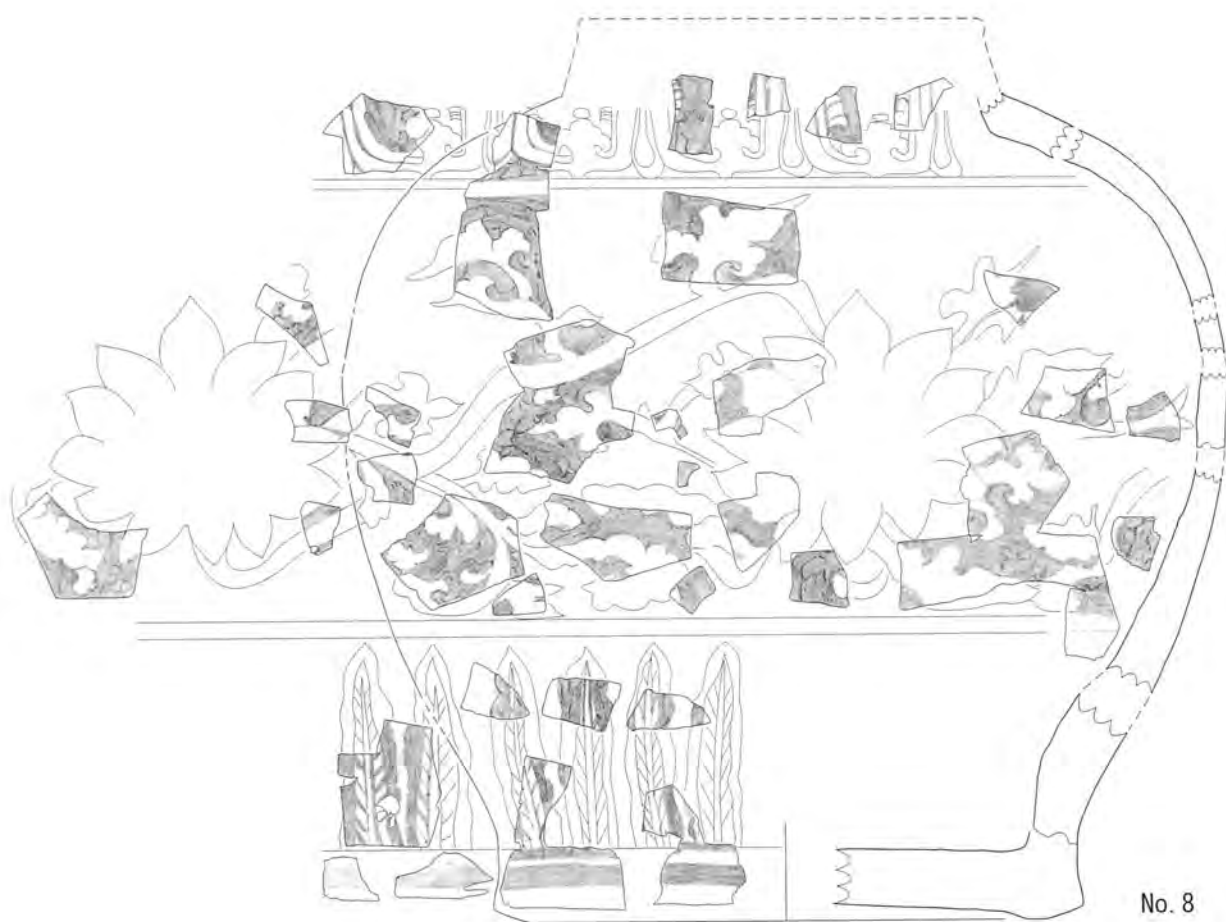


No. 44

第2図 明青花実測図(2) 梅瓶・瓶・蓋・水注



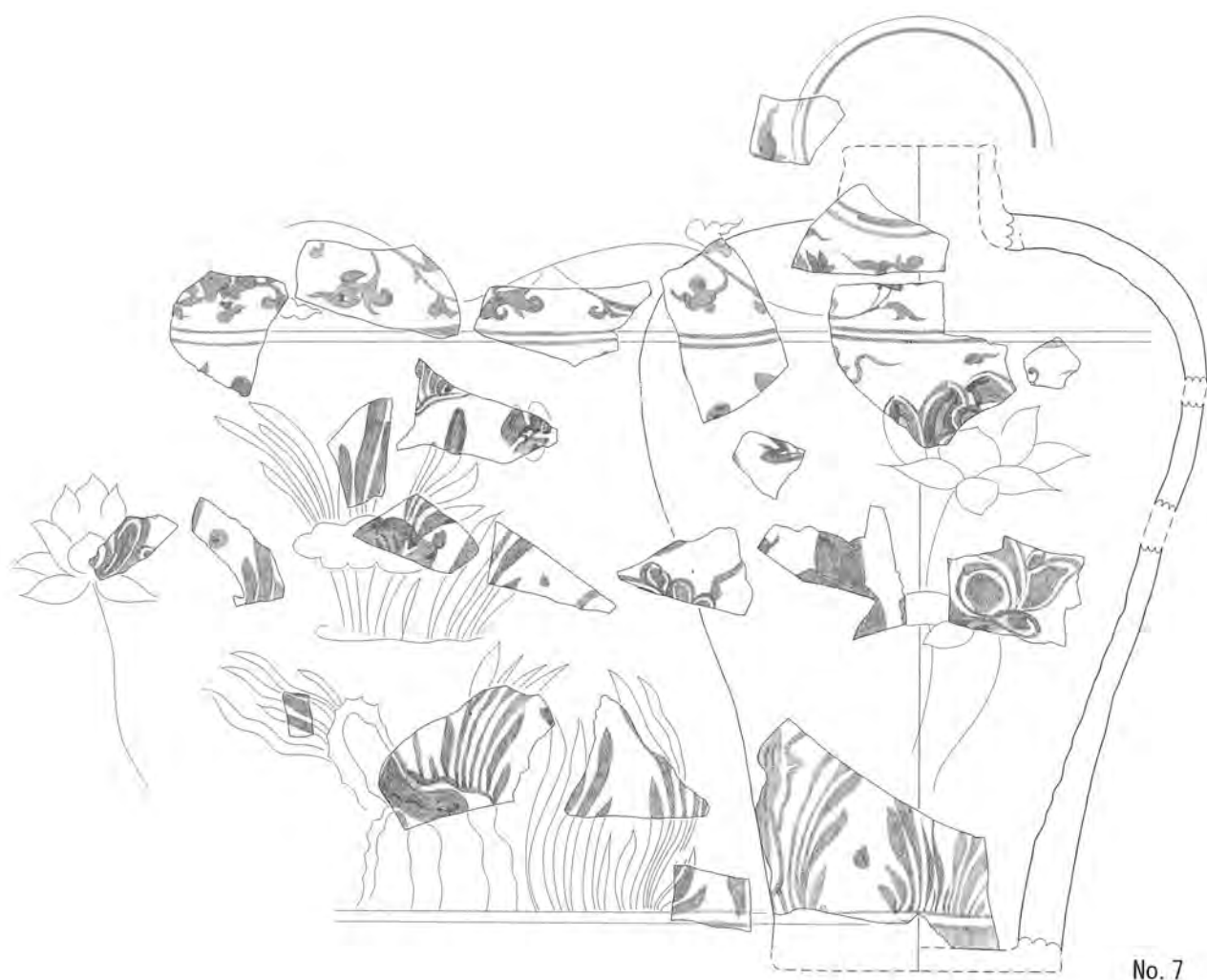
No. 31



No. 8

0 10cm
(S=1:3)

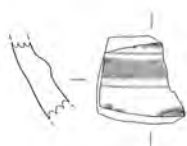
第3図 明青花実測図 (3) 罐蓋・罐



No. 7



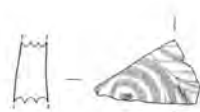
No. 36



No. 28



No. 12



No. 9-1



No. 9-2



No. 14-1



No. 14-2

0 10cm
(S=1:3)

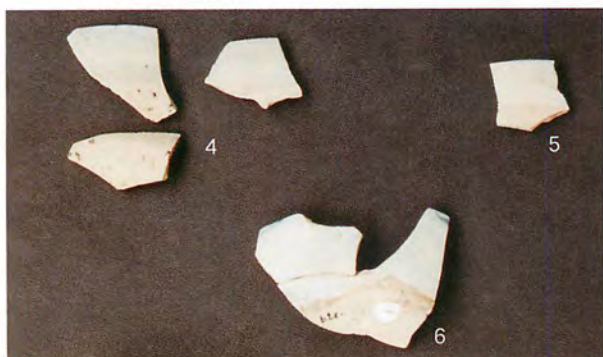
第4図 明青花実測図 (4) 罐・梅瓶



No.2 青花牡丹唐草文盤



同左内面



No.4・5 青花皿 No.6 青花匜



同左内面



No.60 青花牡丹・宝相華唐草文長頸瓶



同左内面



No.68 青花松竹梅文長頸瓶



同左内面



No.69 青花蓮池文長頸瓶



同左内面



No.44 青花如意頭狀窓人物文水注



同左



No.44 青花如意頭狀窓人物文水注



同左内面



No.74 青花(菊)唐草文蓋

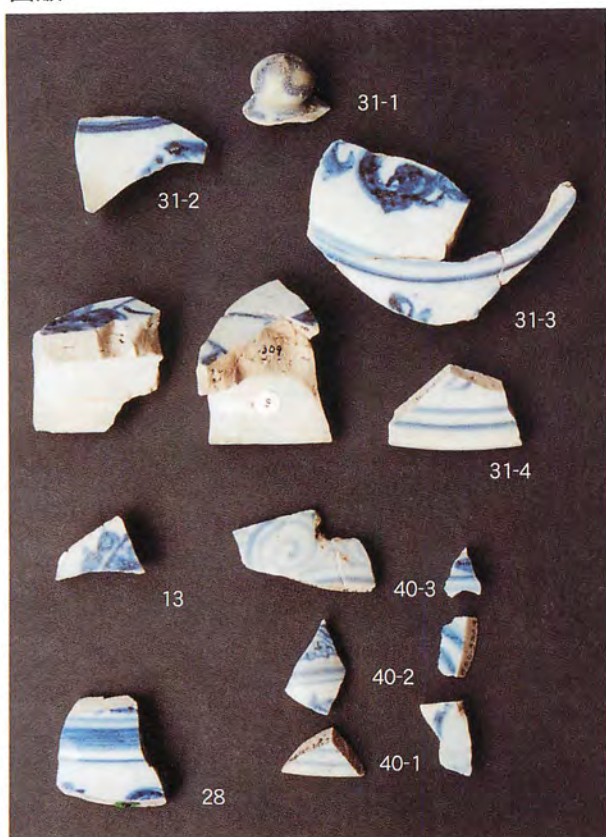


同左内面



No.46・47 青花高足杯

図版4



No.31 青花広口罐蓋、No.13 青花花文蓋、No.28 青花瓶、
No.40 青花瓶



同左内面



No.8 青花宝相華唐草文罐



同左内面



No.7 青花蓮池文梅瓶



同左内面



No.9・12・14 青花宝相華唐草文梅瓶、 No.10 青花牡丹文梅瓶



同左内面



No.36 青花錦文口沿罐

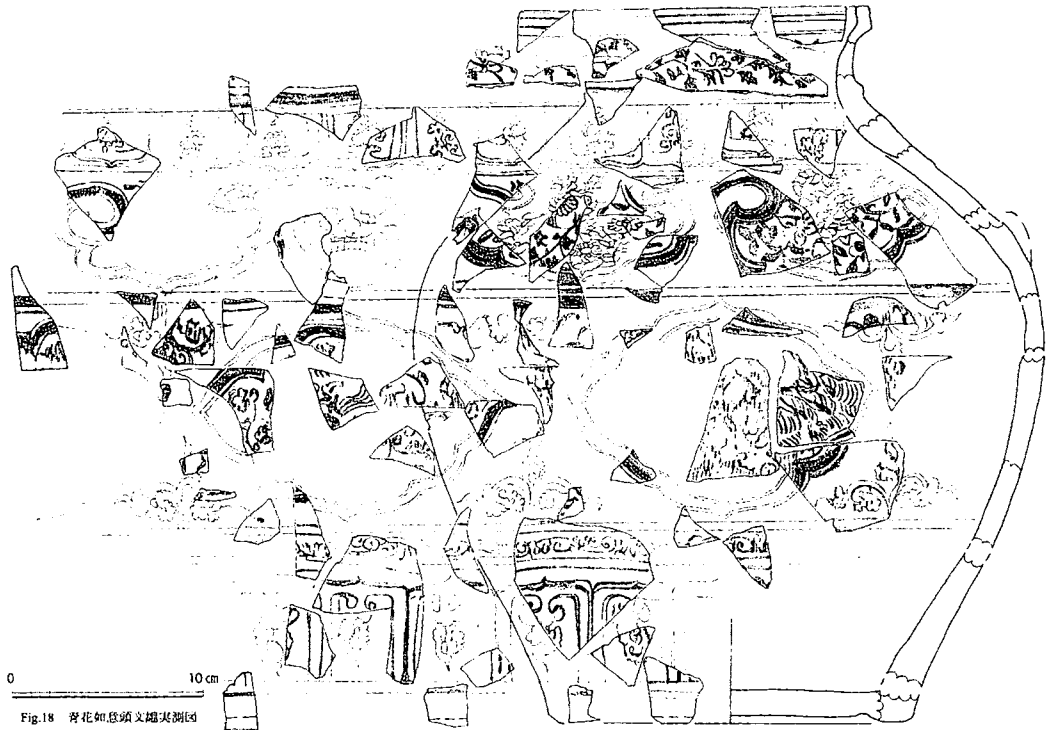


同左内面

3. 元様式青花瓷と明初青花瓷の相違点

今回の調査で個々に説明を加えたのは、当初元様式青花瓷器に含めて考えていたが、その後、異なると判断した資料が中心である。明初期以降、器種の種類が多様となるため、本項では、元様式と明初期との相違点について、両者に共通する器種ごとに、成形方法、施文方法をまとめていきたい。

(a) 罐・梅瓶



第5図 勝連グスク出土青花如意頭文罐（亜州古陶磁学会2008、p.160より）

<成形方法>

今帰仁城跡出土のNo.7梅瓶、No.8罐などの大型品について、元様式の資料と成形を比較すると、器壁の厚さの変化が大きい点や、接合箇所の痕跡が顕著である点が特徴として挙げられる。特に腰部の器壁は、それより上の部分よりも急激に厚くなる。堅牢な土台を作ること、上部の部品を支える意図があるのかもしれない。またこれらの器種の接合面は、はっきりとした凹凸を組み合わせる杢穴組で、接合の面積を大きくするなどの工夫がみられる。

また罐では内面の施釉の状況をみると、元様式の例よりも丁寧に全体を覆う例も確認できる。当初、「日本出土の元青花瓷集成」に加えていた勝連城跡出土青花如意頭文罐は、本文の中で至正型式と異なる特徴があることを指摘したが、この罐も内面全体が丁寧に施釉されている(亜州古陶磁学会2008,p.159)。今帰仁城跡出土の罐も、内底部に釉面のひび割れがみられるが、内面全体を施釉している。この特徴は他の器種でもみられ、長頸瓶でも内面を施釉する例がみられる。

<施文方法>

主文様に対して用いられる補助文様は、元様式と共通するが、明初期の資料では施描の状況やその使用法に変化がみられる。No.8罐に用いられている補助文様からは、次のようなことがいえる。

・蕉葉文

No.8にみるように、腰部の文様として用いられているが、元様式では長頸瓶の頸部に用いられ

る文様である。永楽期以降になると、腰部の文様として使われる例が確認できる。梅瓶も含め、施描の方法として、各々の葉を独立させる例と、葉と葉の間に間葉を入れる例がみられる。

・変形蓮弁文

No.8罐では細い線描きで枠を描き、蓮弁内を塗りつぶして白抜きにしている。枠の側面には花弁状の表現がみられる。細い線描きで変形蓮弁を描く例は、前述の勝連グスク跡出土青花如意頭文罐がある(第5図)。変形蓮弁の形については過去の研究の蓄積があり、元形式と永楽期以降では、弁の輪郭線や内区の葉文の表現に違いがみられるという(亀井明德1986、pp.323-327)。また間弁が描き始められるのは永楽年間からの可能性が指摘されている(中村渉2002、pp.25-28)。元様式では上向き(下向き)の変形蓮弁文と下向き(上向き)の間弁を、部位によって組み合わせる例があるが、同じ向きの間弁を入れる例は確認できない。(高島)

(b) 盤

今帰仁グスク出土の元青花瓷と明初青花瓷との比較について、No.1(今帰仁村教育委員会2007、p.239)とNo.2について検討していきたい。

<成形方法>

沖縄出土元様式の盤と比較すると、明初青花瓷は全体的に器壁が厚く、器高が高くなっている。No.1の器高は6.9cmであり、そのほかにも首里城出土元青花瓷などから検討すると、元様式青花瓷は、器高は6cm代後半から7cm以内に収まるものが多い(亜州古陶瓷学会2008)。これに対し、明初青花瓷は8cm代の器高をもつものが多い。口径や底径も大きく、元様式青花瓷と比較して明初青花瓷より大型化していることがうかがえる。

また、鐳が薄く、体部下半より厚みをもつ元様式青花に対し、明初青花瓷は鐳の稜付近の厚みが増し、口沿から体部にかけて器厚が一定している。

表1 元様式青花瓷と明初青花瓷の器高

	No.	口径	底径	器高	参考文献
元 様 式 青 花 瓷	①	37.7	16.6	7.7	首里城『亜州古陶瓷研究Ⅲ』p.46
	②	36.8	21.2	5.8	首里城『亜州古陶瓷研究Ⅲ』p.48
	③	—	—	7.4	首里城『亜州古陶瓷研究Ⅲ』p.50
	④	44.5	26.0	6.4	首里城『亜州古陶瓷研究Ⅲ』p.53
	⑤	39.2	21.0	7.1	勝連『亜州古陶瓷研究Ⅲ』p.161
	⑥	42.4	26.8	6.9	今帰仁『亜州古陶瓷研究Ⅲ』p.192
明 初 青 花 瓷	⑦	45.6	26.9	8.4	故宫『故宫博物院藏 明初青花瓷』No.5
	⑧	45.8	27.2	8.3	故宫『故宫博物院藏 明初青花瓷』No.6
	⑨	45.8	27.2	7.6	故宫『故宫博物院藏 明初青花瓷』No.7
	⑩	45.7	26.9	8.5	故宫『故宫博物院藏 明初青花瓷』No.8
	⑪	46.5	26.8	8.6	故宫『故宫博物院藏 明初青花瓷』No.9
	⑫	46.0	26.7	8.1	故宫『故宫博物院藏 明初青花瓷』No.10

かったが、洪武以降より高台の内側に「十」字の焼き台を置き、焼成している痕が認められる。肉厚でより一層重くなり、大型の盤を支えるために置かれていると考えられる。しかし、洪武・永楽期においても依然として焼成方法の痕跡が確認できない資料も多い。元様式青花瓷の焼成方法が不明な部分が多く、明初においてこれらが混在している状況にあることから、明代に入って焼成方法が変化したと考えることはなお検討を要する。これらに加えて、官窯と民窯の製品の差異があり、問題はより複雑になる。本報告では底部資料が確認できないこともあるので、今後の検討課題としたいが、これらは技術的な転換をはらむ大きな問題であろう。

<施文方法>

・卷草文

No.1と2には鐳沿に共通する施文として卷草文があり、上下の卷草が交互に配置されている点は共通している。しかし、元様式青花瓷(写真16-1、今帰仁城跡No.1)の卷草文は、2の部分

1より小さくなり、1が強調されているのに対し、明初青花瓷（写真16-2、今帰仁城跡No.2）では、1と2が同じ大きさになり、全体的に丸みを帯びた印象を与えている。また、卷草の連節部が波状を呈するようになり、洪武期の盤（写真16-3、故宮博物院蔵、青花菊花四季花文盤、耿宝昌主編2002、pp.24-25、No.6）では波状の装飾が加えられている。



写真16-1



写真16-2



写真16-3

・牡丹唐草文

内外面の牡丹唐草文（写真17-2・3、今帰仁城跡No.2）では、元様式青花瓷と比較すると不鮮明で輪郭線がはっきりしていない。葉文は輪郭を描いたあと、内側を手早く塗りつぶしているが、葉の中心のみ意識的に白く抜いている。この中心のみを白抜きしている葉文は、元様式青花瓷には認められず、明代永楽・宣徳期に多く確認できるので、明初と考えている（写真17-1、故宮博物院蔵、青花折枝菊芍薬葉文盤、耿宝昌主編2002、pp.84-85、No.41）。牡丹花も、白抜き部分が不鮮明であり、全体的に塗りつぶされており、花卉がみえない。



写真17-1



写真17-2



写真17-3

施文の大きな特徴として、元様式青花瓷盤の外側面に牡丹唐草文を配置する類例が管見では確認できない。元様式では、変形蓮弁文と宝相華唐草文の2種類のみが盤の外側面に配置される。No.2のような牡丹唐草文や菊唐草文が配されるのは、洪武以降認められることから、これらの施文は明初と考える。

(c) 長頸瓶

今帰仁グスク出土の元青花瓷長頸瓶はNo.33、明初青花瓷長頸瓶はNo.60、68、69である。これらを中心として比較していきたい。

＜施釉・成形方法＞

元様式青花瓷瓶と明初青花瓷瓶を比較すると、内面の施釉の有無が大きく異なっている。元様式青花瓷瓶の内面は、口沿部のみ薄く施釉され、垂れ流れている箇所が部分的にある程度であったが、明初青花瓷瓶の釉は、内面全体に施釉されている。また、厚く施釉されているため、接合箇所の痕跡が顕著であった元青花瓷瓶に比べて、不明瞭になっている。内面の凹凸や接合付近のヨコナデ調整痕は弱く、とくに接合箇所の外面のふくらみは認められず、疑視してみないと接合部分は判断がつかなくなっている。今回、長頸瓶の脚部が残存する資料は得られていないが、洪武・永楽期の長頸瓶をみると、高い脚が貼り付けられており、依然として付け高台の可能性も考えられる。

＜施文方法＞

明初青花瓷瓶の文様、波涛文・松竹梅文・宝相華唐草文・変形蓮弁文についてそれぞれ触れたい。

・波涛文

波涛文はNo.68の頸部とNo.69の胴下部に認められるが、これらに共通する点はより渦巻き状になっていることである。波涛の輪郭線は太く、波の裾は細くなるという点は元様式青花瓷瓶から引き継いでいる。しかし、元様式青花瓷瓶の波涛文は一定した波涛を連続して描かれているのに対し、No.69は一定せず、波に動きが加わっている。

・松竹梅文

松竹梅文の松文について、元様式青瓷（写真18-2、首里城跡出土、青花松樹馬文長頸瓶、亜州古陶瓷学会2008、p.117-119）は、全形が扇形となり、細い線で先端が先細りになっているが、明初青花瓷では、描かれる松葉の数が少なくなり、全体が楕円形または円形で、葉が太い。また、松葉の先端は細く尖らせた筆致とせず、筆をとめている。No.68の松文（写真18-1）は扇形の部分があり、松葉も多く先端を尖らせていることから、元様式青花瓷瓶にちかい描写と考える。同様に竹文（写真18-3、故宮博物院蔵、青花竹石芭蕉文長頸瓶、耿宝昌主編2002、pp.44-45、No.18）や梅文を比較してみると、No.68の松竹梅文は、元様式青花瓷長頸瓶の描写と大きな変化はない。ただし、全体的に白地の空間の多い構成となっている。

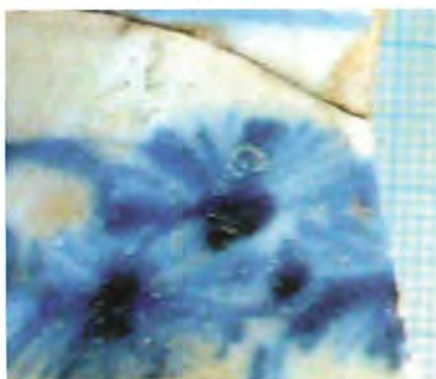


写真18-1



写真18-2



写真18-3

・宝相華唐草文

No.60の宝相華唐草文（写真19-3）は、宝相華が縦に伸び細くなっている。輪郭を描き、外側の白地を残してダミ塗りする点は共通するが、線が太くなり、塗りつぶしも手早く塗りつぶされ、白地の隙間が多くなっている。元様式青花瓷の宝相華文は先端に一筆足して尖らせる筆致につくっているが、明初の宝相華文（写真19-1、故宮博物院蔵、青花纏枝蓮文梅瓶、耿宝昌主編2002、pp.42-43、No.17、写真19-2、故宮博物院蔵、青花折枝花果文執壺、耿宝昌主編2002、pp.46-49、No.19）は尖らせていない。



写真19-1



写真19-2



写真19-3

・変形蓮弁文

No.60の変形蓮弁文(写真20-2)は、濃紺色に塗りつぶされ、内側の輪郭線も太く描かれており、変形蓮弁の中頂は尖らせていない。内側の垂下如意文も線が太く不鮮明になっている。また弁と、弁の間の隙間がなくなり、変形蓮弁が密着して配置されている。

そのほかに明初の変形蓮弁文は、No.68(写真20-3)のように蓮弁の形がくずれ、山形の蓮弁文様を呈するなど、もはや変形蓮弁文の原形を留めず、装飾が施されるものも確認できる。明初の変形蓮弁文は、文様が多く多種にわたり、碗にも多く認められるので、併せて検討をしていきたい。(新島)



写真20-1 首里城跡出土
青花松樹馬文長頸瓶
(亜州古陶学会2008, pp.177-119)



写真20-2



写真20-3

4. 小結

明初とそれと近い時期と考えられる資料について紹介し、その位置づけに関しては何を根拠にしたのかも含めて提示してきた。ここではそれらの製品の器種構成と出土地点について傾向を分析しまとめとしたい。また、最後に青花碗について若干の考察を加えておきたい。

(1) 器種構成

今回対象とした資料を一覧に示した(表2)。器種は、盤、皿、高足杯、匜、長頸瓶、水注、罐、同蓋、梅瓶がある。それぞれの個体数は、盤1、皿2、高足杯2、匜1、瓶4、水注1、罐3、同蓋3、梅瓶3である。前回報告した元青花瓷と比較すると(亀井明德ほか2007, p.251)、大型品の個体数が減少している。具体的には元青花瓷では盤5、罐12であったのに対し、これらが明らかに少ない。盤、罐は元青花瓷では主体をなしていた器種であり、明初から明前半の青花瓷では器種構成が大きく異なっていることが指摘できる。No.2の盤は、内外面ともに花唐草を主文とし、体部の形態が元青花瓷とは明らかに異なるもので、またNo.7梅瓶やNo.8罐は全形を知りうる資料として貴重であり、日本国内ではほとんど類例を求めることが出来ない現状において、首里城跡京の内SK01とともに好例と成りうる。

これらに代わり出土点数が多いのは、梅瓶、長頸瓶と水注、皿、高足杯、後述する碗などで、特に小型の瓶類と食膳具が目立つ傾向である。これらの器種は、同時期の資料である首里城跡京の内跡SK01においても明青花瓷114点中、碗87点、杯4点、皿4点、小瓶10点と多く出土しており(沖縄県教育委員会1998)、今帰仁城跡においても同様の傾向が指摘できる。長頸瓶に関しては、元青花瓷と比較して器壁が平均的に厚く胴部の最大径がやや上位にあり、内面まで施釉され、水注でみたように高台が削り出しで低く直立に近いなど、元青花瓷との形態の違いが指摘できる反面、実際には、明初から明前半という判断が出来ない多くの明青花瓶の口沿片が出土しており、形態による類別が課題である。(柴田)

表2 明青花瓷掲載資料一覧

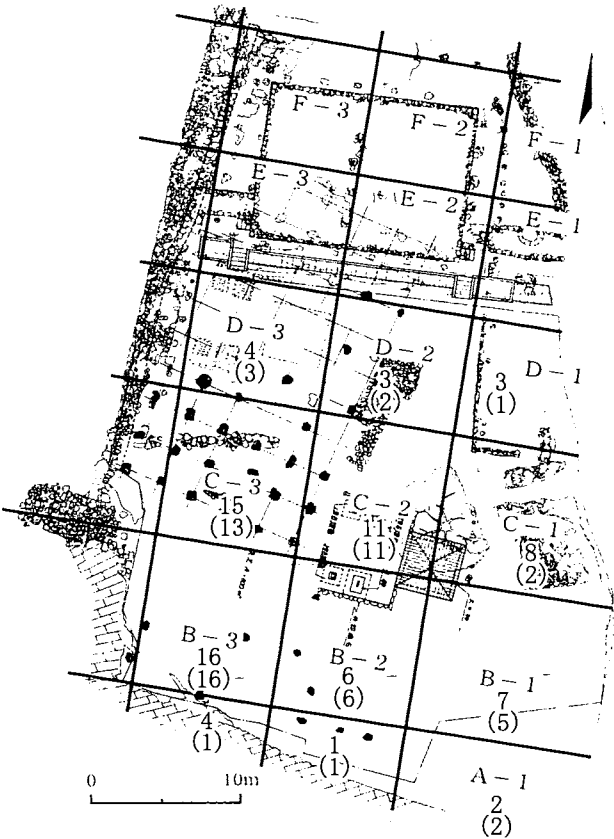
No	掲載		名称	残存部位	破片数 (接合前)	主郭	東壁	志慶真門郭	旧道	周辺	その他
	図	図版									
No.2	1	1	青花牡丹唐草文盤	口沿一部部	14	5	6	3			
No.4	1	1	青花皿	口沿一部部	3	2					西壁内
No.5	1	1	青花皿	口沿一部部	1	1					
No.6	1	1	青花皿	体部一部部	2	2					
No.7	4	5	青花蓮池文梅瓶	肩部一腰部	32	3	16	7			南階段, 西壁, 表探, 不明
No.8	3	4	青花宝相華唐草文罐	肩部一底部	46	20	12	12	1		大庭
No.9・ 12・14	4	5	青花宝相華唐草文梅瓶	肩部一胴部	6	1		2	3		
No.10	2	5	青花牡丹文梅瓶	胴部	1		1				
No.13	2	4	青花花文蓋	甲部	1	1					
No.28	4	4	青花罐	肩部	1	1					
No.31	3	4	青花広口罐蓋	鈕・甲部・沿部	9	1	1	4			表探・不明
No.36	4	5	青花錦文口沿罐	口沿	1					1	
No.40	2	4	青花瓶	口沿・頸部・胴部	7	5	1				不明1
No.44	2	3	青花如意頭状窓人物文水注	胴部一底部	23	14	4	5			
No.46	1	3	青花高足杯	脚部	1			1			
No.47	1	3	青花高足杯	脚部	5	4		1			
No.60	1	1	青花牡丹・宝相華唐草文長頸瓶	頸部・胴部一底部	14	4	8	2			
No.68	1	2	青花松竹梅文長頸瓶	頸部一胴部	13	11	2				
No.69	1	2	青花蓮池文長頸瓶	胴部	14	10	4				
No.74	2	3	青花(菊)唐草文蓋	甲部一沿部	2	2					

(2) 出土地点

台帳に記載されたデータを基に出土地点を一覧に示し（表2）、主郭についてはグリッドごとに図示した（第6図）。

今回図示したものは接合前破片数で196点あり、出土地点の内訳は、主郭92点、東壁55点、志慶真門郭37点、大庭1点、旧道4点、周辺遺跡1点とその他・不明6点であった。東壁出土のものは全て主郭からの落下と見られ、また志慶真門郭出土のものもほとんど主郭あるいは東壁から同一個体が出土しており、No.36・No.46以外は主郭に属する資料と判断される。

主郭での分布は、A～Dグリッドに偏在しており、特にB・Cグリッドに集中しB-3、C-3、C-2の順に多い。またB-2も含めてこれらのグリッド出土のものはほぼ第Ⅱ層出土である。第Ⅱ層には今帰仁城第Ⅲ期とされる最盛期の遺物が多数含まれており、遺構と



遺構原図は今帰仁村教育委員会 1991 より転載
() 内数字はⅡ層出土

第6図 主郭グリッド別出土破片数

しては南側A・Bグリッドにかけて礎石建物が検出され、中央C・Dグリッド付近に建物の存在が予測されている（今帰仁村教育委員会1991）。第Ⅱ層内の遺物は時期幅が広く元位置を保っていないとみられるため、今回提示した資料がそれらの遺構に確実に属していたと断言は出来ないが、可能性は考えられる。また、元青花瓷の分布と比較すると、元青花瓷がより北側のDグリッドにおいて最も多く出土しているのとは違いが認められる。今回報告の資料のうちDグリッドにおいて破片が出土しているのは、No.2・7・8・9・40・60・68であり、比較的大型品が多いことが指摘できる。（柴田）

（3）碗について

今帰仁城跡では、明初から少なくとも15世紀代までに生産されたと考えられる碗が破片数にして450点、個体数にして97個体以上出土している。今回はそれら全てを分類し検討することはできなかったが、分類と年代的位置づけについて若干の考察を加えておきたい。

明初あるいは15世紀代までに生産されたと推定できる代表的な青花碗は、報告時にⅡ類、Ⅲ類a、Ⅳ類（今帰仁村教育委員会1991）に分類されている¹。この分類は基本的には器形と文様を組み合わせた小野分類（小野正敏1982）を踏襲しており、Ⅱ類は小野分類B群、Ⅲ類は小野分類C群Ⅰに当たり、Ⅳ類は小野分類には該当しない。小野分類を簡略に述べると、碗A群が外反口沿、径が小さく厚い高台などの特徴を持つ元様式青花、碗B群は口沿が端反りで胴部や高台の形態にはバラエティーがあり、碗C群はレンツー碗の系統、碗D群は口沿が直口で見込が広く平坦な形態のものという分類である。この分類によって15世紀から16世紀の青花碗は、大きくはB群からD・C群へと変遷していくことが把握され、多くの遺跡出土の青花瓷が同分類により位置づけられている。ただし、小野分類が提示された時点では明初から15世紀代の青花瓷の出土例が多くは知られておらず、資料の増加した現在更なる細分を検討し、明朝の始まりである14世紀後半から15世紀の前半・後半、あるいは前葉・中葉・後葉などの変化を把握する必要が生じているのは言うまでもない。首里城跡京の内SK01や沖縄県の他の遺跡を含む貿易陶瓷器の分類においても小野分類を踏襲して細分しようとする試みが行われている（遠藤啓介2002、瀬戸哲也ほか2007）。今帰仁城跡では現時点で下限が特定できる一括資料には恵まれていないものの、数多くの資料が出土している点で非常に重要な意味を有しており、今回は他の遺跡出土資料を参考としつつ今帰仁城跡出土の碗資料を位置づけてみたい。

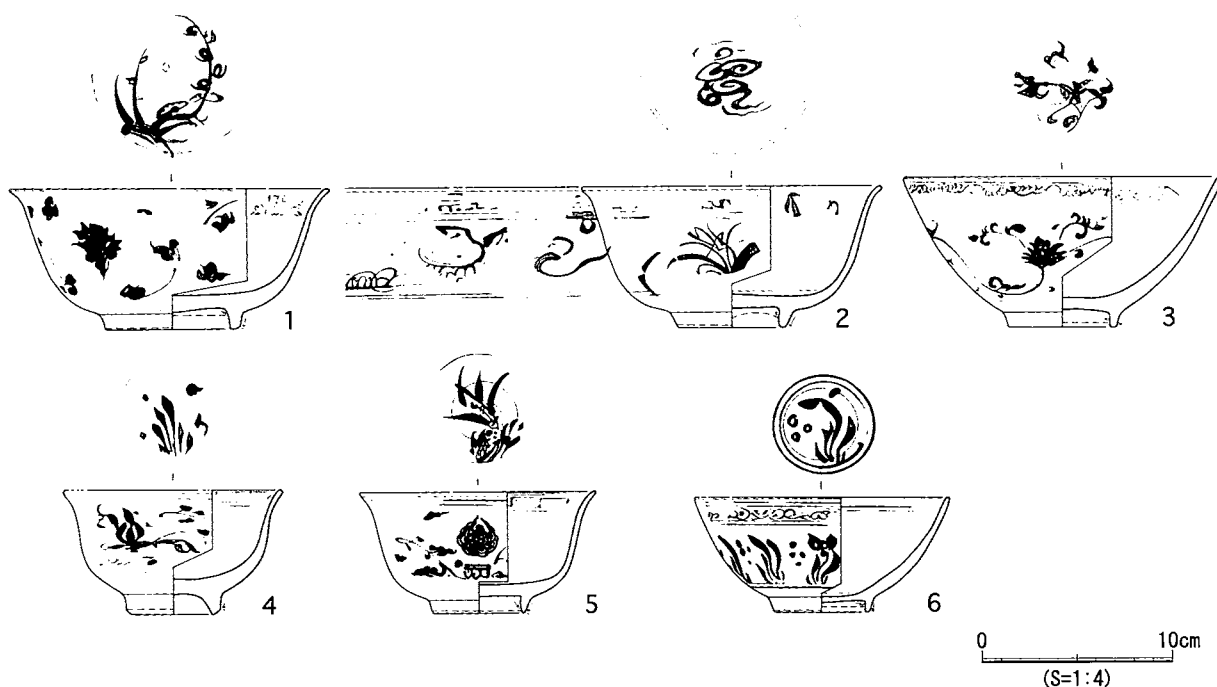
明初の民窯製品に関して、中国では南京明故宮出土資料による碗・皿の分類（南京博物院1976、南京博物院・香港中文大学文物館1996）や、桂林出土資料による洪武期の碗・皿の紹介（李鍾2000）が参考となる。南京故宮出土資料は異なる出土地点から明代早期、中期、晩期の陶瓷器が出土しており、そのうち早期は景德鎮瑤里窯跡群出土の製品との類似から洪武期から宣徳期のものが含まれると判断され、洪武期、永楽・宣徳期、空白期（正統・景泰・天順期）に分けて報告されている。洪武期の碗は、初め胴部が膨らみをもたずに口沿にかけて大きく開くもので直口から外反口沿になり、後に体部に膨らみをもち口沿が外反するものとなり、この器形は永楽・宣徳期に続いていくとみられる。主文様は花唐草文、結帶繡球文が比較的多くあり、渦状の文様を粗く描くものも認められる。文様は体部内面には描かれず、見込には洪武期には草書「福」字、水草などが描かれ、永楽・宣徳期には隸書「福」字、梅花文などがみられる。桂林出土資料でも類似した傾向が指摘されており、外反口沿で両面を斜めに削る厚い高台、円形の渦状削りの底部で、草書「福」字や水草を見込に描いた碗が洪武期の層から出土したと報告されている。また景德鎮景泰墓（1456年）出土の口沿が外反し蘭石文が描かれた碗（景德鎮陶器館1981）や、広東羅亨信墓（1457年）出土の碗（広東省博物館ほか1991）は15世紀中葉以前の青花碗の好例と言える。

日本出土の資料では、首里城跡京の内跡S K01（沖縄県教育委員会1998、亀井明德2002）、首里城跡二階殿地区落ち込み（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）、福井県興行寺遺跡第2遺構面（富山正明1993）、新潟県至徳寺跡S X004、S K019（鶴巻康志2001・2006）が、一括性が高い点と、他の資料が共伴しており廃棄年代が推定できる点で参考となる。これらはいずれも15世紀中葉から後半に廃棄の下限が求められる資料であり、中国陶瓷器に限ってみれば15世紀前半から中葉が下限となる資料として位置づけられている。

これらのうち青花碗のみ取り上げると、口沿外反のものと直口のものに大きく分けられる。口沿外反のものは、見込が広く腰の膨らみがたっぷりとしたものである。法量が大きいものと小さいものがあり、大きいものは体部下半の器壁がかなり厚いもの（第7図-1）とそうでないもの（第7図-2）があり、高台はほぼまっすぐか内側に傾斜しており、体部下半の器壁が厚いものは高台も厚い傾向がある。高台が内側に傾斜するものは高台径が比較的小さい。体部下半の器壁が薄くなっているものは内傾する高台が多いようである。釉薬は外面底部にもかけられ、疊付は削られ高台内面下半が露胎のものが多い。文様は、器壁が厚いものでは、外面胴部上下を圈線で画した間に花唐草文を描いて主文様とし、見込は折枝文と梅花文のもの、器壁が薄いものは、圈線で上下を画した蘭石文で、見込は渦を重ねた雲文のもの、結帯繡球文で見込が隸書「福」字のもの、主文様が人物文のものなどがある。

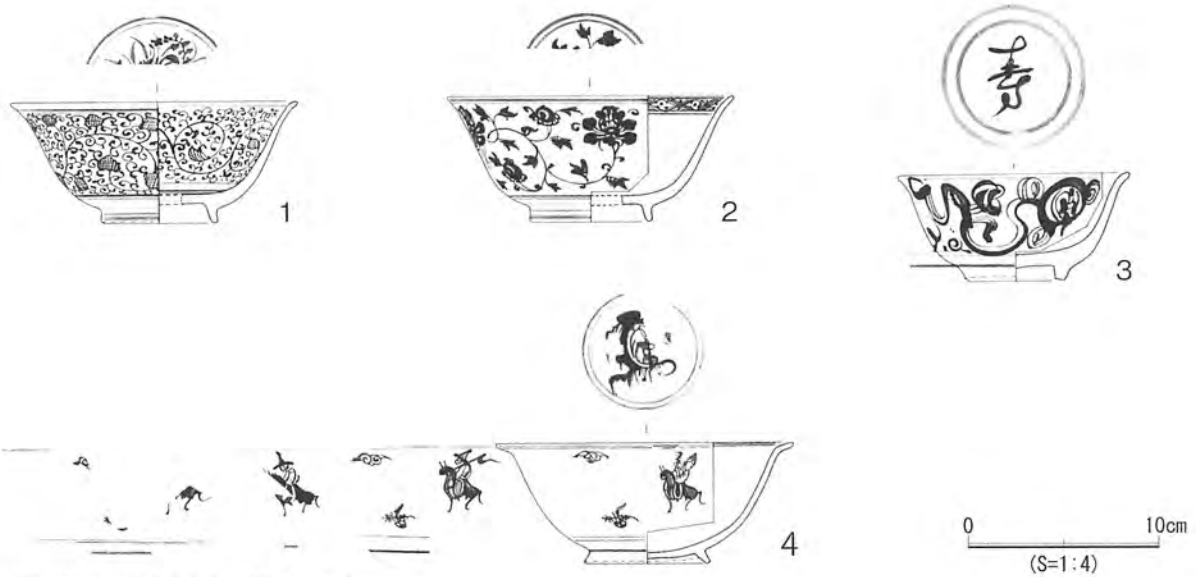
小型の碗は体部下半が厚く高台も厚い削りのもので、体部の膨らみが比較的上位にあるもの（第7図-4）と、器壁が全体に薄く高台も細く、体部下半が膨らみ見込の広いもの（第7図-5）がみられる。文様は前者が主文様花唐草文、見込水草、草書「梅」であるのに対し、後者では主文様が八宝唐草文や蓮弁文、松竹梅文、波濤魚文、見込は草花文、松文、梅文など文様の種類がやや多い。

直口の碗は外反のものより少数であるが、やはり法量は大きいもの（第7図-3）と小さいもの（第7図-6）がある。いずれも器壁は下半がやや厚く、高台は径が小さくまっすぐに立ち上がる。文様は主文が花唐草や水草で見込は折枝文や水草文である。以上あげた全ての碗の内面は、口沿に文様帯を巡らせるが、体部は無文であることが共通点としてあげられる。



第7図 首里城跡京の内跡出土青花碗

沖縄県教育委員会 1998 より転載



第8図 今帰仁城跡出土青花碗Ⅱ・Ⅳ類

これまで述べた国内出土の碗を中国での出土品と比較すると、口沿外反の大型の碗と小型の碗のうち体部下半が厚いものに、より古相の要素が見て取れ、小型碗の薄型のものにはやや新しい要素が認められる。ここでは明確に位置づけることは出来ないが、後者がより15世紀中葉に近い製品であることが予測される。次にそれらと今帰仁城跡出土の青花碗を比較してみたい。

今帰仁城跡の青花碗Ⅱ類は口沿が外反するもので、法量は大小があり、大型が多い。大型の主たるものは前述の首里城跡などのものと比べると、胴部の膨らみがやや小さくその結果口沿にかけて大きく開く形態である（第8図-1・2）。高台は直立または外傾する。文様は主文様が波濤文、花唐草文、密集した唐草文などで、空白部分が少なく密度高く描かれている。15世紀中葉までの例にはみられない体部内面にも文様の描かれるもの（写真21・22）や、高台外面に圈線を2条巡らせるものが目立ち、これらは15世紀末に位置づけられているフィリピンのThe Rena Shoal (Franck G.ほか2000) の沈没船資料にみられるものと共通している。破片資料では主文様が渦状の文様のものや花唐草文のものが含まれており、これらは15世紀中葉以前と考えられるが、それより下るものが多いと思われる。小型の碗は体部と高台が厚く、主文様が結帯繡球文、見込が草書「寿」字であるなど、大型のものよりは古相を示す（第8図-3）。Ⅲ類aとされた直口の碗については、他の遺跡との差はみられず15世紀中葉までの資料と考えられる。Ⅳ類に分類されたものは、腰部はすんなりと丸く、口沿は強く折れるように外反し、高台は著しく外側に開く（第8図-4）。同様の形態のものは国内の遺跡では現在のところ認められない



写真21



写真22



が、中国福建省平潭大練島牛屎礁引き上げ遺物に含まれており、15世紀末から16世紀前半の資料として紹介されている（愛知県陶磁資料館2008、pp.124-131）。また、高台の形態は異なるが類似する人物文碗は、フィリピン、ブロン・バカウ遺跡において基筒底文字文の青花皿と共伴して墓から出土しており（田中和彦1993）、Ⅳ類は15世紀末以降16世紀前半の資料と推定しておく。

このように今帰仁城跡出土青花碗のうち15世紀代までに生産されたとみられるものは、少数の15世紀前半までのものも含むが、多数が15世紀中葉以降に位置づけられるものと考えられる。今回はごく簡単に触れることしかできなかったが、厳密な分類と編年的位置づけは今後の課題としたい。（柴田）

今回の調査は、2007年12月に予備調査を行い、2008年7月29日から8月1日にかけて今帰仁村文化財整理室において、個体識別、実測、写真撮影等を実施し、2009年1月23日までに製図および原稿作成を行った。各図面、文章は本文中に記載した担当者が作成し、柴田がトレースと編集を行った。本稿をまとめるにあたり、今帰仁村教育委員会の宮城弘樹、玉城靖、金武正紀諸氏をはじめ文化財調査室の方々には多くのご協力とご教示を賜った。記して感謝いたします。

なお、この調査は、日本学術振興会から与えられた科学研究費・基盤研究B（研究代表者・専修大学文学部・亀井明德）の2008年度研究の一部である。

《注》

1 報告時には元様式青花瓷をⅠ類と設定しているが、出土した資料のうち元ではないものもⅠ類と報告しているものがある。

《引用文献》

愛知県陶磁資料館2008、海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会『東アジアの海とシルクロードの拠点福建—沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化—』p.107、pp.124-131、愛知県陶磁資料館

亜州古陶瓷学会2008『亜州古陶瓷研究Ⅲ』専修大学

出光美術館編1987『出光美術館蔵品図録』平凡社

炎黄芸術館編1999『景德鎮出土元明官窯瓷器』

遠藤啓介2002「青花白瓷の形式と年代」『明代前半期陶瓷器の研究—首里城京の内S K 01出土品—』pp.13-35、専修大学

沖縄県教育委員会1998『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）—』

沖縄県立埋蔵文化財センター2005『首里城跡—二階殿地区発掘調査報告書—』

小野正敏1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2、pp.71-87、日本貿易陶磁研究会

亀井明德1986『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版

亀井明德2002「首里城京の内出土陶瓷器—15世紀前半代の標識資料として—」『明代前半期陶瓷器の研究—首里城京の内S K 01出土品—』pp.1-12、専修大学

亀井明德・柴田圭子・高島裕之・新島奈津子2007「今帰仁城跡出土元青花瓷の研究」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』今帰仁村教育委員会（改定して亜州古陶瓷学会「08 沖縄県今帰仁村今泊 今帰仁グスク」『亜州古陶瓷研究Ⅲ』2008、pp.189-240）

景德鎮陶瓷館 欧陽世彬 黃雲鵬1981「介紹兩座明景泰墓出土青花、釉里紅瓷器」『文物』1982-2、pp.46-50、文物出版社

広東省博物館・東莞市博物館1991「広東東莞羅亨信家族墓清理簡報」『文物』1991-11、pp.227-

252、文物出版社

- 耿寶昌1993『明清瓷器鑑定』紫禁城出版社・兩木出版社
- 耿寶昌主編2000『青花釉裏紅（上）』商務印書館
- 耿寶昌主編2002『故宮博物院藏明初青花瓷 上冊』紫禁城出版社
- ジョセフィン・H・ナップ他編1975『東洋陶磁大観10 フリーア美術館』講談社、東京
- 周鑾書主編1998『中國歷代景德鎮瓷器 明卷』中国攝出版社
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志2007「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究5』pp.55-76、沖縄県埋蔵文化財センター
- 田中和彦1993「ルソン島中部、墓地遺跡出土の交易陶磁器と土器」『貿易陶磁研究』No.13、pp.65-85、日本貿易陶磁研究会
- 鶴巻康志2001「伝至徳寺跡出土の元・明代の青花」『上越市史研究』第7号、pp.95-102、上越市
- 鶴巻康志2006「新潟県上越市至徳寺遺跡出土の貿易陶磁—中世後期の資料を中心に」『貿易陶磁研究』No.26、pp.63-80、日本貿易陶磁研究会
- 富山正明「福井県興行寺遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.13、pp.127-133、日本貿易陶磁研究会
- 中村渉2002「2.青花白瓷の形式と年代、3. 瓶・罐」『専修大学アジア考古学研究報告書1 明代前半期陶磁器の研究—首里城京の内SK01出土品—』pp.23-34、専修大学
- 今帰仁村教育委員会1991『今帰仁城跡発掘調査報告2』
- 今帰仁村教育委員会2007『今帰仁村文化財調査報告書第24集 今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』
- 今帰仁村教育委員会2008『今帰仁村文化財調査報告書第25集 今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』
- 南京博物院1976「南京明故宮出土洪武時期瓷器」『文物』1976—8、pp.71-77、文物出版社
- 南京博物院・香港中文大学文物館1996『朱明遺萃』
- 長谷川祥子他1995『中国の陶磁8 元・明の青花』平凡社
- 藤岡了一1975『陶磁体系42明の染付』平凡社、東京
- 藤岡了一・長谷部楽爾編1976『世界陶磁全集14明』小学館、東京
- Franck Goddio, and Stacey Pierson, and Monique Crick 2000 "Sunken Treasure:Fifteenth Century Chinese Ceramics from The Rena Cargo" Periplus Publishing London LTD
- 三杉隆敏1981『世界の染付1』同朋舎出版
- Larry Gotuaco, Rita C. Tan, Allison I. Diem1997: "Chinese and Vietnamese Blue and White Wares Found in the Philippines", Bookmark, Inc. Makati City, Philippines
- 李鐸2000「洪武民窯青花圓器的研究」『明代民窯青花』pp.241-269、河北人民出版社
- 穆青他2000『明代民窯青花』河北人民出版社

第3節 今帰仁城跡外郭Ⅲ・Ⅳ区出土の炭化種子分析

千田寛之

(札幌大学大学院文化学研究科)

遺跡および調査の概要

遺跡の名称：今帰仁城跡

調査地点名：今帰仁城外郭Ⅲ・Ⅳ区

遺跡の位置：沖縄県今帰仁村字今泊

発掘調査機関：今帰仁村教育委員会

発掘担当者：玉城靖・宮城弘樹

発掘調査期間：平成18年度～平成20年度

遺跡の年代：グスク時代 13世紀後半～14世紀中頃

1. 分析の経緯

今帰仁村教育委員会は近年の発掘調査において、フローテーション法を用いた炭化種子の回収を継続的に試みており、同村においては徐々に炭化種子データが蓄積されつつある(今帰仁村教育委員会2005、高宮2007、赤嶺・喜納2008)。その一例が今帰仁城である。1980年代前半に志慶真門郭(今帰仁村教育委員会1983)および2000年前半には今帰仁城周辺のムラ跡(宮城・与那嶺2005、高宮2007、赤嶺・喜納2008)より炭化種子が回収され、同定および報告されている。2006年度から2008年度の期間、今帰仁村教育委員会は今帰仁城跡外郭Ⅲ・Ⅳ区の本格的な発掘調査を実施し、その結果、建物跡やそれに伴う柱穴や土坑および土坑炉などの遺構が確認された。さらに、今帰仁村教育委員会では同区における植物食利用を理解するために、多量の土壌をサンプリングした。そのうち今回、SK295、SK170およびSD286より回収された土壌サンプルをフローテーション処理し、回収された植物遺体の分析・同定を試みた。SK295はⅢ区T-34、SK170はⅣ区T-34そしてSD286はⅣ区S-34で検出されている。これら3遺構で回収された土壌サンプル(計112.9リットル)は今帰仁村教育委員会によってフローテーション処理され、337.98グラムの浮遊物が回収された(表1)。

2. 検出された炭化種子について

イネ *Oryza sativa* L.

イネ穎果がSK295より3(粒)、SK170より2(粒)およびSD286より3(粒)の計8(粒)回収された。また、イネ穎果と思われる炭化種子がSK295より2(片)検出されているが、保存状態が悪くイネ穎果と断定できないためイネ?とした。回収されたイネ穎果のうち、計測が可能であったのは2(粒)である。平均サイズ(長さ×幅×厚さ)は3.0mm×1.8mm×0.9mmであった(表2)。また、イネ穎果の破片がSK295より32(片)、SK170より18(片)およびSD286より18(片)の計38(片)が検出された。このほか、イネ籾がSK295より14(片)およびSK170より15(片)の計29(片)が同定され、イネの小穂軸(写真2/サイズ0.8mm×0.6mm×0.5mm)がSK296より6(片)、SK170より2(片)およびSD286より4(片)が確認された。写真1のイネ穎果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は3.4mm×1.8mm×1.2mm。

コムギ *Triticum aestivum* L.

コムギ穎果がSK295より118(粒)、SK170より41(粒)およびSD286より7(粒)の計166(粒)回収された。また、コムギ穎果の破片がSK295より147(片)、SK170より31(片)およびSD286

より4 (片) の計182 (片) 検出された。回収されたコムギ穎果のうち21 (粒) が計測可能であった(表3)。平均サイズは3.6mm×2.5mm×2.0mmであり、検出されたコムギ穎果は小型コムギに属するものと思われる。写真3のコムギ穎果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は3.7mm×2.5mm×1.7mm。

オオムギ *Hordeum vulgare* L.

オオムギ穎果がSK295より25 (粒)、SK170より21 (粒) およびSD286より1 (粒) の計47 (粒) 確認された。また、オオムギ穎果の破片がSK295より31 (片)、SK170より20 (片) およびSD286より4 (片) の計55 (片) が同定された。回収されたオオムギ穎果のうち4 (粒) が計測可能で、平均サイズは4.5mm×2.4mm×1.5mmであった (表4)。写真4のオオムギ穎果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は4.3mm×2.4mm×1.4mm。

ムギ類およびムギ類穂軸

穎果の保存状態が悪い、または一部分しか残存していないためコムギ・オオムギの分類が困難な穎果をムギ類とした。SK295より117 (片)、SK170より46 (片) およびSD286より3 (片) の計166 (片) 回収された。また、ムギ類の穂軸 (写真5/サイズ1.3mm×1.2mm×0.8mm) がSK295より2 (片) およびSD286より1 (片) の計3 (片) 確認されている。

アワ *Setaria italica* (L.)Beauv.

アワ穎果がSK295より35 (粒)、SK170より39 (粒) およびSD286より17 (粒) の計91 (粒) 検出された。また、アワ穎果の破片がSK295より14 (片)、SK170より10 (片) およびSD286より1 (片) の計25 (片) が回収された。検出されたアワ穎果のうち19 (粒) が計測可能であった。平均サイズ(長さ×幅×厚さ)は1.1mm×1.0mm×0.9mmであった(表6)。また、アワ穎果と思われるが、保存状態が悪くアワと同定できない炭化種子をアワ? とし、SK295より5 (片) およびSK170より5 (片) そしてSD286より1 (片) の計11 (片) をアワ穎果? に含めた。このほか、アワの内外穎がSK170より1 (片) 同定された。写真6のアワ穎果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.0mm×0.7mm×0.7mm。

キビ *Panicum miliaceum* L.

キビ穎果がS170より1 (粒) 回収されている。また、キビ穎果と思われるが、キビと同定できない炭化種子をキビ? に分類した。キビ? はSK295より1 (粒) 回収された。種子の形状は広卵型である。胚は欠落していて確認できない。種皮にはキビ特有の僅かに隆起した波状の細包組織が確認できる。写真7のキビ穎果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.9mm×1.2mm×0.9mm。

ミレット

アワまたはキビだと思われるが、それ以上の分類が不可能な穎果をこのカテゴリーに含めた。SK295より1 (粒) およびS170より2 (粒) の計3 (粒) が検出された。

堅果類

堅果類子葉の破片がSK295より1 (片) 検出された。写真8の堅果類子葉(破片)のサイズ(長さ×幅×厚さ)は3.9mm×1.5mm×0.4mm。

堅果皮

堅果皮がSK295より4 (片) およびS170より3 (片) 回収された。

タデ科 Polygonaceae

タデ科瘦果がSK295より6(粒)、SK170より1(粒)の計7(粒)検出された。形状は広卵状円形をしており、断面はほぼ三角形である。写真9のタデ科瘦果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.4mm×1.0mm×1.0mm。

エノコログサ属? *Setaria*?

エノコログサ属穎果と思われる炭化種子をこのカテゴリーに含めた。IV区S170より2(粒/片)回収されている。種子の形状は広卵形で腹面および背面が平坦である。側面観は半楕円形。胚は粒長のほぼ1/2の大きさがある。種皮には薄らと網目模様が確認できる。写真10のサイズ(長さ×幅×厚さ)は0.6mm×0.4mm×0.2mm。

イネ科 Poaceae

イネ科穎果がSD286より1(粒)回収されている。また、イネ科と思われる穎果がSK170より2(粒)回収されているが、保存状態が悪く断定できないためイネ科?に分類した。種子の形状は線状長楕円形で先端が尖っており、側面観は線形。先端から下部へ掛けて薄い線状模様が確認できる。

カヤツリグサ科 Cyperaceae

カヤツリグサ科果胞がSK170より1(粒)およびSD280より2(粒)の計3(粒)確認された。種子の形状は広倒卵形をしており、側面観は半広卵形状である。種皮には、先端から基部へ掛けてきめ細かい線状模様が薄らと確認できる。写真11のカヤツリグサ科果胞のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.5mm×1.1mm×0.6mm。

不明種子 Unknown

・不明A(写真12) SK295(LF 147)より1(粒)回収された。種子の形状は狭卵形で先端が尖っており、腹面および背面の中央部分がやや膨らんでいる。種皮には縦方向に線状模様が確認できる。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は0.7mm×0.4mm×0.3mm。

・不明B(写真13) SK295(LF 174)より1(粒)検出された。種子の形状は幅の広い扇形で、側面観は線状長楕円形である。基部にへその様なものが確認できる。種皮には不明瞭な横隆条が存在する。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は0.9mm×0.7mm×0.3mm。

・不明C(写真14) SK295(LF 174)より1(粒)同定された。種子の形状は広楕円形で、側面観はやや三日月型である。先端に突起が存在する。種子の(長さ×幅×厚さ)は0.8mm×0.6mm×0.3mm。

・不明D(写真15) SK170(FL 28)より1(粒)確認された。種子の形状は細長い杓文字形である。種皮には浅い凹凸によって構成された網目模様が確認できる。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.0mm×0.3mm×0.1mm。

・不明E(写真16) SK170(LF 28)より1(粒)回収された。種子は台形に近い形状である。背面には粒長のほぼ1/2の長さを持つ胚が存在する。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は0.6mm×0.5mm×0.3mm。

同定不可能

保存状態が極めて悪く同定不可能であった計1,038(片)をこのカテゴリーに含めた。

表 1 今帰仁城跡 外郭Ⅲ・Ⅳ区出土の炭化種子

調査区	グリッド	遺構番号	層位	L F No.	土壌サンプル量②	浮遊物量③	イネ		イネ?	イネ粉	イネ小穂軸	コムギ		オオムギ		ムギ類	ムギ類穂軸	アウ		アウ?	アウ内外類	キビ	キビ?	ミレット	堅果類子葉	堅果皮	タデ科	エノコログサ属	イネ科	イネ科?	カヤツリグサ科	不明種子	同定不可能	計	(遺体数/リットル)
							粒	片	片	片	粒	片	片	片	粒	片	粒	片	粒	片	粒	片	粒	片	粒	片	粒	粒	粒	粒	粒	粒	粒		
Ⅲ	T-34	SK295	i	80	9	2.1	9	1	1	1	1	1	2	1	4	1	8	5							1	2						95	131		
Ⅲ	T-34	SK295	i	106	8	0.3									1		2														11	14			
Ⅲ	T-34	SK295	i	140	9	1.86	2					1	1		1																8	14			
Ⅲ	T-34	SK295	i	147	9	4.58	2	6	2	4	1	2	1	1	2		13	8					1	1		2	1				1	56	104		
Ⅲ	T-34	SK295	i	165	9.4	2.46		4	1	11	1	29	48	13	11	39	1	2								1	3					355	519		
Ⅲ	T-34	SK295	i	174	11	7.63	1	11	1			86	96	8	18	70	1	11	4						1						2	225	535		
				小計	55.4	18.93	3	32	2	14	6	118	147	25	31	117	2	35	14	5	0	0	1	1	1	4	6	0	0	0	0	3	750	1317	23.7
Ⅳ	T-34	SK170	i	28	12	18.28	1	11		5	2	29	20	15	16	38		27	5	3	1							1		2		2	175	354	
Ⅳ	T-34	SK170	i	51	6	7.28		5	7		2	6	2	3	4		3	5	1						3	1						30	72		
Ⅳ	T-34	SK170	ii	60	7.5	82.04	1		2		3		1		2		2		1								1			1		8	22		
Ⅳ	T-34	SK170	ii	71	7.5	129.09		2	1		7	5	3	1	2		6					1						1			17	47			
Ⅳ	T-34	SK170	iii	74	8	13.7											1														2	3			
Ⅳ	T-34	SK170	iii	85	8	61.99																									1	1			
				小計	49	312.38	2	18	0	15	2	41	31	21	20	46	0	39	10	5	1	1	0	2	0	3	1	2	1	2	1	2	233	499	10.1
Ⅳ	S-34	SD286	i	45	8.5	6.67	3	18			4	7	4	1	4	3	1	17	1	1												55	118		
				小計	8.5	6.67	3	18	0	4	7	4	1	4	3	1	17	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		2	0	55	119	13.8
				合計	112.9	337.98	8	68	2	29	12	166	182	47	55	166	3	91	25	11	1	1	1	3	1	7	7	2	2	2	3	5	1038	1935	17.1

注) 回収された種子および果実のうち50%以上欠損しているものを破片に分類している。

表2 イネのサイズ

調査区／LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
Ⅲ区／LF 28	3.4	1.8	1.2
Ⅳ区／LF 45	2.6	1.8	0.7
平均	3.0	1.8	0.9

表3 コムギのサイズ

調査区／LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
Ⅳ区／LF 28	3.8	3.9	2.3
"	3.9	2.5	2.0
"	3.0	2.2	1.8
"	3.4	2.0	1.8
"	3.0	1.8	1.4
Ⅳ区／LF 45	3.2	2.2	1.8
"	3.7	2.5	1.7
Ⅳ区／LF 60	3.5	2.4	2.0
Ⅲ区／LF 165	3.9	2.7	2.4
"	3.8	2.5	2.3
"	4.0	2.5	2.1
"	3.2	2.2	1.7
Ⅲ区／LF 174	4.7	3.0	2.5
"	3.9	3.8	2.2
"	4.1	2.6	1.9
"	3.7	2.1	2.0
"	3.6	2.2	1.9
"	3.6	2.6	2.1
"	3.3	2.2	1.8
"	3.2	2.0	1.6
"	3.2	2.0	1.6
平均	3.6	2.5	2.0

表4 オオムギのサイズ

調査区／LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
Ⅳ区／LF 28	4.2	2.2	1.4
Ⅳ区／LF 45	5.2	1.6	0.9
Ⅲ区／LF 165	4.3	2.4	1.4
Ⅲ区／LF 174	4.1	3.2	1.9
平均	4.5	2.4	1.4

表5 アワのサイズ

調査区／LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
Ⅳ区／LF 28	1.2	0.9	1.1
"	1.3	1.0	0.7
"	1.6	1.2	0.8
"	1.2	1.1	1.0
"	1.3	1.0	0.8
"	0.8	0.9	0.4
"	1.2	1.0	0.7
Ⅳ区／LF 45	1.2	1.2	0.9
"	1.0	0.7	0.7
"	1.1	0.9	0.8
"	1.1	1.0	0.6
"	0.9	1.0	0.6
Ⅲ区／LF 71	1.2	1.2	0.8
"	0.9	0.8	0.5
Ⅲ区／LF 80	1.2	1.0	0.9
"	0.9	0.9	0.3
Ⅲ区／LF 147	1.1	1.0	1.0
"	1.2	1.1	0.7
"	0.9	0.8	0.4
Ⅲ区／LF 174	1.0	1.1	0.8
"	0.8	0.7	0.4
平均	1.1	1.0	0.7

3. 考察

まず、検出された炭化種子の多くはSK295より回収された。発掘担当者の宮城弘樹(2008、私信)によると、SK295は6本柱建物跡(SB02)に伴って検出された長軸約240cm、短軸約170cmそして深さ約80cm規模の大きな土坑炉で形状は略方形をしている。この遺構の機能について宮城は調理や鍛冶および炭焼きなどを想定している(宮城2008、私信)。この遺構より計1,317(粒／片)の炭化物が検出され、植物遺体分布密度(植物遺体／リットル)は23.7であった。そのうち同定不可能であった750(片)を除いた567(粒／片)の炭化種子が同定され、その殆どが栽培植物であった。植物遺体分析の結果から、宮城の想定した鍛冶、炭焼き、調理のなかでは調理を目的とした炉跡であったと考えられる。

次にSK170は長軸約180cm、短軸約150cm、深さは約75cmの隅丸方形の土坑である。土坑の覆土はⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層に大きく分類されるが、Ⅰ層およびⅡ層は土色が暗褐色で多量の炭を含むのに対し、Ⅲ層は土色が地山に類似した明褐色であり炭も殆ど含まれていない(宮城2008,私信)。このため、宮城(2008,私信)はⅠ層およびⅡ層が土坑使用時に堆積した層で、Ⅲ層は土坑構築の過

程で土坑内に入れられた土層であると推察している。植物遺体分析においてもⅠ層およびⅡ層からは計495（粒／片）の植物遺体が検出されたのに対し、Ⅲ層からは計4（粒／片）の植物遺体しか回収されなかった(表1)。このことから、Ⅰ層およびⅡ層は土坑使用時に堆積した可能性が高いと考えられるのに対し、Ⅲ層は土坑が使用される以前に堆積したと考えられる。つまり、植物遺体分析結果は宮城による層序解釈を支持するものである。

最後にSD286は深さ約10cmの浅い溝状遺構である。建物跡遺構(SB01)を囲うように検出されているが、SB01との関連については不明である(宮城2008、私信)。この溝状遺構からは118（粒／片）の植物遺体が確認されているが、現時点で利用目的を言及することはできない。

さて、今回行った今帰仁城外郭Ⅲ・Ⅳ区における植物遺体分析から、外郭部分における植物食利用がある程度明らかとなった。同定の結果、イネ76（粒／片）に対しアワ116（粒／片）、コムギ348（粒／片）、オオムギ101（粒／片）が確認され、全体的にはイネよりも雑穀が多く検出された。「分析の経緯」で述べたように今帰仁城では1980年代に志慶真門郭の発掘調査が行われ、その際に出土した炭化種子を分析した結果、ムギよりもイネが多く報告された(今帰仁村教育委員会1983)。その後、2002年以降に行われた今帰仁城北部に位置する今帰仁ムラ跡における発掘調査では、フローテーション法を用いた炭化種子回収および分析が行われ、イネより雑穀が多く確認されている(宮城・与那嶺2005、高宮2007)。今回行った植物遺体分析が外郭部分で生活した人々の植物食利用を反映しているとするならば、上記の炭化種子データから、外郭では志慶真門郭より今帰仁ムラ跡に近い植物食利用であったと推察することができる。ただし、1980年代に行われた発掘調査ではフローテーション法を援用していないので、志慶真門郭の植物食利用に関しては今後の検討課題であろう。また、今帰仁ムラ跡、外郭、および志慶真門郭における植物食利用の検討を行うにあたっては、回収された植物遺体の数量化に加え、志慶真門郭で利用された植物と外郭部分や今帰仁ムラ跡で利用された植物の品質差に関する検討も行う必要があるだろう。

例えば、志慶真門郭より回収されたイネ穎果を実見したところ、生育状態が比較的良好な穎果が多く見られた。これに対し、外郭Ⅲ・Ⅳ区より検出されたイネ穎果は、志慶真門郭出土のイネ穎果と比べ生育状態が貧弱であるようだ。今帰仁ムラ跡に関しては、回収された植物遺体の数量化は行われているが、屋敷地2(高宮2007)を除き種子の状態に関する詳細な検討は行われていない。志慶真門郭や今帰仁ムラ跡より回収された植物遺体の詳細な比較・検討を行うことで、階級差による利用植物の品質の違いが理解される可能性があると思われる。

謝辞

今帰仁城内における炭化種子分析という貴重な機会を与えて下さった、今帰仁村教育委員会 宮城弘樹氏にこの場を借りてお礼申し上げます。

《引用文献》

- 赤嶺信哉、喜納正英 2008 「炭化植物遺体」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ』
今帰仁村教育委員会、pp.25-26.
- 高宮広土2004 「シイナグスク出土の植物遺体」『シイナグスク-範囲確認調査報告-』
今帰仁村教育委員会、pp.37-44.
- 高宮広土2007 「今帰仁城跡周辺遺跡出土の植物遺体」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』
今帰仁村教育委員会、pp.301-309.
- 今帰仁村教育委員会1983 『今帰仁城跡Ⅰ』
- 宮城弘樹、与那嶺俊2005 「出土遺物の組成」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』
今帰仁村教育委員会、pp.183-187

今帰仁城跡外郭3・4出土の炭化種子



写真1 イネ



写真2 イネ小穂



写真3 コムギ（背面） コムギ（腹面）



写真4 オオムギ（背面） オオムギ（腹面）



写真5 ムギ類小穂



写真6 アワ（背面） アワ（腹面）



写真7 キビ



写真8 堅果類子葉



写真9 タデ科



写真10 エノコログサ属？
背面 腹面



写真11 カヤツリグサ科

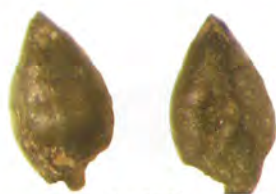


写真12 不明A
背面 腹面



写真13 不明B
外側 内側



写真14 不明C
外側 内側



写真15 不明D
外側 内側



写真16 不明E
背面 腹面

第4節 今帰仁城主郭東斜面から出土した脊椎動物遺体

樋泉岳二（早稲田大学比較考古学研究所）

名島弥生（慶應義塾大学大学院）

菅原広史（早稲田大学大学院）

はじめに

1999～2000年に今帰仁村教育委員会によって実施された今帰仁城主郭東斜面（主郭と志慶真門郭を画する石垣および石垣下の崩落石）の発掘調査において、多数の脊椎動物遺体（骨類）が採集された。これらの骨類は主郭から廃棄されたものである可能性が高い。主郭から出土した動物遺体については、すでに金子（1991）の報告がある。今回の資料は、これに加えて、主郭における動物質食料をはじめとする動物資源利用の実態を検討する資料として重要である。ここではその分析結果について報告するとともに、今帰仁城跡および周辺遺跡（今帰仁ムラ跡）の各地区の出土骨と比較し、主郭における動物資源利用の様相と特徴について考察する。

1. 資料と分析方法

採集された骨類の年代については、共伴した陶磁器などから、15世紀～16世紀のものが中心となると推定される。ただし、採集された骨類は石垣やその崩落石の隙間から出土したものであることから、後世の資料が混じっている可能性もある（実際に少数ではあるが、獣骨には比較的最近のものと考えられる資料が確認されている）。

資料の採集方法は、発掘現場において手で拾い上げられた骨（ピックアップ資料）と、フルイがけによって採集された骨（フローテーションのヘビー・フラクション）があるが、ここで報告するのはピックアップ資料の分析結果である。

採集された骨類には魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類が含まれる。分析作業は全員が協力して行ったが、本報告書での執筆は、魚類については名島・菅原が、その他については樋泉が分担した。また今回の分析では、魚骨および獣骨の人為的損傷（解体痕など）に関して体系的な観察・記載を試みた。分析作業は上記3名のほか、イノシシに関しては久貝弥嗣氏の協力を得た。総括（総合的な考察）は各分担者の所見を踏まえて樋泉がまとめた。

分析方法の詳細は下記の通りである。

(1) 魚類

分析対象とした部位は、主に前上顎骨、歯骨、主上顎骨、角骨、方骨など顎骨周辺部位と椎骨である。魚種によっては、咽頭骨、擬鎖骨、鰭棘、楯鱗なども対象とした。同定方法は現生標本との比較によった。比較に使用した標本は筆者ら（樋泉・名島・菅原）の所蔵標本に加え、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏の所蔵標本も参照させていただいた。椎骨の分析は菅原が、その他の部位については名島が担当した。

なお椎骨の同定は、顎骨周辺部位の分析のみでは検出しきれないデータを補完することを主要目的として実施した。そのためハタ科・フエフキダイ科・ベラ科・ブダイ科など、他の部位で分類され最少個体数（MNI）の算出や計測値などのデータ採取が十分に行えると思われる群は同定対象から除外した。従って対象外とした分類群の同定標本数（NISP）は、実際の出土数より少なく見積もられる点について留意されたい。

まとまった資料数の得られた魚種については、前上顎骨長、歯骨高、咽頭骨幅の計測を実施した。椎骨については組成分析に用いた全資料を対象として、椎体前面の縦径を計測した。

解体痕については、分類群の判明した顎骨周辺部位から人為的損傷を有する資料を肉眼で抽出した後、実体顕微鏡を用いて傷痕の断面形態、断面内部の観察を行った。椎骨については同定作業の際に肉眼で観察された解体痕を有する資料を、分類群を問わず抽出した。そのため同定対象に含めていないブダイ科なども観察表には記載している。ただしNISPの集計数には含めていない。

(2) 両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類

原則として部位の判別可能な資料を同定対象とした。ただし鳥類と哺乳類の四肢骨については、骨端を残さない資料は対象外とした。哺乳類の同定結果で「骨幹近位部」(略号<p>)・「骨幹遠位部」(略号<d>)としたものは、骨端を欠く骨幹資料のうち、それぞれ近位端・遠位端にごく近い部分まで残存している資料であり、最小個体数の算定に使用している。

同定方法は、まず現地(今帰仁村教育委員会)で予備的な同定を行った。その際には現生標本を参照できなかったため、出土資料の中から保存状態のよいものを抽出し、これを比較標本として、同定可能な資料のみを記録した。種類・部位・左右などを確定できなかった資料(現生標本との比較による確認を要する資料)については持ち帰り、現生標本と比較・確認した。使用した現生標本は筆者(樋泉)の所蔵標本のほか、西本豊弘氏(国立歴史民俗博物館)の所蔵標本も参照させていただいた。計測方法はvon den Driesch(1976)に従った。イノシシの解体痕の記載は久貝(2006)の方法を参照した。

2. 分析結果と考察

採集された資料からは、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類が確認された(表1)。同定結果の詳細を表2および表5に、また同定標本数(NISP)と最小個体数(MNI)による組成を表19に示す。出土した遺体の数は魚類が圧倒的に多く、哺乳類、鳥類(主にニワトリ)がこれに次ぐ。両生類、爬虫類は少ない。

(1) 魚類

同定の結果、軟骨魚綱2分類群、硬骨魚綱37分類群、合計39分類群を確認した(表1、表2)。以下、同定結果に注釈を要する分類群について記載する。

① 同定記載

サメ類 椎骨が52点出土している。弓溝の形状などから、メジロザメに類すると思われるものが含まれる。椎体の径は5.4~27.1mmのものがあり、少なくとも3個体以上含まれていると考えられる。平均値は13.0mmで、10mm以上15mm未満の資料が大半をしめる(図1)。

トビエイ科 歯板が5点出土している。明らかに大きさの異なる資料があり、少なくとも2個体以上含まれると考えられる。このほか弓溝が明確ではないことから、エイ類とみられる椎骨も2点出土している。

ダツ科 前上顎骨、歯骨、腹椎を同定したが、26点中19点は腹椎である。椎体前面縦径は3.7~11.1mmに分布し、平均値は6.8mmである(図1)。

ボラ科 主鰓蓋骨、腹椎、尾椎を同定したが、32点中19点が腹椎、9点が尾椎である。椎体の径は腹椎が5.4~10.6mm、尾椎が6.4~12.2mmに分布し、平均値は腹椎が8.6mm、尾椎が9.7mmである(図1)。

カマス属 歯骨、口蓋骨、腹椎、尾椎を同定したが、出土資料の大部分は椎骨である。棘突起の形態や骨質表面の特徴などから比較的同定が容易である。同定した椎骨の中では最多となる216を数えた。椎体の径は腹椎が2.9~7.7mm、尾椎が2.9~6.4mmに分布し、平均値は腹椎が4.8mm、尾椎が4.6mmである(図1)。

ハタ科 前上顎骨、歯骨で、マハタ属に近似するマハタ型と、スジアラ属に近似するスジアラ型を確認した(図版4)。出土資料の大部分はマハタ型である。左右の歯骨高を計測した結果、マハタ

型は3.4~21.5mmに分布し、6mm以上12mm未満の資料が半数以上を占めていることが確認された(図2)。体長30~40cm程度の中・大型個体と考えられる。スジアラ型は11~19.4mmに分布し、計測資料10点中8点は12mmを超える。スジアラ属の魚種は、最大で体長60~100cmに達する。スジアラ型の多くは、こうした大型個体のものと考えられる。

アジ科 前上顎骨、歯骨、主上顎骨で、イトヒキアジ属、カスミアジ近似種、ギンガメアジ近似種、メアジ近似種が確認された(図版7)。腹椎と尾椎は、大型種に属するとみられる群と、メアジに近似する群とに分けることができる。大型種はギンガメアジ・カスミアジ・イトヒキアジの現生標本と比較される椎骨である。いずれかに極めて近似するものがある一方、アジ科に同定されるが細別は困難なものも存在する。現段階では検討が不十分と考え「アジ科大型種」として一括した。メアジ近似種は腹椎のみを同定しており、尾椎は類似する他種と明確な判別基準を見出すことが出来なかったため抽出には至らなかった。他の部位はアジ科として一括した。

確認した魚種のなかでは、イトヒキアジ属が最も多く最小個体数の半数以上をしめている。右歯骨高を計測した結果、イトヒキアジ属は5.9~17.2mmに分布し、計測資料10点中6点は12mm以上となった。これらは体長40cm程度的大型個体と考えられる(図3)。カスミアジ近似種は26.8mm、メアジ近似種は3.3mmと3.9mmとなっている。腹椎では、縦径平均値が「大型種」では11.5mm、メアジ近似種では4.0mmと、明瞭な差が表れる(図1)。

シイラ属 前上顎骨、歯骨、主上顎骨、腹椎、尾椎を同定したが、大部分は腹椎と尾椎である。棘突起や関節突起の形態、椎体側面に微細な隆起線が横位に入る点などが特徴である。また、他種に比べ骨質が脆く感じられる。これまで沖縄県内での報告例はあまり見られない一群である。前回の今帰仁城跡主郭の報告(金子1991)に歯骨・椎骨が1点ずつ報告されている他、首里城の右掖門で「科・種不明」(金子2003)として報告されている。まとまった数が確認されるのは今回が初めてであろう。椎体前面縦径は、腹椎が6.9~18.0mm、尾椎が7.3~21.5mmに分布し、平均値は腹椎が10.7mm、尾椎が11.9mmである。腹椎、尾椎ともに15mm未満の資料が大部分をしめている(図1)。

クロダイ属 右前上顎骨長を計測した結果、14.3~38.5mmの資料が見られ、計測資料47点中40点が25mm以上35mm未満となった(図4)。体長30~40cm程度の個体と思われる。

フエフキダイ科 前上顎骨、口蓋骨、方骨で属レベルの分類を行い、フエフキダイ属、メイチダイ属、ヨコシマクロダイ属を確認した(名島・樋泉2007)(写真図版3~4)。このうちフエフキダイ属は、前上顎骨の形態差に基づき、アマミフエフキやホオアカクチビなどに類するタイプ(アマミフエフキ型)と、ハマフエフキやイソフエフキに類するタイプ(ハマフエフキ型)、キツネフエフキに類するタイプ(キツネフエフキ型)に分類した。またヨコシマクロダイは歯骨、角骨についても分類した。最も多いのは、フエフキダイ属ハマフエフキ型で、全体の87%をしめている(%MNI)。

本科については左右の前上顎骨長を計測し、サイズの検討を行った(図5)。ハマフエフキ型では、16.3~50.8mmの資料が得られ、20mm以上35mm未満のものが全体の70%以上をしめている。アマミフエフキ型も17.3~40.1mmに分布しており、15mm以上35mm未満のものが多い。これらの資料は、体長30~50cm程度の中・大型個体と考えられる。このほか35mmを超える資料も、フエフキダイ属全体の20%以上をしめている。フエフキダイ属には、最大で全長90cmに達する種類もある。これらの資料は、そうした大型種のものと考えられる。メイチダイ属は17.8~28.0mmに分布し、ヨコシマクロダイは37.2~59.3mmに分布している。

ベラ科 咽頭骨で「シロクラベラ型」、「タキベラ型」、「ベラ科A」、「ベラ科B」、その他(写真図版2)が確認された(類型分類は金子(1996)および樋泉(2005)による。ただし従来「コブダイ型」とされてきたタイプについては、菅原(2008)に従って「シロクラベラ型」に変更した)。シロクラベラ型はシロクラベラやイラなどイラ属に、タキベラ型はタキベラ属やカンムリベラ属に類

する。最も多いのはシロクラベラ型で全体の50%以上をしめている (%MNI)。下咽頭骨の幅を計測した結果、シロクラベラ型は26~70.4mmの資料が見られ、40mm以上の大型資料が多数をしめていることが確認された (図6)。これらは、少なくとも体長30cmを超える中・大型の個体のものと考えられる。その他のタイプは、タキベラ型が18.6~46.4mm、ベラ科Aが11.8~36.7mm、ベラ科Bが20.7~46.6mmに分布し、25mm以上35mm未満のものが最も多い。総じてシロクラベラ型より小さく、多くは体長20~30mm程度のものと思われる。AとBでは、Aの方がやや小さい傾向がある。

ブダイ科 前上顎骨、歯骨、咽頭骨でイロブダイ属、アオブダイ属が同定された (図版1)。出土資料の大部分はアオブダイ属である。アオブダイ属には少なくとも3種以上が含まれると考えられるが、ここでは一括した。また他の部位はブダイ科として一括した。本科においては、他の部位に比べ頑丈で最も遺存しやすい咽頭骨が、前上顎骨や歯骨に比して著しく少ない状況が確認された (図7)。アオブダイ属では、右前上顎骨が294点に対し、下咽頭骨は80点で最小個体数の27%分しか検出されていない。イロブダイ属では右前上顎骨が35点に対し、下咽頭骨は6点で最小個体数の17%分にとどまっている。

前上顎骨と下咽頭骨については、前上顎骨長と下咽頭骨幅を計測した。その結果、アオブダイ属では前上顎骨長20mm以上30mm未満のものが90点で最も多く、下咽頭骨幅では10mm以上15mm未満のものが28点で最も多いことが判明した (図8、9)。図10、11は、田中 (1985) によるアオブダイ属ナンヨウブダイ現生標本の計測値データを基に、体長と前上顎骨長、下咽頭骨幅の関係を示したものである。この図に基づけば、前上顎骨長20mm以上30mm未満のものは体長30~40cm台となる。一方、下咽頭骨幅10mm以上15mm未満のものは、体長40cm未満と推定される。

アオブダイ属には、ナンヨウブダイに限らず少なくとも3種以上が含まれている。従って現生ナンヨウブダイのデータと単純に比較することはできない。しかし少なくとも本地区出土資料は、体長30~40cm程度のものを中心としており、40cmを超える大型個体に対応する下咽頭骨は、前上顎骨に比してやや少ない可能性が指摘できる。

スマ 腹椎・尾椎が同定されている。スマ・カツオの椎骨は棘突起と椎体側面の隆起線に特徴づけられ、両者は近縁種であることから椎骨の形状も近似している。出土資料を観察すると腹椎では椎体の長さが比較的短く、腹側に入る隆起線が太いなどの点でスマに比定できる。尾椎でも椎体側面の隆起線の太さからスマに同定できる資料が大半を占める。また、尾柄部の尾椎でも椎体長や関節面の形状から、カツオよりスマに近似すると判断できる。欠損品など一部に検討の余地を残す資料もあるが、全体の傾向からここではスマとして表記した。椎体の径は腹椎が7.7~10.5mm、尾椎が7.8~14.6mm、尾椎尾丙部が6.8~14.5mmに分布し、平均値は腹椎が9.2mm、尾椎が10.3mm、尾椎尾丙部が11.8mmである (図1)。このほかサバ科の角骨、前上顎骨もわずかながら出土している。

ニザダイ科 歯骨、主上顎骨、方骨、擬鎖骨、主鰓蓋骨、腹椎、尾椎、尾部楯鱗を同定したが、105点中腹椎が12点、尾椎が59点である。椎骨の同定数が群全体の約7割を占めている。椎体の径は腹椎が3.7~12.9mm、尾椎が2.9~13.1mmに分布し、平均値は腹椎が7.7mm、尾椎が7.9mmである (図1)。

アイゴ属 歯骨、擬鎖骨、腹椎、尾椎を同定したが、シイラ属やニザダイ科と同様、NISPのほとんどが椎骨によるものである。椎体の径は腹椎が2.6~10.7mm、尾椎が2.5~10.0mmに分布し、平均値は腹椎が5.4mm、尾椎が5.2mmである (図1)。

未同定種UK-A 未同定資料のうち、形態的特徴が明瞭なものはUK-A~D¹⁾とした (図版9)。このうちUK-Aとした前上顎骨と歯骨は、大型で歯列がなく同一種のものと考えられる。本資料は未報

告ではあるが、首里城と勝連城でも確認されている²⁾。

② 組成

主体種となるのは、同定標本数（NISP）、最小個体数（MNI）のいずれにおいても、ブダイ科、フエフキダイ科、ベラ科の3種である（表19、図12）。いずれもサンゴ礁を代表する魚種であるが、フエフキダイ科とベラ科の大半をしめるハマフエフキ型とシロクラベラ型は、それぞれ内湾や比較的海岸に近いサンゴ礁の浅場に多いハマフエフキとシロクラベラ（関2004；樋泉2006；藤山2004）に同定される可能性が高い。このほか内湾・汽水域を主な生息域とするクロダイ属も、全体の8%（%MNI）をしめている。またダツ科、カマス属、アジ科、シイラ属、スマなど、サンゴ礁よりも外側の海域を中心に生息する回遊魚類も、NISPでは全体の1割近くをしめている。

③ 人為的損傷（表3、4 写真図版10～17）

人為的損傷と推定される傷痕が確認されたのは、顎骨周辺部資料54点、椎骨資料62点である。椎骨資料はサメ類1点を除き、ブダイ科、フエフキダイ科、ハタ型など、組成分析の対象から除外したものばかりであり、スマ、シイラ属などの回遊性魚類では確認されなかった（表4）。顎骨周辺部資料54点とサメ類椎骨資料1点については、実体顕微鏡を用いて傷痕の断面形態、断面内部の観察をおこなった（表3）。傷痕には明瞭な切断痕のほか線状痕や削り痕、断面がV字状、またはV字が2～3列連なる段状を呈する傷痕が認められた。大部分は断面形態がV字状の傷痕で、断面内部に金属性の刃物によると推定される削り痕が観察された。

人為的損傷を伴う資料の全体量は極めて少ない。ただしいくつかの資料については、傷痕の位置や形状に共通性が認められた。イロブダイ属では右歯骨の歯板面内部に、幅広のV字状痕が縦位方向に平行して2例並ぶ資料が2点確認された（写真図版11：資料No5、6）。ベラ科の歯骨では歯骨下端内側に、V字状痕が認められるものが多い（写真図版12：資料No8～11）。シロクラベラ型の下咽頭骨6点では、縦位もしくは前後方向のV字状痕または線状痕が、前面から腹面に位置している（写真図版12、13：資料No13～18）。ハタ科の擬鎖骨8点の傷痕は全て屈曲部周辺に位置し（写真図版18：資料No39～46）、うち6点は正面に横位方向もしくは外側へ傾斜する斜め方向のV字状痕が認められる（写真図版18：資料No39～43、45）。

フエフキダイ科の歯骨では、連合面直後内側の歯列面から歯骨下方に、後方に向かって傾斜するV字状痕の認められるものが多い（写真図版15、16：資料No24～28、29～31）。なかでも左歯骨では、長いV字状痕と短いV字状痕が前後に平行して並ぶ極めて類似した資料が3点認められ（写真図版15：資料No24～26）、うち2点では連合部が切断され、長い傷痕の断面前方に明瞭な削り痕が観察された（写真図版15：資料No25、26）。右歯骨2点では、歯列面から歯列面下部にとどまる短い傷痕が確認された（写真図版16：資料No30、31）。同様の傷痕はフエダイ科の右歯骨1点にも認められる（写真図版16：資料No47）。連合部が切断された資料は、イトヒキアジ属の右歯骨2点でも確認された（写真図版16：資料No50、51）。いずれの資料も縦位方向に切断され、その後方内側には切断痕にほぼ平行するV字状痕や線状痕が数例並ぶ。同様の資料は、奄美大島・用見崎遺跡出土のギンガメアジ属でも1点確認されている（樋泉1998）。

椎骨では、主に腹椎の腹側面に対し横方向、尾椎の椎体左右側面に縦方向に残される傾向が見て取れる。また、椎骨自体を切断したと見られる資料も1点検出している。

(2) 両生類・爬虫類

両生類ではカエル類、爬虫類ではヘビ類・ウミガメ類・リクガメ類（おそらくリュウキュウヤマガメ）が同定された（表1、表5）。出土数は、ウミガメ類が比較的多いが、他はごく少ない（表19）。ウミガメ類には大小さまざまなサイズのものが混在している。

(3) 鳥類

カラス属・ワシ科・カモ類・ハト科・ニワトリが同定されたほか、未同定の鳥骨資料が若干ある

(表1、表5)。出土数はニワトリが圧倒的に多く、その他ではハト科・カラス属がやや多い(表19、図13)。

ニワトリ ニワトリは若鳥と成鳥に明確に分かれる。MNIは若鳥26、成鳥15で、若鳥が多い。若鳥はすべて骨化が不十分(骨端は未骨化のため残っていない)であり、かなり若い段階で屠殺されている(写真図版20)。

成鳥のサイズには小型のものと、中～大型のものがあり、とくに小型タイプは明瞭に区別される(明らかに小型または大型と判断されるものは、表5にそれぞれ「ニワトリ(小)」、「ニワトリ(大)」と表示した)。同様の特徴は主郭出土資料でも確認されており、性差の可能性が指摘されている(金子1991)。若鳥にも大小の変異がみられ、検討不十分ではあるが、成鳥に比べて大型タイプが多いようである(写真図版20)。もしも大小の差が性差であるとすれば、雄鳥は若い段階で屠殺され、雌鳥は成長になるまで飼育されていたことになる。

部位組成には成鳥と若鳥で異なった特徴が認められた。すなわち成鳥では、部位ごとのMNIは脛骨15、大腿骨11、中足骨8、鳥口骨・肩甲骨・上腕骨・橈骨各6、尺骨5、中手骨3で、後肢への偏りが認められるものの、全身骨が比較的バランスよく出土している。これに対し若鳥では、脛骨26、上腕骨23、他は大腿骨6、尺骨5、鳥口骨・橈骨各1で、脛骨と上腕骨への偏りが顕著である。このことから、成鳥と若鳥では解体～調理の過程でも異なった取り扱いがなされていた可能性が考えられる。

以上のように、今回得られたニワトリ遺体は、年齢(および雌雄?)によって飼育・解体・調理の過程が異なっていたことを示唆しており、ニワトリの利用法を具体的に示すきわめて興味深い事例といえる。

ただし、若鳥の骨は骨化が不十分で、骨質脆弱であるにもかかわらず保存状態は良好であり、本当にグスク時代のものとしてよいか不安が残る。調査を担当された宮城弘樹氏からのご教示によれば、出土状況から後世の可能性を示す証拠は確認されていないとのことであるが、年代の判断には慎重を期す必要があり、上記の所見についてはこの点を確認した上で、あらためて検討したい。

その他の鳥類 ハト科は、いずれもキジバトの現生標本に酷似するが、サイズはこれよりやや小型からやや大型のものまで、ばらつきがみられた(表16)。ワシ科大腿骨はトビ現生標本とほぼ同大、カモ類の鳥口骨・中足骨はマガモ・カルガモ現生標本とほぼ同大である。カラス属はハシブトガラス現生標本に酷似するが、やや小型である(表16)。「未同定」とした鳥類の左右上腕骨はほぼ同形・同大で同一種と考えられる。比較的小型の種で、松井(2008:130)に示されたトラツグミに近似するが、やや小さい。ツグミ科の小型種の可能性がある。

(4) 哺乳類

11分類群が同定された(表1、表5)。以下、同定結果に注釈を要する種類について所見を記載する。

①同定記載

トガリネズミ科 頭蓋骨(上顎骨+鼻骨)1点、右下顎骨2点が検出された。これらは顎骨・歯の形状からトガリネズミ科に同定される。リュウキュウジャコウネズミ *Suncus murinus temminckii* の可能性が高いが、さらに検討を要する。リュウキュウジャコウネズミは大陸からの人為的移入種とされており(阿部ほか 1994)、もし出土標本がこの種に同定されるとすれば、グスク時代に移入された可能性もあり、注意を要する。自然の遺骸である可能性が高い。

ネズミ科 顎骨・椎骨・前後肢骨が出土している。顎骨4点はすべてネズミ亜科である。最小個体数は9と多いが、いずれも自然の遺骸である可能性が高い。

イヌ 裂肉歯長は上顎P4が17.5mm、下顎M1が約19～20mmと比較的小型だが、第3中足骨は最大長64.5mmと大型である(表15)。

ウマ 頭骨・顎骨・遊離歯、前・後肢骨が出土した。成獣が大半だが、若獣も若干みられる。中手骨・中足骨の計測値（表11）に基づく推定体高（西中川編 1991 の方法による）は約120～130cmである。

イノシシ類（イノシシまたはブタ） 哺乳類としては最も多くの遺体が出土した（MNI=31。表19）。部位構成は全身の骨格がみられ、著しい偏りはないようである（表5）。

形質面からブタの可能性が考えられる資料として、同一個体と思われる左右下顎骨各1点（表6の備考欄参照）が確認された（写真図版No21、1・2）。ともにP3付近からM3歯槽部分までを残す下顎骨体で、M2は未咬耗、M3は脱落しているが、歯槽の状態から未萌出段階と判断される。小池・林（1984）の年齢グループⅡ（約1.5歳前後）である。これらの資料は下顎体の湾曲がやや強く、今帰仁ムラ跡屋敷地2（今帰仁城周辺遺跡Ⅲ区b）で確認されたブタ下顎骨（樋泉 2007）に類似しており、年齢段階も同じであることから、ブタの可能性が高い。主郭出土の「ブタ」（金子 1991）との比較検討は今後の課題である。なお表5で「ブタ」と断定した中手／中足骨は明らかに最近のもの（テビチ）である。

出土資料全体の死亡年齢構成を、小池・林（1984）に従い下顎骨の臼歯萌出状態によって推定した結果、年齢グループⅠ（M1萌出－M2未萌出／萌出中＝約0.5～1歳）が11例、年齢グループⅡ（M2萌出－M3未萌出＝約1.5歳前後）が7例、年齢グループⅢ以上（M3萌出中～萌出完了＝約2.5歳以上）が5例となった。大半の個体が生後約1年半ころまでに死亡していることから、上記のブタ？以外にも、出土したイノシシ類の多くが飼育個体であった可能性がある。一方で成獣（年齢グループⅣ～Ⅴ＝3.5歳以上）も認められ、さらに遊離歯ではM3が普通（表5）である。このように、今回の資料には成獣も少なからず含まれており、これらは狩猟によって捕獲された野生個体の可能性も考えられる。

下顎後臼歯の計測値（mm）は、M1長13.0～14.7（平均13.8、N=25）、M2長16.3～19.4（平均17.5、N=27）、M3長25.8～31.2（平均28.4、N=18）であった（表7）。またブタ？の下顎M1長は14.3～14.4、M2長は17.9～18.1で、今回の資料の中では比較的大型であり、今帰仁ムラ跡出土ブタ下顎骨（M1長14.6～14.8、M2長18.4～19.2）に近い。

今帰仁ムラ跡（名島 2005、樋泉2007）のイノシシ類は、ブタと判定されたもの以外の資料を含めても下顎M1長14.5～14.9（平均14.7、N=4）、M2長18.0～20.0mm（平均18.8、N=7）と比較的大型で、上記のブタとほぼ同大である。これと比較すると、今回の資料では計測値のばらつきが大きく、とくに今帰仁ムラ跡よりも小型の個体が多くみられる点の特徴である。こうした小型の個体は、現生の国頭産野生リュウキュウイノシシ（下顎M1長、M2長の平均値はそれぞれ約12mm、約16mm。川島・村岡1984）に近い大きさであることから、狩猟によって捕獲された野生個体である可能性も考えられる。

以上から、少なくとも顎骨・歯から見る限り、今回得られたイノシシ類の多くはブタ（または飼育個体）である可能性が高いが、狩猟で捕獲された野生イノシシもある程度は含まれている可能性が高い。

ウシ 哺乳類としてはイノシシ類に次いで多い（MNI=12）。頭骨・顎骨・歯、前・後肢骨が出土した。成獣が大半だが、若獣も若干みられる。中手骨・中足骨の計測値（表8）に基づく推定体高（西中川編 1991 の方法による）は約110～130cmである。

ジュゴン 肋骨破片が21点とやや多く得られたほか、頭骨破片2点、上腕骨・尺骨各1点、および部位不明だが骨質からジュゴンと推定される長骨2点が確認された。

以上の他に、オオコウモリ科、ネコ、ヤギ、イルカ類がわずかに確認されている。

②組成

MNI比（表19、図13）ではイノシシ類が最も多く（MNI=31）、ウシ（12）、ネズミ科（9）、ウ

マ（４）がこれに次ぐ。ただしNISP比ではウマがネズミ科よりも多い（表19）。他の種類はすべてMNI＝２または１である。

③人為的な損傷

主体種であるイノシシ類・ウシ・ウマの同定対象資料について、人為的なものと考えられる損傷のある部位・位置、損傷のタイプ、方向を記録した（同定対象外の骨幹破片などにも損傷がみられたが、今回は対象から除外した）。損傷のタイプは丸山ほか（2004）・久貝（2006）を参考にして、「カット・マーク」（刃を左右に往復させる傷）、「チョップ・マーク」（比較的厚い刃物による打撃痕）、「スパイラル・フラクチャー」（打撃によって生じた螺旋状の割れ口）、「その他」に分類した（写真図版30）。

観察結果を表17・表18に示す。同定対象資料全体に対する損傷資料の比率は、イノシシ類が1197点中129点（10.8%）、ウシが346点中36点（10.4%）、ウマが120点中4点（3.3%）で、イノシシ類とウシの頻度が高い。

イノシシ類 人為的な損傷の大半はカット・マークであり、全身の各部位に観察された。四肢骨では関節周辺に多くみられ、骨の主軸方向に対して横～斜位をなすものが多い。これらは主に解体の過程で関節の分離や肉の取り外しの際に付けられたものと推定される。部位別にみると、上腕骨の遠位側と尺骨の滑車切痕周辺にもっとも多く、次いで肩甲骨の肩関節側に多い。それぞれ肘関節、肩関節の分離を意図したものと推定される。後肢では全般的に少なく、前肢とは解体の方法が異なっていた可能性がある。四肢骨以外では肋骨の近位側外面に多い。背肉の取り外しの際のものかと思われる。

チョップ・マークも普通に見られたが、骨を切断するものではなく、部位や位置もカット・マークと共通するものが多い。スパイラル・フラクチャーは少ない。骨髓の摘出を目的とした処理はあまり行われていなかったと推測される。

ウシ 損傷のタイプと部位・位置にはかなり明確な規則性が認められた。すなわち、カット・マークは肩甲骨の関節部周辺、上腕骨遠位端～橈骨近位端、脛骨遠位端～距骨、中足骨遠位端と基節骨に集中しており、骨幹に対して横～斜位に刻まれている。これらはそれぞれ解体の際に肩関節、肘関節、踝関節、指の切断・分離を意図したものと推定される。チョップ・マークは橈骨と中手骨の骨幹部に横位～斜位でみられ、橈骨は打撃によって骨幹が折損している（写真図版No25-7）。スパイラル・フラクチャーは上腕骨・橈骨・中手骨・大腿骨・中足骨の骨幹にみられた（写真図版30-7・8）。これらは骨髓摘出を意図したものである可能性が考えられる。

ウマ カット・マークは橈骨遠位端と踵骨、チョップ・マークは橈骨骨幹、スパイラル・フラクチャーは中手骨骨幹で各1例が確認された。

なお、人為的な損傷以外に、肉食獣（おそらくイヌ）による咬痕のみられる資料が若干あり、廃棄された獣骨の一部がイヌの餌となっていたことが示唆される。

3. 総括－主郭東斜面出土の骨類からみた動物資源利用の様相

今回分析した資料は今帰仁城跡主郭から投棄されたものと推定されている。したがって、その内容はおもに主郭における動物資源利用の様相を反映したものである可能性が高い。ここでは、これまでの分析結果から推定される動物資源利用の内容と特徴についてまとめる。

(1) 全体的な構成

採集された骨類は膨大な数であり、総数はNISPで8298点、MNIで995個体（いずれも自然遺骸の可能性のある資料を除く）に及ぶ（表19、表20）。このことから、今帰仁城中枢部において、きわめて活発な動物資源の消費が行われていたことがうかがえる。その大部分は魚類、鳥類（おもにニワトリ）および哺乳類（おもにイノシシ類）によって占められており（図14）、これらに対する

需要がとくに高かったことが示唆される。

今帰仁城跡関連遺跡群では、これまでに今帰仁城主郭（金子1991）、同志慶真門郭（金子1983）、今帰仁ムラ跡（今帰仁城周辺遺跡）（名島2005、樋泉2007、宮城ほか2008）において、出土骨類の内容が報告されている。以下ではこれらと今回の資料を比較する（表20）。

まず骨の出土量をみると、MNI合計では今回の資料が995、主郭が864ときわめて多いのに対し、志慶真門郭が110程度、今帰仁ムラ跡は各地区約10～65とはるかに少ない。地区ごとに発掘面積などが異なるので単純には比較できないが、その点を考慮しても、今回の資料と主郭の類似性は明らかである。

骨類の組成をみても、今回の資料は魚類・イノシシ類・ニワトリが多い点、少数ながらジュゴンがみられる点で主郭との類似性が高く、ウシ・ウマの多い今帰仁ムラ跡とは対照的である。志慶真門郭は魚類が多くジュゴンがみられる点では主郭や今回の資料に類似するが、イノシシ類やニワトリが少なくウシが多い点で明確に異なる。

以上のように、今回の資料は全体として主郭との類似性を明確に示しているのに対して、今回調査された石垣の下に位置する志慶真門郭とは相違点が多い。このことは、今回の資料が主郭から投棄されたものとする想定を裏付けている。

いっぽう、今回の資料と主郭出土資料の明らかな相違点としては、今回の資料におけるニワトリの出土量の多さを指摘できるが、こうした相違が生じた原因については現時点では説明が難しい。また、今回の資料ではとくに若鳥が多くみられる点が特徴であり、その性格や年代を解明する上で主郭のニワトリに若鳥がどの程度含まれているかに関心が持たれるが、この点については報告書に記述がなく、明らかでない。これらの問題については、主郭資料の再検討も含め、今後の課題としておく。

(2) 魚類

魚骨の出土数はきわめて多く、全てピックアップによる採集資料であるにもかかわらず、NISPで6103点（74%）、MNIで884個体（89%）に達する。種類も多様で、確認されたものだけでも39分類群にのぼる。出土魚種には、ブダイ科やフエフキダイ科、ベラ科、ハタ科、クロダイ属などのほか、タマガシラ属やイスズミ科、タチウオ科など、従来、報告されたことのない魚種も含まれている。また椎骨の同定に基づき、回遊魚に属するアジ科・ダツ科・シイラ属・カマス属・スマ、サンゴ礁域を生息域とするニザダイ科・アイゴ属、河口周辺などの汽水域に生息するボラ科などの魚種も多数確認された。城跡内においては極めて多彩な魚類が利用されたものと考えられる。

出土資料の多くは他所から城跡内に持ち込まれたものと考えられるが、その多くは遺跡周辺の沿岸海域で捕獲可能である。今帰仁城跡の位置する本部半島北岸には、最大で幅1km以上に達する良好なサンゴ礁が発達し、東側には大井川の河口や羽地内海など内湾・汽水性の海域も広がっている（海上保安庁水路部1987）。主体種となっているブダイ科やフエフキダイ科ハマフエキ型、ベラ科シロクラベラ型、クロダイ属は、こうした海域で捕獲しうる。またアジ科やダツ科、カマス属は、回遊魚といっても種によって海岸やサンゴ礁近縁まで寄ってくることもあるため、沿岸での漁撈活動で獲得は可能であろう。一方、シイラ属は基本的に外洋を回遊するため、サンゴ礁近縁を離れ、ある程度沖合に活動範囲を広げていた可能性も指摘できる。

漁法については、今帰仁城跡主郭および今帰仁ムラ跡から網漁に関連するものと推定される二枚貝製有孔製品や石錘、石製浮き、タカラガイ製漁網錘のほか、鉄製釣針が出土しており、網漁のほか釣漁も行われていたと想定される。ブダイ科、ベラ科、フエフキダイ科等、サンゴ礁魚類の多くは、現在、追い込み網漁や刺し網漁などの主な捕獲対象となっている（名嘉真・出村1981；関2004）³⁾。他方、椎骨が多数検出されたアジ科大型種やスマ、シイラ属などは、主に磯釣りや沖合での船釣りなどでよく捕獲される（藤山2004）⁴⁾。出土魚種の多くは、サンゴ礁周辺における網漁

やサンゴ礁近縁から沖合における釣漁など多彩な漁法によって捕獲されたものと考えられる。

周辺海域で捕獲された魚類の多くは、城跡内で解体・調理されたものと推測される。城跡内からは刀子のような金属製の刃物が出土しており、出土魚骨からは量的には少ないが、刃物による切痕と思われるV字状痕や線状痕が、特定の魚種または部位に観察された。またアジ科の歯骨では、同様の損傷パターンを示す資料が奄美大島・用見崎遺跡でも確認されている。これらは城跡内に持ち込まれた魚類が、ある程度決まった方法で解体・調理されたことを示唆する。例えばベラ科は、鰓の間に位置している下咽頭骨で、前面から腹面に縦位または前後方向の傷痕が多数確認された。これらは内臓などを抜き取るために、腹側から縦位方向に刃物を入れ、前後方向に切った際についた傷痕と推測される。

腹椎の傷痕からは、腹側の面に垂直あるいはやや左右にずれた方向から、尾椎からは側面に対し垂直あるいはやや前後斜め方向から刃物を当てた行為が推測される。椎骨自体が切断されている事例はあまり見当たらないことから、身を骨から取り外すことを目的とした解体の痕跡と言えるのではないだろうか。傷痕から具体的な解体・調理過程を復元するためには、傷痕のより詳細な観察と実験による比較検討が必要不可欠であるが、同様の傷痕が他の遺跡出土資料にも認められるかについて、今後注視していく必要がある。

なお、解体痕のある骨が全資料中に占める比率を魚骨と獣骨で比較すると、イノシシ類が10.8% (1197点中129点)、ウシが10.4% (346点中36点) であるのに対して、魚類 (頭骨周辺部資料) は1.1% (4979点中54点) ときわめて少ない (椎骨については全体の資料数が不明のため比率を算出できないが、やはりごく少数であることは間違いない)。今回分析した魚骨は比較的大型のものが多い (アオブダイ属では体長30~40cm前後) が、解体・調理の過程において、上記のような刃物で切り捌く処理は必ずしも一般的ではなく、刃物を使わない調理法 (たとえば大型の鍋で煮る、大きな蒸籠で蒸すなど) が多く用いられていた可能性も考慮する必要があるだろう。

ブダイ科では、前上顎骨や歯骨に比べ咽頭骨の出土数が極めて少ない。またブダイ科の咽頭骨には、ベラ科に認められたような傷痕は一切観察できなかった。咽頭骨は鰓や内臓を摘出する際に抜き取られ、ともに廃棄されることが多い部位である。ブダイ科については、少なくともベラ科とは別の場所で鰓・内臓の抜き取り作業が行われたものと推定され、鰓を抜いてから城跡内に持ち込まれた可能性も考えられる。

多彩な魚種が利用されている状況は、今帰仁ムラ跡においても確認されている (名島2005、樋泉2007)。ただしその出土量は大きく異なり、MNIで今回の分析資料が884、主郭出土資料 (金子1991) が684であるのに対し、今帰仁ムラ跡では全地区のデータを合わせても65にとどまる。組成にも違いがあり、今回の資料および主郭出土資料では、ブダイ科のしめる割合が今帰仁ムラ跡に比べて高い (表20)。また今回の資料で特筆されるのは、シイラ属やスマの椎骨が多数検出された点である。これらの魚類は今帰仁ムラ跡では全く確認されていない。

出土魚種組成を見ると、漁撈活動の中心がサンゴ礁域にあることは、ブダイ科やフエフキダイ科が大部分を占める点から明らかである。その中で、獲得するためには外洋へ赴く必要のあるシイラ属などの存在は、獲得すること自体が他の魚類と異なる意義を有していた可能性が示唆される。シイラ属が首里城からも出土している⁵⁾点を考えると、上級階層との関連性を推測することができる。さらに首里城、勝連城と共通する資料として、UK-Aのような極めて珍しい資料も出土している。利用魚種の違いや魚骨の総量の差は、当該時期における社会的階層差を反映している可能性が高いと考えられる。

(3) 鳥獣類 (鳥類・哺乳類)

鳥獣類ではニワトリがMNI=41と最も多く、イノシシ類 (MNI=31)、ウシ (MNI=12) がこれに次ぐ。自然遺骸の可能性の強いものを除けば、これら3種が鳥獣類の約80% (MNI比) を占め

ており、主郭での重要な食材となっていたことが推定される。

ニワトリは成鳥と若鳥に明確に分かれ、とくに若鳥が多い点が特徴である。成鳥・若鳥ともに大小のばらつきがみられ、また若鳥では大型の個体が目立つ。大小が性差を示すと仮定すれば、若鳥は雄が多いと考えられる。成鳥と若鳥は出土部位の組成も異なり、成鳥では全身骨が比較的バランスよくみられるのに対して、若鳥では脛骨と上腕骨への偏りが著しい。先述のとおり、若鳥の帰属年代に関してはさらに検討を要するが、グスク時代のもので間違いないとすれば、飼育・屠殺・解体・調理の過程において、成鳥と若鳥とで異なった取り扱いが行われていた可能性がある。こうした事例が他の遺跡でもみられるのかについては、類例調査が充分でないため今後の課題だが、多数のニワトリが出土した首里城鎖之間地区では若鳥は少なく（金子2005）、本遺跡とは様相が異なる。

イノシシ類にはブタの可能性の高い下顎骨がみられた。また年齢構成も1歳半までのものが多数を占めていることから、その多くが飼育されていた可能性が高い。これらが城内で飼育されていたものか、外部から供給されたものかは判断が難しいが、今帰仁ムラ跡屋敷地2では、形質・年齢構成について類似の様相が確認されている（樋泉2007）ことから、今帰仁ムラ跡などの周辺の集落遺跡で飼育されたものが城内に持ち込まれた可能性も考えられる。

一方で、今回の資料には成獣も少なからず含まれていること、また今帰仁ムラ跡出土資料よりも小型の個体がみられ、これらが現生国頭産の野生イノシシのサイズに近いことから、狩猟によって得られた野生の個体もある程度含まれている可能性が高い。

ウシは城内で飼育されていた可能性もあるが、先述のとおり今帰仁ムラ跡からの出土量が多いことから、こうした周辺集落から供給されていた可能性が高い。

おわりに

今帰仁城主郭東斜面から出土した大量の骨類を分析した。その内容は主郭出土資料との高い類似性を示し、これらが主郭から投棄されたものであることが裏付けられた。また主郭出土資料と合わせて、今帰仁城中枢部における多様かつきわめて活発な魚類・鳥獣類資源利用の実態が明らかとなった。なお、今回分析した資料はピックアップによって採集された比較的大型の骨である。今回の調査では水洗選別による微小骨の採集も行われているが、これらについては時間的な制約から分析することができなかった。今後こうした資料も追加分析することにより、主郭における動物資源利用の全容解明を進めたい。

謝辞：調査分析に際しては、今帰仁村教育委員会宮城弘樹氏・玉城靖氏に全面的なご教示・ご助力を賜った。国立歴史民俗博物館西本豊弘氏には現生標本を参照させていただいた。宮古島市教育委員会久貝弥嗣氏にはイノシシの解体痕分析に際して多くのご教示・御協力を賜った。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

《註》

- 1) UnKnownを略してUK-A～Hとした。
- 2) 首里城出土資料については樋泉、勝連城出土資料については菅原が実見し、確認している。
- 3) サンゴ礁魚類のなかでも、底棲性のフエフキダイ科、ベラ科は、釣漁で捕獲されることも多い（名嘉真・出村1981：藤山2004：名島2007）。またハタ科は群れを作らず、追い込みを行ってもすぐにサンゴ礁の穴の中に逃げこんでしまうので、網漁で捕獲されることはほとんどないといわれる（名島2007）。
- 4) シイラ属は、奄美大島では「ヒューヌイユ」「マンビキ」、沖縄島では「フーヌィ」「マンビカー」などと呼ばれ、擬似餌を使った船釣漁などで捕獲されている（藤山2004：名嘉真・出村1981）。

また幕末の奄美大島の生活を描いた『南島雑話』にも、「九万疋魚釣之事」として、奄美諸島、沖縄諸島周辺に、旧暦8月～10月頃、「何億万」という大群をなしてあらわれる「ヒウ」を、二、三人で「素船」に乗り込み、「壱里斗沖へ出て」、撒き餌をした後、釣糸を一人七つずつほうりかけ釣上げる様子が詳細に記述されている（名越左源太1984）。

- 5) 現状で「右掖門及び周辺地区」・「書院・鎖之間地区」・「御内原地区」（未報告）からシイラ属の椎骨が出土していることを、沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料を実見し確認している。

《参考文献》

- 阿部 永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 1994『日本の哺乳類』東海大学出版会
- 海上保安庁水路部1987『5万分の1沿岸の海の基本図 海底地形地質調査報告 伊江島』
- 金子浩昌1983「今帰仁城跡志慶真門郭出土の脊椎動物遺骸の概要」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告書第9集 今帰仁村教育委員会
- 金子浩昌1991「今帰仁城跡出土の脊椎動物遺骸」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集 今帰仁村教育委員会
- 金子浩昌1996「平敷屋トウバル遺跡出土の動物遺体（軟体動物を除く）」『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書第125集 沖縄県教育委員会
- 金子浩昌2003「第40節 脊椎動物遺体」『首里城跡—右掖門及び周辺地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 金子浩昌2005「脊椎動物遺体」『首里城跡—書院・鎖之間地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第28集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 川島由次・村岡誠1984「野国貝塚B地点出土の獣骨について」『野国一貝塚B地点発掘調査報告書一』沖縄県教育委員会
- 久貝弥嗣2006「新城下原第二遺跡Ⅱ地区下層出土の動物遺体にみられる傷痕」、『紀要 沖縄埋文研究』4号 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 小池裕子・林良博1984「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』同朋舎
- 菅原広史2008「津堅島キガ浜貝塚出土脊椎動物遺体の再分析」南島考古27
- 関礼子2004「開発の海に集散する人びと—平安座における漁業の位相とマイナー・サブシステムの展開—」『沖縄列島 シマの自然と伝統のゆくえ』東京大学出版会
- 田中寿美子1985「古宇利原A遺跡における漁撈活動について」『南島—その歴史と文化—』5巻
- 樋泉岳二1998「用見崎遺跡出土の脊椎動物遺体」『用見崎遺跡Ⅳ』熊本大学考古学研究室報告33集 熊本大学文学部考古学研究室
- 樋泉岳二2006「脊椎動物遺体にみる奄美と沖縄」『先史琉球の生業と交易2—奄美・沖縄の発掘調査から—』平成14～17年度科学研究費補助基盤研究(A)(2)研究成果報告書
- 樋泉岳二2007「今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群—Ⅲ区b・東7区・シニングニー—」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ—村内遺跡発掘調査報告—』今帰仁村文化財調査報告書第24集 今帰仁村教育委員会
- 名嘉真宜勝、出村卓三1981『沖縄・奄美の生業 2漁業・諸職』明玄書房刊
- 名越左源太1984『南島雑話—幕末奄美民俗誌1・2』国分直一、恵良宏校注 東洋文庫431 平凡社
- 名島弥生2005「第Ⅵ章第4節。今帰仁城跡周辺遺跡出土脊椎動物遺体」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ—今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告—』今帰仁村文化財調査報告書第20集 今帰仁村教育委員会

名島弥生2007「第6章第3節 小湊フワガネク遺跡群出土資料からみた動物資源の季節利用」

『奄美大島奄美市小湊フワガネク遺跡群Ⅱ－学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」
拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書』奄美市文化財調査報告書1 奄美市教育委員会
名島弥生・樋泉岳二2007「南島考古学におけるフエフキダイ科魚類の属レベルでの同定とその意
義」『第11回動物考古学研究会発表資料』

西中川駿編1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』
(平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書

藤山萬太2004『私本奄美の釣り魚』

松井 章2008『動物考古学』京都大学学術出版会

丸山真史・宮路淳子・松井章2004「居徳遺跡群出土の動物遺存体について」『居徳遺跡群Ⅳ四国横
断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)高知県埋蔵
文化財センター発掘調査報告書第91集 (財)高知県埋蔵文化財センター

宮城弘樹・玉城 靖・金武正紀・赤嶺信哉・喜納政英・樋泉岳二2008「遺物」『今帰仁城跡発掘調
査報告Ⅲ』今帰仁村文化財調査報告書第25集 今帰仁村教育委員会

von den Driesch, A. 1976 “A guide to the measurement of animal bones from
archaeological sites” Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum of
Archaeology and Ethnology, Harvard University.

図1. 椎骨縦径計測値分布 ●最大 △最小 ▣平均

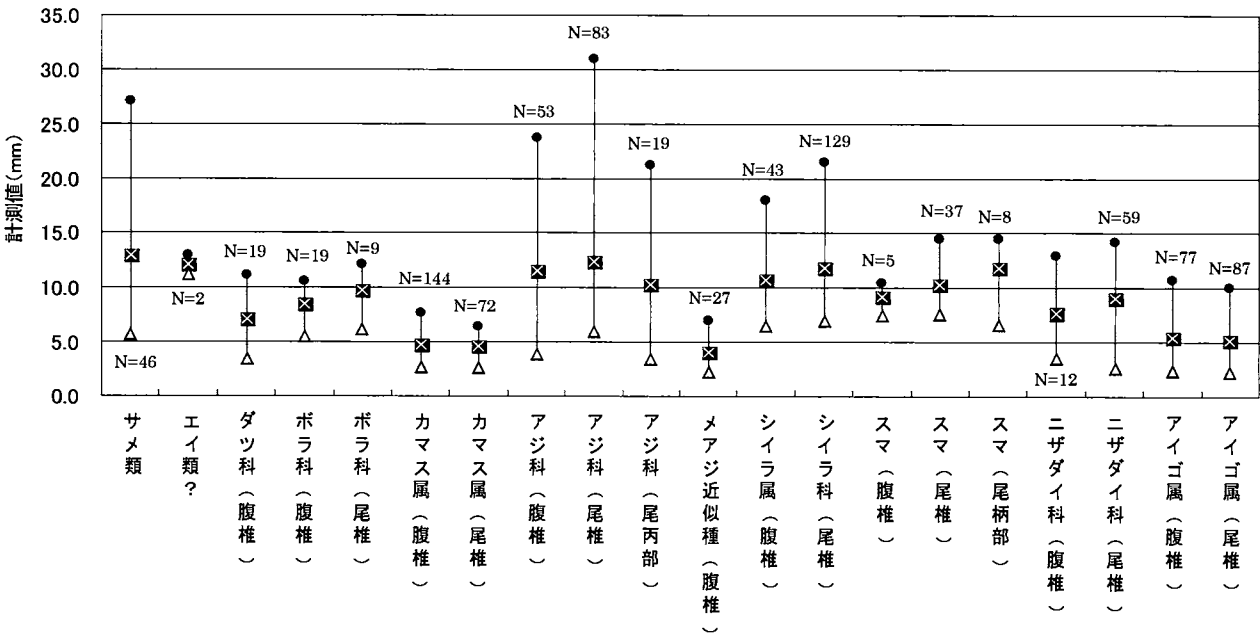


図2. 今帰仁城跡主郭東側斜面出土ハタ科歯骨高組成

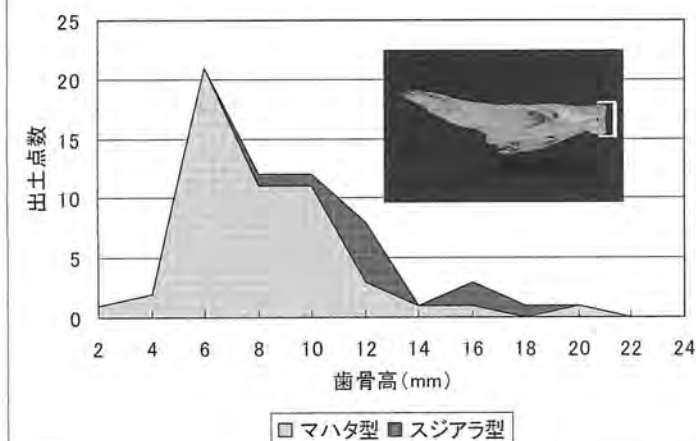


図3. アジ科歯骨高組成

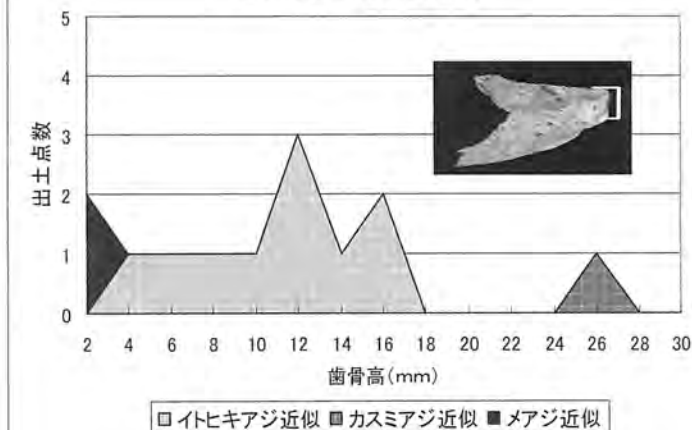


図4. クロダイ属右前上顎骨長組成

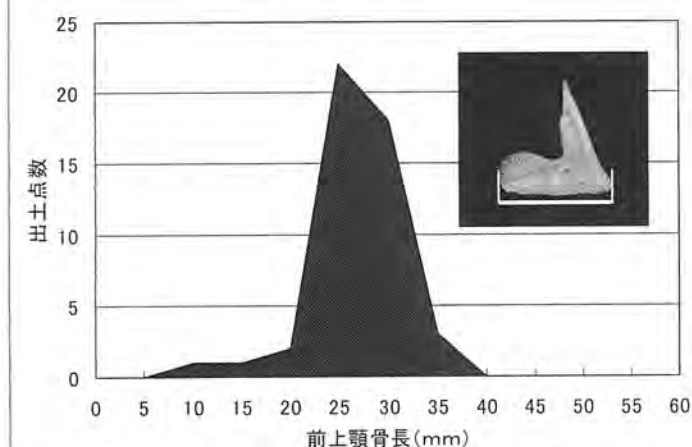


図5. 今帰仁城跡主郭東側斜面出土エフキダイ科前上顎骨長組成

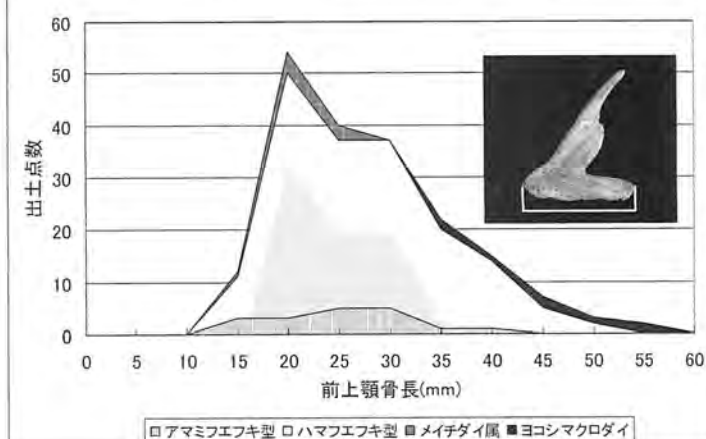


図6. ペラ科下咽頭骨幅組成

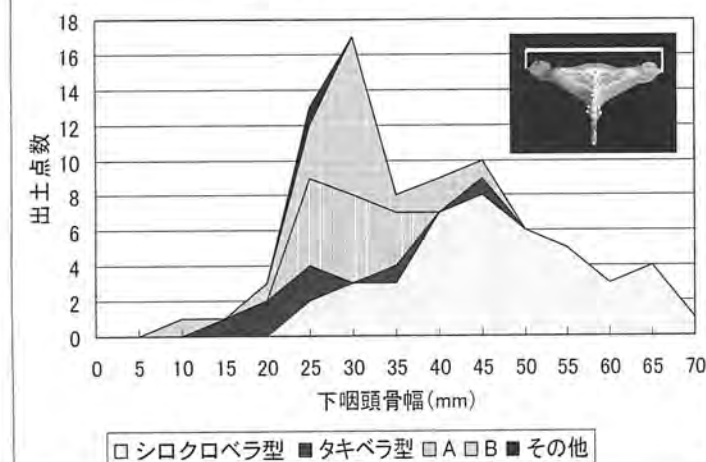
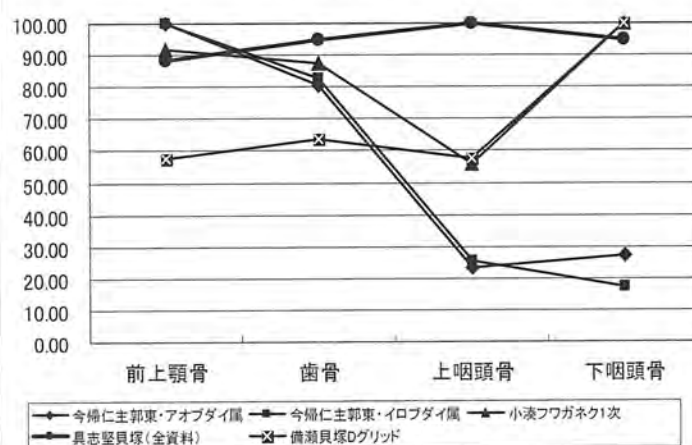


図7. ブダイ科部位別出土頻度(%MAU)



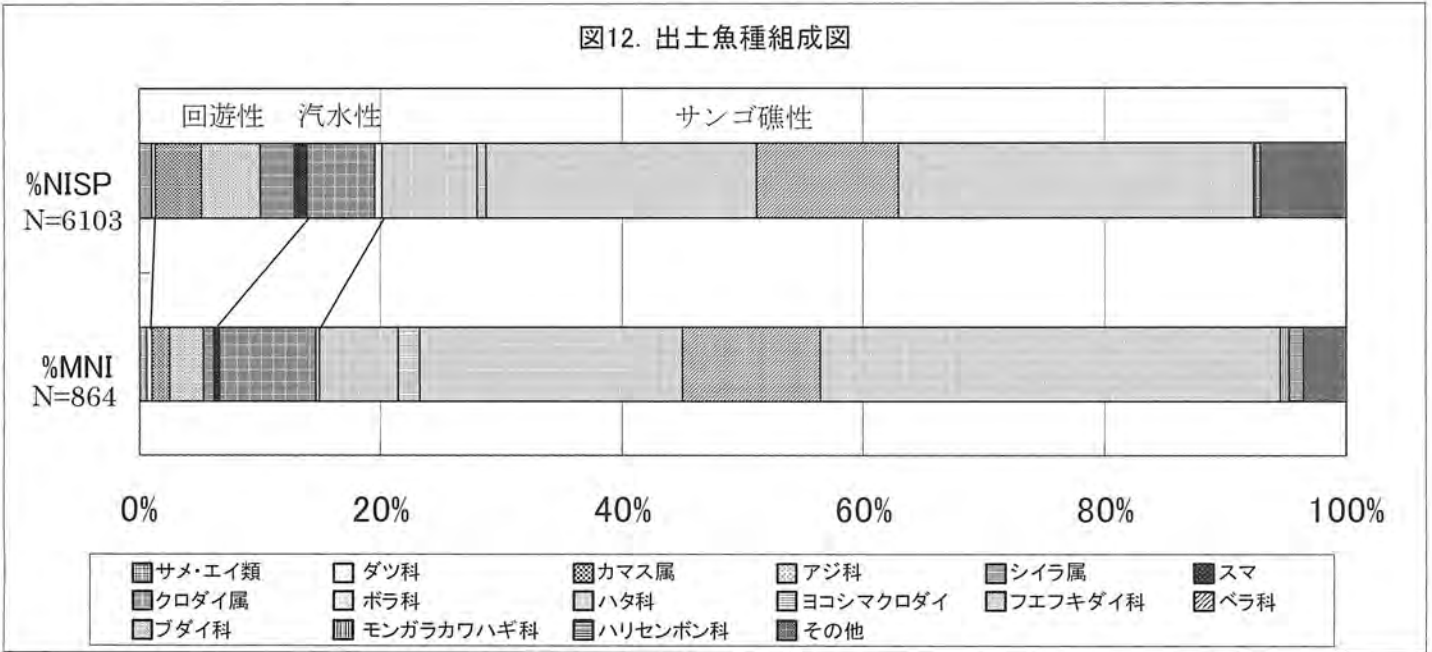
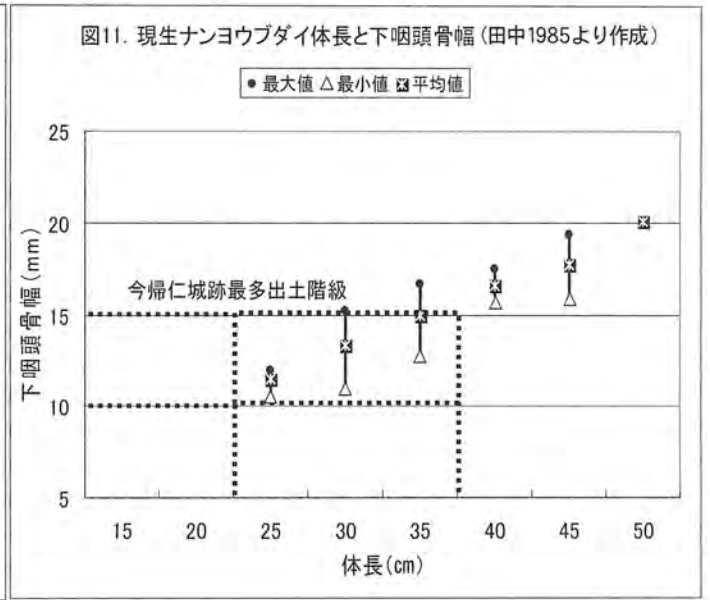
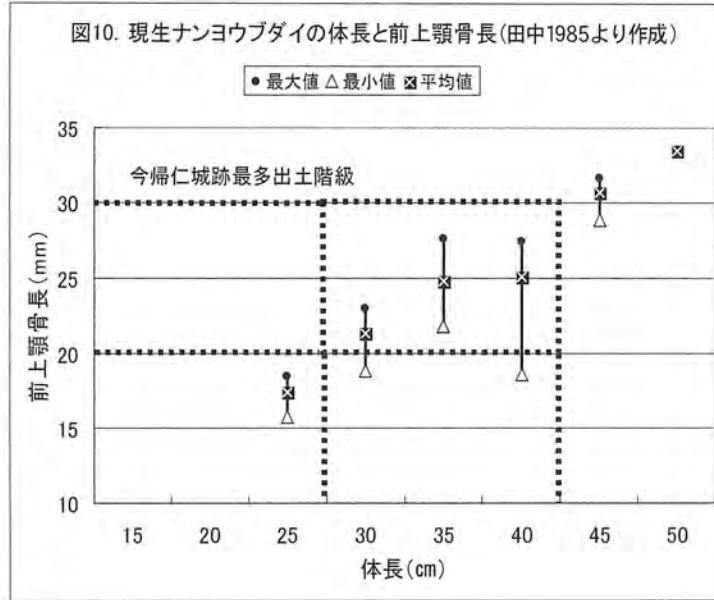
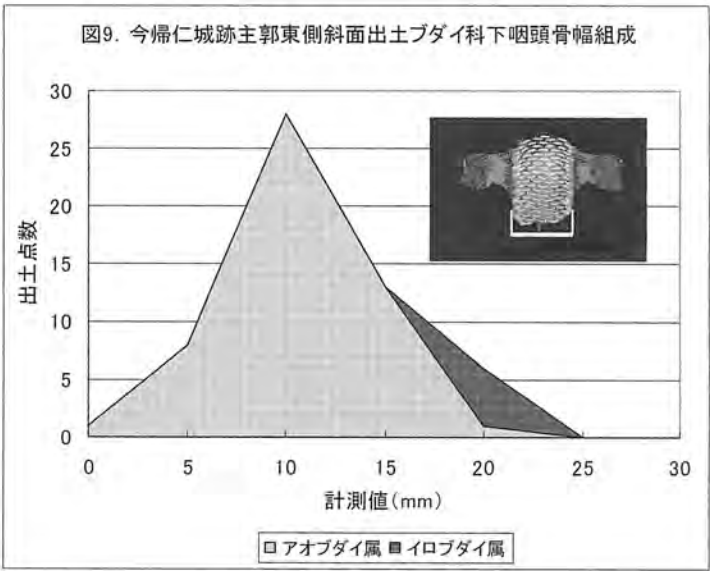
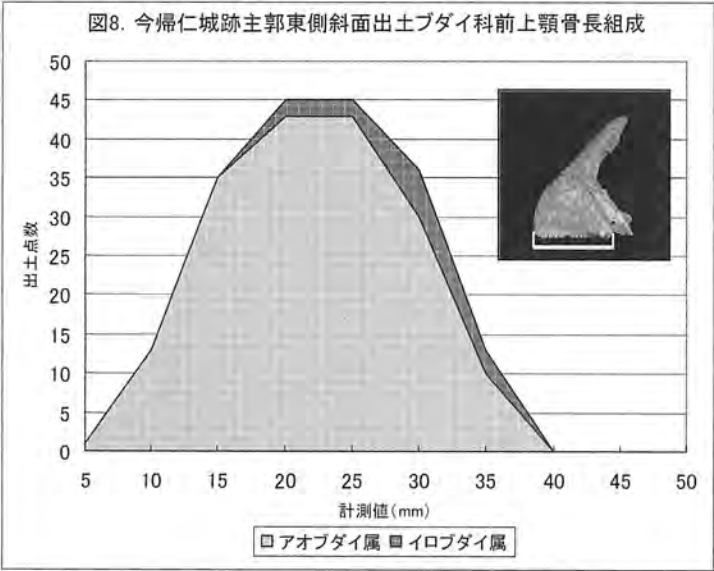


表1. 今帰仁城主郭東斜面から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

軟骨魚綱	CHONDICHTHYES
サメ類	Lamniformes ?
トビエイ科	Myliobatidae
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
ウツボ科	Muraenidae
ダツ科	Belonidae
イトウダイ科	Holocentridae
ボラ科	Mugilidae
カマス属	<i>Sphyraena</i> sp.
ハタ科(マハタ型)	Serranidae cf. <i>Epinephelus</i>
ハタ科(スジアラ型)	Serranidae cf. <i>Plectropomus</i>
イトヒキアジ属	<i>Alectis</i> sp.
ギンガメアジ属(カスミアジ近似種)	<i>Caranx</i> cf. <i>C. melampyrgus</i>
ギンガメアジ属(ギンガメアジ近似種)	<i>Caranx</i> cf. <i>C. sexfasciatus</i>
メアジ近似種	Carangidae cf. " <i>Selar crumenophthalmus</i> "
アジ科(その他)	Carangidae (others)
シイラ属	<i>Coryphaena</i> sp.
ヒメジ科	Mullidae
イスズミ科	Kyphosidae
フエダイ科	Lutjanidae
コショウダイ亜科	Pomadasyinae
タマガシラ属	<i>Scolopsis</i> sp.
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i> sp.
ヘダイ	<i>Sparus sarba</i>
ヨコシマクロダイ	<i>Monotaxis grandoculis</i>
メイチダイ属	<i>Gymnocranius</i> sp.
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	<i>Lethrinus</i> cf. <i>L. nebulosus</i>
フエフキダイ属(アマミフエフキ型)	<i>Lethrinus</i> cf. <i>L. Amamianus</i>
フエフキダイ属(キツネフエフキ型)	<i>Lethrinus</i> cf. <i>L. miniatus</i>
ベラ科(シロクラベラ型)	Labridae cf. " <i>Semicossyphus reticulatus</i> "
ベラ科(タキベラ型)	Labridae cf. " <i>Bodianus perditio</i> "
ベラ科A	Labridae A
ベラ科B	Labridae B
ベラ科(その他)	Labridae (others)
イロブダイ属	<i>Balbometopon</i> sp.
アオブダイ属	<i>Scarus</i> sp.
スマ	<i>Euthynus affinis</i>
タチウオ科	Trichiuridae
ニザダイ科	Acanthrinidae
アイゴ属	<i>Siganus</i> sp.
モンガラカワハギ科	Balistidae
ハリセンボン科	Diodontidae
両生綱	AMPHIBIA
カエル類	Salientia
爬虫綱	RRPTILIA
ヘビ類	Ophidia
ウミガメ科	Cheloniidae
リュウキュウヤマガメ?	<i>Geoemyda spengleri japonica</i> ?
鳥綱	AVES
カラス属	<i>Corvus</i> sp.
ワシ科	Accipitridae
カモ類	Anatidae
ハト科	Columbidae
ニワトリ	<i>Gallus gallus</i>
哺乳綱	MAMMALIA
トガリネズミ科	Soricidae
オオコウモリ科	Pteropodidae
ネズミ亜科	Murinae
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
ネコ	<i>Felis catus</i>
ウマ	<i>Equus feres</i>
イノシシ(またはブタ)	<i>Sus scrofa</i>
ヤギ	<i>Capra hircus</i>
ウシ	<i>Bos taurus</i>
ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>
イルカ	Cetacea

表2. 今帰仁城跡主郭東側斜面出土魚骨一覧

種類		部位	左右	数量
サメ類	サメ類	椎骨	-	52
トビエイ科	トビエイ科	歯板	-	5
エイ類?	エイ類?	椎骨	-	2
		歯骨	右	2
ウツボ科	ウツボ科	方骨	左	1
			-	1
		前鋤骨	-	1
ダツ科	ダツ科	前上顎骨	左	1
			右	2
		歯骨	左	4
		腹椎	-	19
イトウダイ科	イトウダイ科	歯骨	左	4
			右	2
		角骨	左	1
ボラ科	ボラ科	主鰓蓋骨	左	3
			右	1
		腹椎	-	19
		尾椎	-	9
		歯骨	左	4
カマス科	カマス属		右	10
		口蓋骨	右	1
		腹椎	-	144
		尾椎	-	72
		前上顎骨	左	49
ハタ科	ハタ科(マハタ型)		右	37
		歯骨	左	36
			右	28
	ハタ科(スジアラ型)	前上顎骨	左	7
			右	5
		歯骨	左	7
			右	4
	ハタ科	主上顎骨	左	42
			右	44
		角骨	左	34
			右	32
		方骨	左	31
			右	38
	ハタ科	主鰓蓋骨	右	1
		擬鎖骨	左	46
			右	37
		前上顎骨	左	11
			右	7
		歯骨	左	5
アジ科	イトヒキアジ属		右	13
		主上顎骨	左	10
			右	7
		角骨	左	5
			右	4
	ギンガメアジ属 カスミアジ近似種	歯骨	右	1
		主上顎骨	左	1
			右	1
		稜鱗	-	3
	ギンガメアジ属 ギンガメアジ近似種	主上顎骨	左	1
			右	2
		前上顎骨	左	1
		歯骨	右	2
	メアジ近似種	主上顎骨	左	3
			右	1
		腹椎	-	27
		前上顎骨	左	2
			右	3
アジ科	アジ科	角骨	左	2
			右	2
		方骨	左	3
			右	3
		腹椎	-	53
		尾椎	-	83
		尾丙部	-	19

(右段につづく)

表2(つづき)

種類		部位	左右	数量
シイラ科	シイラ属	前上顎骨	左	1
		歯骨	右	1
		主上顎骨	右	1
		腹椎	-	43
		尾椎	-	129
ヒメジ科	ヒメジ科	歯骨	左	1
		主上顎骨	右	1
イスズミ科	イスズミ科		左	1
		前上顎骨	左	3
			右	2
フエダイ科	フエダイ科	前上顎骨	左	10
			右	6
		歯骨	左	6
			右	9
		主上顎骨	左	4
			右	7
		角骨	左	4
			右	4
		方骨	左	2
			右	6
コショウダイ亜科	コショウダイ亜科	前上顎骨	左	8
			右	7
		歯骨	左	2
		主上顎骨	左	5
			右	4
		角骨	左	5
			右	6
コショウダイ亜科?	コショウダイ亜科?	方骨	左	3
			右	1
		主鰓蓋骨	右	1
		前上顎骨	左	1
			右	1
		主上顎骨	左	4
			右	2
イトヨリダイ科	タマガシラ属	前上顎骨	左	68
			右	62
		歯骨	左	54
			右	53
		主上顎骨	左	27
			右	25
		角骨	左	24
			右	22
		方骨	左	6
			右	5
タイ科	クロダイ属	主鰓蓋骨	右	1
		前上顎骨	左	2
			右	1
		歯骨	左	2
			右	1
	ヘダイ	主上顎骨	左	1
			右	1

(次ページにつづく)

表2(つづき)

種類	部位	左右	数量
フエフキダイ科	前上顎骨	左	11
		右	16
	歯骨	左	5
		右	3
	主上顎骨	右	2
		左	1
	角骨	左	3
		右	2
	方骨	左	2
		右	2
	前上顎骨	左	4
		右	4
	主上顎骨	右	1
		左	7
	方骨	左	4
		右	4
	フエフキダイ属 (ハマフエフキ型)	前上顎骨	左 158
		右	155
フエフキダイ科	フエフキダイ属 (アマミフエフキ型)	前上顎骨	左 14
		右	22
	フエフキダイ属 (キツネフエフキ型)	前上顎骨	左 1
		右	1
	フエフキダイ属	口蓋骨	左 97
		右	119
	方骨	左	3
		右	3
	歯骨	左	117
		右	98
	主上顎骨	左	110
		右	118
	角骨	左	112
		右	92
	方骨	左	68
		右	71
ベラ科	ベラ科 (シロクラベラ型)	上咽頭骨	左 4
		右	11
	下咽頭骨	左	55
		右	1
	ベラ科 (タキベラ型)	上咽頭骨	左 2
		右	2
	下咽頭骨	左	7
		右	7
	ベラ科A	上咽頭骨	左 4
		右	4
	下咽頭骨	左	16
		右	16
	ベラ科B	上咽頭骨	左 1
		右	2
	下咽頭骨	左	19
		右	1
	ベラ科(その他)	前上顎骨	左 85
		右	79
ベラ科	顎骨破片	左	87
		右	67
	歯骨	左	69
		右	69
	主上顎骨	左	10
		右	9
	角骨	左	21
		右	16
	方骨	左	13
		右	17
	破片	左	122
		右	122

(右段につづく)

表2(つづき)

種類	部位	左右	数量
イロブダイ属	前上顎骨	左	23
		右	35
	歯骨	左	25
		右	29
	上咽頭骨	左	9
		右	4
	下咽頭骨	左	6
		右	6
	前上顎骨	左	285
		右	294
	歯骨	左	237
		右	225
	上咽頭骨	左	69
		右	67
	下咽頭骨	左	80
		右	80
	角骨	左	62
		右	49
アオブダイ属	主上顎骨	左	67
		右	56
	方骨	左	73
		右	92
	カツオ・スマ類	主上顎骨	右 3
		腹椎	— 5
	スマ	尾椎	— 37
		尾内部	— 8
	サバ科	角骨	右 4
		前上顎骨	左 1
	タチウオ科	歯骨	左 2
		主上顎骨	左 1
	方骨	左	2
		右	2
	擬鎖骨	左	1
		右	4
	主鋸蓋骨	左	6
		右	6
ニザダイ科	腹椎	左	12
		右	59
	尾椎	左	10
		右	10
	尾部鱗	左	2
		右	4
	歯骨	左	77
		右	87
	尾椎	左	1
		右	1
	前上顎骨	左	1
		右	1
	方骨	左	1
		右	1
	擬鎖骨	左	6
		右	3
	第1背鰭棘	左	6
		右	6
アイゴ科	前上顎骨	左	11
		右	11
	方骨	左	1
		右	1
	棘	左	33
		右	1
	前上顎骨	左	1
		右	2
	歯骨	左	1
		右	1
	前上顎骨	左	1
		右	1
	主上顎骨	左	1
		右	1
	主上顎骨	左	1
		右	1
	方骨	左	1
		右	2
モンガラカワハギ科	角骨	左	6
		右	6
	前上顎骨	左	11
		右	11
	方骨	左	1
		右	1
	棘	左	33
		右	1
	前上顎骨	左	1
		右	1
	主上顎骨	左	1
		右	1
	主上顎骨	左	1
		右	1
	方骨	左	1
		右	2
	角骨	左	6
		右	4

表3. 魚骨資料に見られる人為的損傷

資料No	魚種	部位	左右	サイズ(mm)	位置	傷痕の種類 (断面形態)	方向	断面内部の 削り痕	数	図版
1	ブダイ科・アオブダイ属	前上顎骨	左	前上顎骨長: 29.8	柄状突起屈曲部分外側	V字状	斜め方向・前方に傾斜	片斜面 —	4 1	No1~7 図版11
2	ブダイ科・アオブダイ属	前上顎骨	左	—	歯板面内側	切断痕	縦位方向	—	1	
						V字状	縦位方向・切断痕に平行	片斜面	1	
3	ブダイ科・アオブダイ属	前上顎骨	右	前上顎骨長: 23.6	歯板面後端部内側	V字状	斜め方向・後方に傾斜	片斜面	1	
4	ブダイ科・アオブダイ属	歯骨	左	歯骨長:19.7	関節突起	切断痕	縦位方向	—	1	
5	ブダイ科・イロブダイ属	歯骨	右	歯骨長:28.21	歯板面内側	V字状	縦位方向・連合面に平行	片斜面	2	
6	ブダイ科・イロブダイ属	歯骨	右	x	歯板面内側	V字状	縦位方向・連合面に平行	片斜面	2	
7	ブダイ科	方骨	右	x	翼状部内側面	V字状	前後方向	片斜面	3	No8~12 図版12
8	ベラ科	歯骨	左	歯骨高:28.45	連合面直後の内側・歯骨下端	V字状	縦位方向	—	3	
9	ベラ科	歯骨	左	歯骨高:24以上	連合面直後の内側・歯骨下端	V字状?	縦位方向	—	1	
10	ベラ科	歯骨	左	歯骨高:21.71	連合面直後屈曲部・歯骨下端	V字状	横位方向	—	2	
11	ベラ科	歯骨	右	歯骨高:21.49	連合面直後の内側・歯骨下端	V字状	縦位方向	片斜面	1	
					連合面直後の内側・歯列面下部	V字状	縦位方向	両斜面 —	1 1	
12	ベラ科	歯骨	右	歯骨高:20.42	連合面直後の内側・歯骨下部	V字状	縦位方向	—	1	
13	ベラ科シロクラベラ型	下咽頭骨	—	x	前面	V字状	縦位方向	片斜面 —	4 2	No13~15 図版13
14	ベラ科シロクラベラ型	下咽頭骨	—	下咽頭骨幅: 44.85	前面中央下部~腹面	V字状	縦位方向	片斜面	1	
15	ベラ科シロクラベラ型	下咽頭骨	—	下咽頭骨幅: 45.83	腹面・V字状の傷痕右側に隣	削り痕	横位方向	—	1	
16	ベラ科シロクラベラ型	下咽頭骨	—	下咽頭骨幅: 63.33	前面右側~腹面	V字状	縦位方向	両斜面	1	No16 図版12
17	ベラ科シロクラベラ型	下咽頭骨	—	x	腹面中央	線状痕	前後方向	—	5	
18	ベラ科シロクラベラ型	下咽頭骨	—	下咽頭骨幅: 44.12	腹面左側	線状痕	前後方向	—	4	
19	フエフキダイ属・ハマフエフキ型	前上顎骨	左	前上顎骨長: 38.15	腹面左側	線状痕	前後方向	—	3	No17 図版13
20	フエフキダイ属・ハマフエフキ型	前上顎骨	右	前上顎骨長: 44.89	腹面中央~左側	V字状	横位方向	片斜面	1	
21	フエフキダイ科	主上顎骨	左	—	歯列面内側・前端部	V字状	縦位方向・柄状突起とほぼ平行	片斜面	1	
					歯列面内側・中央	V字状	斜め方向・前方に傾斜	片斜面	1	図版14
					歯列面内側・中央、V字状の傷痕前方に隣接	削り痕	前後方向	—	1	
22	フエフキダイ科	主上顎骨	右	x	柄状突起屈曲部分付近	V字状	横位方向	片斜面	3	
					関節面	切断痕	縦位方向	—	2	
23	フエフキダイ科	主上顎骨	左	—	関節面直後の外側	線状痕	縦位方向・切断痕とほぼ平行	—	1	
					突起部外側	太い線状痕	縦位方向	—	5	
24	フエフキダイ科	主上顎骨	右	x	関節部分	V字状	縦位方向	片斜面	1	
25	フエフキダイ科	主上顎骨	左	x	関節面直後の外側	V字状	縦位方向	—	2	図版15
					関節面直後の外側・V字状の傷痕前後	線状痕	縦位方向	—	数条	
26	フエフキダイ属	口蓋骨	左	x	関節面直後の内側	V字状	縦位方向	片斜面 両斜面	1 1	
27	フエフキダイ科	歯骨	左	歯骨高:8.27	連合面直後の内側・歯列面~ 歯骨下方	V字状	斜め方向・後方に傾斜	両斜面	1	
28	フエフキダイ科	歯骨	左	歯骨高:x	歯列中央の内側・歯列面~ 歯列面下部	V字状	斜め方向・後方に傾斜	—	1	
29	フエフキダイ科	歯骨	左	歯骨高:x	連合面	切断痕	縦位方向	—	1	
30	フエフキダイ科	歯骨	左	歯骨高:x	連合面直後の内側・歯列面~ 歯骨下方	V字状	斜め方向・後方に傾斜	片斜面	1	図版16
31	フエフキダイ科	歯骨	左	歯骨高:13.26	歯列中央の内側・歯列面~ 歯列面下部	V字状	斜め方向・後方に傾斜	両斜面	1	
32	フエフキダイ科	歯骨	左	歯骨高:11.81	連合面直後の内側・歯列面~ 歯列面下部	V字状	斜め方向・後方に傾斜	片斜面	1	
33	フエフキダイ科	歯骨	左	歯骨高:7.18	連合面直後~中央の内側・ 歯列面~歯列面下部	V字状	斜め方向・後方に傾斜	両斜面	1	
34	フエフキダイ科	歯骨	左	歯骨高:7.39	歯骨中央の内側・歯骨下端	V字状	縦位方向	片斜面	1	
35	フエフキダイ科	歯骨	左	歯骨高:7.39	歯骨下端内側・V字状の傷痕 後方に隣接	削り痕	斜め方向・後方に傾斜	—	1	
36	フエフキダイ科	歯骨	右	歯骨高:13.72	歯列中央の内側・歯列面~ 歯列面下部	V字状	斜め方向・後方に傾斜	両斜面 片斜面	2 1	図版17
37	フエフキダイ科	歯骨	右	歯骨高:13.72	歯列中央の内側・歯列面~ 歯列面下部	V字状	斜め方向・後方に傾斜	片斜面	1	
38	フエフキダイ科	角骨	右	x	翼状部	切断痕	縦位方向	—	1	
39	ヨコシマクロダイ	方骨	右	x	関節面直後~翼状部内側	切断痕?	縦位方向	—	1	図版14
40				x	突起部中央部内側	V字状	縦位方向・切断痕に平行	片斜面	4	
41	ハタ科	主上顎骨	左	x	突起部中央部内側・V字状の 傷痕後端部と切断痕の間	削り痕	前後方向	—	1	
42				x	突起部中央部内側・V字状の 傷痕に後続	切断痕	縦位方向	—	1	図版14
43				x	突起部中央部内側・V字状の 傷痕に後続	切断痕	縦位方向	—	1	
44				x	突起部中央部内側・V字状の 傷痕に後続	切断痕	縦位方向	—	1	

(次ページへつづく)

表3(つづき)

資料No	魚種	部位	左右	サイズ(mm)	位置	傷痕の種類 (断面形態)	方向	断面内部の 削り痕	数	図版
35	ハタ科	主上顎骨	左	×	関節面上部内側	V字状	横位方向	片斜面	3	図版17
					関節面直後上面	V字状	横位方向	片斜面	1	
					関節面後方突起部状面～内側・V字状痕に後続	V字状	縦位方向	片斜面	1	
					関節面後方突起部状面～内側・V字状痕に後続	削り痕	前後方向	—	1	
					関節面直後外側	V字状	縦位方向	片斜面	1	
					関節面直後外側・後続するV字状傷痕との間	線状痕	縦位方向	—	3	
36	ハタ科	主上顎骨	右	×	関節面直後外側・後続するV字状傷痕との間	削り痕	前後方向	—	1	
					関節面後方突起部外側	V字状	斜め方向・後方に傾斜	片斜面	1	
						V字状	斜め方向・前方に傾斜	片斜面	3	
						V字段状	斜め方向・前方に傾斜	両斜面	1	
						切断痕	縦位方向	—	1	
37	ハタ科・マハタ型	歯骨	左	歯骨高: 9.5	連合面直後の内側	V字状	縦位方向	片斜面	2	図版18
								—	1	
38	ハタ科・スジアラ型	歯骨	左	歯骨高: 12.99	歯列側方内側・犬歯列と後続する円錐歯列の間	V字状	横位方向	両斜面	1	
39	ハタ科	擬鎖骨	左	×	屈曲部正面	V字状	横位方向	片斜面	1	
								—	1	
40	ハタ科	擬鎖骨	左	×	屈曲部上方正面～内側	V字状	斜め方向・外側へ傾斜	片斜面	1	
					屈曲部上方内側・V字状の傷痕に隣接	線状痕	斜め方向・V字状の傷痕に平行	—	8	
41	ハタ科	擬鎖骨	左	×	屈曲部上方正面	V字状	横位方向	両斜面	1	
						V字段状	横位方向	片斜面	1	
								両斜面	1	
42	ハタ科	擬鎖骨	左	×	屈曲部～上方正面	V字状	横位方向	片斜面	4	図版18
					屈曲部・V字状の傷痕下方に隣接	削り痕	縦位方向	—	1	
					屈曲部・削り痕下方に隣接	線状痕	横位方向	—	6	
					屈曲部上方正面	V字状	横位方向	片斜面	1	
						V字状	斜め方向・外側に傾斜	片斜面	3	
43	ハタ科	擬鎖骨	右	×	屈曲部上方正面・V字状傷痕の下端に連続	線状痕	斜め方向・外側に傾斜	—	7	
					屈曲部正面			—	2	
						V字状	斜め方向・外側に傾斜	片斜面	1	
					屈曲部正面・V字状傷痕の上下	線状痕	斜め方向・外側に傾斜	—	数条	
44	ハタ科	擬鎖骨	右	×	屈曲部下方内側	切断痕	斜め方向・前方に傾斜	—	1	
						V字状	斜め方向・前方に傾斜	—	1	
								片斜面	1	
45	ハタ科	擬鎖骨	右	×	屈曲部上方正面	V字状	斜め方向・外側に傾斜	片斜面	2	図版16
								—	1	
46	ハタ科	擬鎖骨	右	×	屈曲部上方内側	V字状?	前後方向	—	2	
					連合面直後	切断痕	縦位方向	—	1	
47	フエダイ科	歯骨	右	×	連合面後方内側・歯列面～歯列面下部	V字状	斜め方向・後方に傾斜	両斜面	1	
								—	1	
48	アジ科(大)イトヒキアジ属	主上顎骨	左	×	関節部背面外側	V字状	縦位方向	片斜面	1	
49	アジ科(大)イトヒキアジ属	主上顎骨	右	×	関節面外側	V字状	前後方向	片斜面	1	
					関節面外側・V字状の傷痕下方	切断痕	縦位方向	—	1	
					連合面直後	切断痕	縦位方向	—	1	
50	アジ科(大)イトヒキアジ属	歯骨	右	×	連合面直後の内側・歯骨下部	V字状	縦位方向	片斜面	1	図版16
					連合面直後の内側・歯列面～歯骨下端	V字状	縦位方向	片斜面	1	
					連合面直後の内側・歯列面～歯列面下部	V字状	縦位方向	片斜面	1	
					連合面直後	切断痕	縦位方向	—	1	
					連合面直後・歯骨下端	切断痕	斜め方向・後方に傾斜	—	1	
					連合面直後の内側・歯列面下部	線状痕	縦位方向	—	3	
51	アジ科(大)イトヒキアジ属	歯骨	右	×	歯列中央内側・歯列面～歯列面下部	V字状	縦位方向・やや後方に傾斜	片斜面	2	
					歯列中央内側・歯列面下部・V字状の傷痕の間	削り痕	前後方向	—	1	
					連合面直後の内側・歯骨中部～下端		縦位方向・やや後方に傾斜	片斜面	2	
						V字状	縦位方向・やや前方に傾斜	片斜面	2	
52	クロダイ属	前上顎骨	右	前上顎骨長: 19.29	柄状突起屈曲部外側	V字状	斜め方向・前方に傾斜	片斜面	1	図版11
53	クロダイ属	前上顎骨	右	前上顎骨長: 28.85	連合部内側	V字状	斜め方向・後方に傾斜	両斜面	1	
					歯列背面外側	V字状	斜め方向・前方に傾斜	両斜面	2	図版12
54	ヘダイ	前上顎骨	左	前上顎骨長: 32.32	連合面直後内側	V字状	縦位方向	両斜面	1	
						線状痕	縦位方向・V字状の傷痕に平行	—	1	
					歯列面上部内側	線状痕	縦位方向	—	6	
						V字状	縦位方向・V字状の傷痕に平行	片斜面	1	
55	サメ	椎骨	—	径: 19.76	側面	V字状	縦位方向	片斜面	1	図版16

表4. 同定分析対象外の椎骨に見られた人為的損傷の詳細

分類群	部位	位置	数(例)	力の方向	備考
アジ科？	腹椎	椎体右側面	2	後方から	傷深め
	腹椎	椎体右側面	1	後方から	
	腹椎	背側面	1	左から	
	腹椎	腹側面	1	腹側面に対してやや右から	
	腹椎	腹側面	1	やや後方から	
	腹椎	腹側面	2	腹側面に対してやや前方から	
	腹椎	腹側面	5	やや後方から	
	腹椎	腹側面	1	面に対してほぼ垂直	
	腹椎	腹側面	1	やや後方から	
	腹椎	腹側面	2	やや後方から	
	腹椎	腹側面～右側面	1	やや後方から	
	腹椎	腹側面～右側面	2	やや後方から	
	腹椎	腹側面～椎体左側面	2	やや後方から	
	腹椎	椎体両側面	左側3 右側1	側面に対して垂直、前方から後方に向けて	傷深め
	腹椎	椎体左側面	2	側面に対してほぼ垂直	
タイ型	尾椎	椎体右側面	1	後方から椎体側面に対して浅い角度	
	尾椎	椎体左側面	1	椎体側面に対して垂直	
	尾椎	椎体左側面	1	椎体側面に対して垂直	
	尾椎	椎体左側面	2	やや前方から	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	不明	椎体左側面	1	椎体側面に対して前方から	
	不明	椎体左側面	1	やや前方から	
ハタ型	尾椎	椎体左側面	1	側面に対してやや後方から	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対してほぼ垂直	
	尾椎	椎体右側面	2	側面に対してやや前方から	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対してやや前方から	
	腹椎	椎体右側面 前関節面付近	1	やや前方から	
フエフキダイ科	腹椎	腹側面右側	1	腹側面に対してやや後方から	
	腹椎	椎体右側面	1	側面に対して垂直	
ブダイ科	腹椎	椎体左側面及び腹側	2	後方から	傷浅め
	腹椎	前関節面右側	1	正面やや右から	
	腹椎	前関節面右側	1	後方から	
	尾椎	椎体右側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体右側面	1	やや後方から	
	尾椎	椎体右側面	1	やや前方から	
	尾椎	椎体右側面	1	やや前方から	
	尾椎	椎体右側面	1	やや後方から	
	尾椎	椎体両側面	両側各1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体両側面	両側各1	左側面に対して垂直 右側面に対してやや後方から	
	尾椎	椎体左側面	1	上から下	
	尾椎	椎体左側面	1	側面やや下方から	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
ベラ科	腹椎	椎体右側面	1	側面に対して前方から	
	腹椎	椎体右側面	1	側面に対して垂直	
	腹椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	腹椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	腹椎	前関節面背側	1	正面から	
不明	腹椎	椎体	1	前方から後方に向けて切断	傷深め
	腹椎	腹側面	1	腹側面に対して垂直	
	腹椎	腹側面	1	やや後方から	
	腹椎	腹側面～椎体左側面	1	後方から	
	腹椎	腹側面～椎体左側面	2	面に対して垂直	
	尾椎	椎体右側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体右側面	2	側面に対して前方から	
	尾椎	椎体左側面	1	後方から	
	尾椎	椎体左側面	1	側面に対して垂直	
	尾椎	椎体右側面	1	側面に対してやや前方から	
	尾椎	椎体右側面	1	やや前方から	
	尾椎	椎体両側面	両側各1	側面に対して垂直	

表5. 今帰仁城主郭東斜面出土骨類(魚骨以外)の同定結果。
残存状態の凡例は表末参照。

種類	部位	残存状態	L / R
カエル類	上腕骨		1
カエル類	四肢骨		3
ヘビ類	椎骨		9
ウミガメ	鼻骨		1 /
ウミガメ	後眼窩骨		/ 3
ウミガメ	前頭骨		1 /
ウミガメ	前頭骨+頭頂骨		/ 1
ウミガメ	頬骨		/ 1
ウミガメ	側後頭骨		/ 1
ウミガメ	椎骨		2
ウミガメ	烏口-肩甲骨		/ 5
ウミガメ	前烏口骨	関節部	/ 1
ウミガメ	上腕骨	w	2 / 1
ウミガメ	上腕骨	m	1 / 1
ウミガメ	橈骨	*	1 /
ウミガメ	尺骨	w	/ 1
ウミガメ	中手骨	*	2 /
ウミガメ	大腿骨	d	/ 1
ウミガメ	脛骨/腓骨(細)	m	1 /
ウミガメ	脛骨/腓骨(太)	m	1 / 1
ウミガメ	中足骨	*	/ 1
ウミガメ	末節骨		3
ウミガメ	指骨		22
ウミガメ	椎骨板		2
ウミガメ	肋骨板	破片	12
ウミガメ	縁骨板	破片	13
ウミガメ	剣状腹板		/ 1
ウミガメ	腹甲板	破片	22
ウミガメ	背/腹甲板	破片	< 83 >
ウミガメ	不明	破片	< 3 >
リクガメ類	上腕骨	w	1 / 1
リクガメ類	肋骨板		1 /
リクガメ類	上腹板		1 /
リクガメ類	中腹板		1 / 1
リクガメ類	下腹板		/ 1
リクガメ類	背/腹甲板	破片	< 1 >
ニワトリ(小)	上腕骨	p	/ 1
ニワトリ(小)	尺骨	w	1 /
ニワトリ(大)	尺骨	d	/ 1
ニワトリ(大)	脛骨	p	/ 1
ニワトリ(大)	中足骨	p	/ 1
ニワトリ	烏口骨	w	/ 3
ニワトリ	烏口骨	p	5 /
ニワトリ	烏口骨	d	3 / 3
ニワトリ	肩甲骨	関節部	6 / 1
ニワトリ	上腕骨	w	2 /
ニワトリ	上腕骨	p	/ 1
ニワトリ	上腕骨	d	4 / 5
ニワトリ	橈骨	w	/ 1
ニワトリ	橈骨	p	/ 1
ニワトリ	橈骨	d	2 / 5
ニワトリ	尺骨	w	1 /
ニワトリ	尺骨	p	3 /
ニワトリ	尺骨	d	2 /
ニワトリ	中手骨	w	3 / 1
ニワトリ	大腿骨	w	/ 2
ニワトリ	大腿骨	p	5 / 9
ニワトリ	大腿骨	d	4 / 3
ニワトリ	脛骨	w	1 /
ニワトリ	脛骨	p	8 / 4
ニワトリ	脛骨	d	9 / 15
ニワトリ	中足骨	w	/ 2
ニワトリ	中足骨	p	1 / 5
ニワトリ	中足骨	d	2 / 6
ニワトリ(若)	烏口骨	w	/ 1
ニワトリ(若)	烏口骨	p	1 /
ニワトリ(若)	烏口骨	d	1 /
ニワトリ(若)	上腕骨	w	14 / 14
ニワトリ(若)	上腕骨	p	6 / 9
ニワトリ(若)	上腕骨	d	5 / 9
ニワトリ(若)	橈骨	w	/ 1
ニワトリ(若)	尺骨	w	/ 2
ニワトリ(若)	尺骨	p	3 / 3
ニワトリ(若)	尺骨	d	2 /
ニワトリ(若)	大腿骨	w	1 / 2
ニワトリ(若)	大腿骨	p	4 / 4
ニワトリ(若)	大腿骨	d	/ 3
ニワトリ(若)	脛骨	w	9 / 6
ニワトリ(若)	脛骨	p	17 / 17
ニワトリ(若)	脛骨	d	11 / 9
ハト科	烏口骨	w	/ 1
ハト科	上腕骨	w	1 / 1
ハト科	上腕骨	p<d>	1 /
ハト科	橈骨	w	/ 1
ハト科	大腿骨	w	1 /
ハト科	脛骨	d	1 /
ワシ科	大腿骨	p	/ 1
カモ類	烏口骨	w	1 /
カモ類	中足骨	d	1 /

(右段につづく)

表5(つづき)

種類	部位	計数位置	L / R
カラス属	尺骨	w	1 /
カラス属	尺骨	p	/ 1
カラス属	尺骨	d	2 / 2
カラス属	中手骨	w	1 /
カラス属	中手骨	p	/ 1
鳥類・未同定	上腕骨	w	/ 1
鳥類・未同定	上腕骨	d	1 /
鳥類・未同定	脛骨	d	1 /
鳥類・同定不可	大腿骨	p	1 /
オオコウモリ科	上腕骨	d	1 /
オオコウモリ科	橈骨	d	2 /
オオコウモリ科	大腿骨	p	1 /
トガリネズミ科	頭蓋骨	上顎+鼻骨	1
トガリネズミ科	下顎骨		/ 2
ネズミ亜科	上顎骨		/ 1
ネズミ亜科	下顎骨		/ 3
ネズミ科	上顎I		1 /
ネズミ科	環椎		2
ネズミ科	軸椎		1
ネズミ科	上腕骨	*	4 / 1
ネズミ科	寛骨	*	3 / 5
ネズミ科	大腿骨	*	9 / 7
ネズミ科	脛骨	*	/ 1
イヌ	頭蓋骨	後頭骨周辺	1
イヌ	上顎骨	[m2 m3×]	1 /
イヌ	上顎骨	[P4 M1]	/ 1
イヌ	下顎骨	[P3 P4]	/ 1
イヌ	下顎C		/ 1
イヌ	下顎M1		1 / 2
イヌ	軸椎		1
イヌ	肩甲骨	関節部	/ 1
イヌ	橈骨	p	1 /
イヌ	橈骨	(p-)	1 /
イヌ	橈骨	<p>-<d>	1 /
イヌ	尺骨	滑車切痕	1 / 1
イヌ	寛骨	腸骨	/ 1
イヌ	大腿骨	(p-)	/ 1
イヌ	第2中足骨	w	/ 1
イヌ	第3中足骨	w	/ 1
イヌ	第4中足骨	p	/ 1
ネコ	下顎骨		2 /
ネコ	下顎骨		/ 2
ネコ	肩甲骨	関節部	/ 1
ネコ	上腕骨	<d>	1 /
ネコ	上腕骨	d	/ 2
ネコ	橈骨	p	1 /
ネコ	橈骨	(d-)	1 /
ネコ	橈骨	d	1 /
ネコ	脛骨	p	1 /
ネコ	脛骨	(p-)	1 / 1
ネコ	脛骨	(p-)-(d-)	/ 1
ウマ	側頭骨	岩様部	1 / 1
ウマ	上顎P2		1 /
ウマ	上顎頰歯*		3 /
ウマ	下顎骨	関節突起	1 /
ウマ	下顎P2		1 / 1
ウマ	下顎M3		2 /
ウマ	上/下顎I		5
ウマ	下顎頰歯*		6 / 1
ウマ	肩甲骨	関節部	/ 1
ウマ	上腕骨	p	2 /
ウマ	上腕骨	<d>	/ 1
ウマ	上腕骨	d	1 /
ウマ	橈骨	p	/ 1
ウマ	橈骨	(d-)	1 /
ウマ	橈骨	d	2 / 2
ウマ	中手骨	w	2 /
ウマ	中手骨	p	/ 1
ウマ	中手骨	d	2 / 1
ウマ	寛骨	臼(完)	1 / 1
ウマ	寛骨	臼(座骨)	1 /
ウマ	寛骨	座骨	2 /
ウマ	脛骨	(d-)	/ 1
ウマ	脛骨	d	1 /
ウマ	距骨		/ 1
ウマ	踵骨		/ 3
ウマ	中足骨	w	/ 1
ウマ	中足骨	p	2 / 2
ウマ	中足骨	(d-)	/ 1
ウマ	(第3足根骨)?		3 / 3
ウマ	(中心足根骨)?		2 / 2
ウマ	手根/足根骨		10
ウマ	第2/4中手/中足骨	p	14
ウマ	中手/中足骨	d	5
ウマ	基節骨		16
ウマ	中節骨		3
ウマ	末節骨		5
イノシシ(ノブタ)	涙骨		/ 1
イノシシ(ノブタ)	頬骨		2 / 3
イノシシ(ノブタ)	頭頂骨	右破片	2

(次ページにつづく)

表5(つづき)

種類	部位	計数位置	L	/	R
イノシシ(フタ)	頭頂骨	左破片	6		
イノシシ(フタ)	側頭骨	関節結節	5	/	10
イノシシ(フタ)	後頭骨	右後頭顆	2		
イノシシ(フタ)	後頭骨	左後頭顆	3		
イノシシ(フタ)	上顎骨	表6参照	13	/	14
イノシシ(フタ)	上顎遊離歯	I1	7	/	4
イノシシ(フタ)	上顎遊離歯	C♀	1		
イノシシ(フタ)	上顎遊離歯	C♂	4	/	2
イノシシ(フタ)	上顎遊離歯	m3	/	/	1
イノシシ(フタ)	上顎遊離歯	P3	4	/	1
イノシシ(フタ)	上顎遊離歯	P4	2	/	
イノシシ(フタ)	上顎遊離歯	M1	1	/	2
イノシシ(フタ)	上顎遊離歯	M2	3	/	1
イノシシ(フタ)	上顎遊離歯	M3	2	/	3
イノシシ(フタ)	下顎骨	表6参照	28	/	22
イノシシ(フタ)	下顎骨	連合部	6		
イノシシ(フタ)	下顎骨	下顎角	7	/	5
イノシシ(フタ)	下顎骨	関節突起	5	/	2
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	i2	2	/	2
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	I1	10	/	8
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	i2	11	/	11
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	C♀	7	/	2
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	C♂	14	/	17
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	m3	2	/	2
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	P2	/	/	1
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	P3	/	/	3
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	P4	2	/	
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	M1	2	/	2
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	M2	6	/	6
イノシシ(フタ)	下顎遊離歯	M3	5	/	11
イノシシ(フタ)	頤椎		9		
イノシシ(フタ)	軸椎		5		
イノシシ(フタ)	頸椎		9		
イノシシ(フタ)	胸椎		10		
イノシシ(フタ)	腰椎		13		
イノシシ(フタ)	椎骨	椎体	10		
イノシシ(フタ)	肋骨	p	152		
イノシシ(フタ)	胸骨		2		
イノシシ(フタ)	肩甲骨	肩甲骨	19	/	14
イノシシ(フタ)	上腕骨	w	/	/	1
イノシシ(フタ)	上腕骨	p	1	/	
イノシシ(フタ)	上腕骨	(p)	4	/	
イノシシ(フタ)	上腕骨	(p-)	1	/	2
イノシシ(フタ)	上腕骨	<d->	8	/	16
イノシシ(フタ)	上腕骨	(d-)	3	/	2
イノシシ(フタ)	上腕骨	(d)	3	/	
イノシシ(フタ)	上腕骨	d	10	/	8
イノシシ(フタ)	橈骨	w	2	/	
イノシシ(フタ)	橈骨	p	12	/	9
イノシシ(フタ)	橈骨	p-(d-)	/	/	4
イノシシ(フタ)	橈骨	(p-)	4	/	
イノシシ(フタ)	橈骨	(p-)-(d-)	1	/	
イノシシ(フタ)	橈骨	(d-)	7	/	2
イノシシ(フタ)	橈骨	(d)	3	/	2
イノシシ(フタ)	橈骨	d	2	/	1
イノシシ(フタ)	尺骨	滑車切痕	31	/	27
イノシシ(フタ)	橈側手根骨		1	/	
イノシシ(フタ)	中間手根骨		1	/	1
イノシシ(フタ)	第4手根骨		/	/	1
イノシシ(フタ)	第2中手骨	p	11	/	7
イノシシ(フタ)	第3中手骨	p	17	/	19
イノシシ(フタ)	第4中手骨	p	12	/	14
イノシシ(フタ)	第5中手骨	p	4	/	11
イノシシ(フタ)	寛骨	臼(完)	5	/	4
イノシシ(フタ)	寛骨	臼(腸骨)	4	/	6
イノシシ(フタ)	寛骨	臼(恥骨)	11	/	13
イノシシ(フタ)	大腿骨	p	2	/	
イノシシ(フタ)	大腿骨	(p)	8		
イノシシ(フタ)	大腿骨	(p-)	3	/	5
イノシシ(フタ)	大腿骨	<p->	1	/	
イノシシ(フタ)	大腿骨	(p-)-(d-)	1	/	1
イノシシ(フタ)	大腿骨	<d->	/	/	3
イノシシ(フタ)	大腿骨	(d-)	4	/	5
イノシシ(フタ)	大腿骨	(d)	3	/	2
イノシシ(フタ)	大腿骨	d	/	/	1
イノシシ(フタ)	脛骨	p	/	/	1
イノシシ(フタ)	脛骨	(p)+(p-)-d	1	/	
イノシシ(フタ)	脛骨	(p-)	4	/	5
イノシシ(フタ)	脛骨	<p->	/	/	1
イノシシ(フタ)	脛骨	(p-)-(d-)	/	/	1
イノシシ(フタ)	脛骨	<d->	6	/	2
イノシシ(フタ)	脛骨	(d-)	/	/	5
イノシシ(フタ)	脛骨	(d)	/	/	2
イノシシ(フタ)	脛骨	d	3	/	13
イノシシ(フタ)	腓骨	p	1	/	
イノシシ(フタ)	腓骨	<d->	1	/	1
イノシシ(フタ)	腓骨	(d-)	1	/	4
イノシシ(フタ)	腓骨	d	1	/	

(右段につづく)

表5(つづき)

種類	部位	計数位置	L	/	R
イノシシ(フタ)	距骨		9	/	9
イノシシ(フタ)	踵骨		19	/	15
イノシシ(フタ)	中心足根骨		2	/	1
イノシシ(フタ)	第4足根骨		1	/	4
イノシシ(フタ)	第2中足骨	p	5	/	5
イノシシ(フタ)	第3中足骨	p	18	/	10
イノシシ(フタ)	第4中足骨	p	14	/	13
イノシシ(フタ)	第5中足骨	p	9	/	9
イノシシ(フタ)	中手/中足骨	d(d-)	37		
イノシシ(フタ)	基節骨		45		
イノシシ(フタ)	中節骨		15		
イノシシ(フタ)	末節骨		7		
フタ	中手/中足骨	(d-)	1		
ヤギ	上顎M		/	/	1
ヤギ	下顎M2		/	/	1
ヤギ	脛骨	d	/	/	2
ウシ	前頭骨	角芯破片	1		
ウシ	頬骨	眼窩下部	2	/	
ウシ	側頭骨	岩様部	1	/	1
ウシ	後頭骨	左後頭顆	1		
ウシ	上顎遊離歯	P2	/	/	2
ウシ	上顎遊離歯	P3	2	/	1
ウシ	上顎遊離歯	P4	2	/	3
ウシ	上顎遊離歯	M1	3	/	2
ウシ	上顎遊離歯	M2	/	/	2
ウシ	上顎遊離歯	M3	/	/	1
ウシ	上顎遊離歯	M	破片	2	/
ウシ	下顎骨	吻端	1	/	
ウシ	下顎骨	[P2]	/	/	1
ウシ	下顎骨	[M1-M3]	1	/	
ウシ	下顎骨	関節突起	1	/	2
ウシ	下顎骨	筋突起	2	/	1
ウシ	下顎遊離歯	I	1	/	4
ウシ	下顎遊離歯	m27	1	/	
ウシ	下顎遊離歯	m3	1	/	
ウシ	下顎遊離歯	P2	2	/	3
ウシ	下顎遊離歯	P3	2	/	1
ウシ	下顎遊離歯	P4	6	/	2
ウシ	下顎遊離歯	M1	4	/	1
ウシ	下顎遊離歯	M2	3	/	1
ウシ	下顎遊離歯	M3	4	/	2
ウシ	頤椎		1		
ウシ	肩甲骨	関節部	1	/	6
ウシ	上腕骨	<d->	2	/	3
ウシ	上腕骨	d	1	/	2
ウシ	橈骨	p	3	/	
ウシ	橈骨	d	1	/	
ウシ	尺骨	滑車切痕	1	/	
ウシ	橈側手根骨		1	/	2
ウシ	中間手根骨		2	/	1
ウシ	尺側手根骨		3	/	4
ウシ	第3手根骨		4	/	1
ウシ	第4手根骨		3	/	
ウシ	中手骨	w	2	/	1
ウシ	中手骨	p	10	/	7
ウシ	中手骨	d	/	/	1
ウシ	寛骨	臼(腸骨)	2	/	1
ウシ	寛骨	臼(座骨)	3	/	2
ウシ	大腿骨	p	/	/	1
ウシ	大腿骨	(p)	2	/	2
ウシ	大腿骨	(p)fr	1		
ウシ	大腿骨	<p->	/	/	2
ウシ	大腿骨	d	2	/	1
ウシ	脛骨	(d)	1	/	
ウシ	脛骨	d	3	/	5
ウシ	距骨		5	/	8
ウシ	踵骨	関節部	10	/	12
ウシ	中心第4足根骨		7	/	2
ウシ	中足骨	w	1	/	
ウシ	中足骨	p	8	/	11
ウシ	中足骨	d	3	/	
ウシ	中手/中足骨		20		
ウシ	基節骨		45		
ウシ	中節骨		31		
ウシ	末節骨		19		
ウシ/ウマ	腰椎		1		
ウシ/ウマ	椎骨		7		
ウシ/ウマ	肋骨	p	24		
ウシ/ウマ?	種子骨		10		
小型獣	椎骨		11		
ジュゴン	前頭骨		/	/	1
ジュゴン	後頭骨	左後頭顆	1		
ジュゴン	肋骨	p	8		
ジュゴン	肋骨	破片	<	13	>
ジュゴン	上腕骨	(p-)-(d-)	/	/	1
ジュゴン	尺骨	(d-)	/	/	1
ジュゴン?	不明(長骨)	w	2		
イルカ	椎骨		2		

* 残存状態の略号凡例: p・d:骨端癒合, (p)・(d):未癒合骨端のみ, (p-)・(d-):骨端未癒合脱落, <p->・<d->:骨幹近位部・遠位部

* ウマの「類歯」はP2・M3以外

衣6. 弓婦仁城主郭東斜面出土イノソバ(またはソバ)發育の詳細。
 〈 〉は未萌出、()は萌出中、×は脱落歯、下顎枝の角は下顎角、筋は筋突起、関は関節突起を示す。咬耗の表記は金子(1996)に準じた。遊離歯は表5に示した。

202

表7. イノシシ(またはブタ)下顎骨・後臼歯の計測値(mm). 斜体字は不確実な値.

下顎骨/ 下顎遊離歯	左右	計測位置								性	年齢	備考
		M1		M2		M3		Driesch				
		L	B	L	B	L	B	9	9a	16b		
下顎骨	L	13.7	8.4									若
下顎骨	L	13.6	8.5									若
下顎骨	L	13.6	8.6									若
下顎骨	L	14.2	8.6									
下顎骨	L	13.5	8.7									若
下顎遊離歯	L	13.4	8.4									
下顎遊離歯	L	13.6	8.3									
下顎骨	R	13.4	8.4									若
下顎骨	R	13.6	8.5									若
下顎骨	R	14.0	8.6									若
下顎骨	R	14.1	8.9									若
下顎骨	R	13.4	9.0									若
下顎骨	R	14.7	9.0									
下顎遊離歯	R	13.4	8.9									
下顎骨	L	13.3	8.1	17.1	10.6							
下顎骨	L	14.3	8.3	17.9	11.0							若
下顎骨	L	14.0	8.7	17.3	11.0							若
下顎骨	L	-	8.9	16.3	11.0							成
下顎骨	L	13.9	8.8	16.8	11.3					25.4	♂?	M1Lは咬耗のため測定不可
下顎骨	L	14.0	8.3	17.5	10.6			37.8	27.5	28.3	♂?	若
下顎骨	L	14.6	8.9	18.3	12.0					29.1		若
下顎骨	L	14.3	9.3	18.1	11.4					29.4		若
下顎骨	R	13.0	8.8	16.5	11.4							成
下顎骨	R	13.8	8.9	17.7	11.6							
下顎骨	R	13.8	8.8	17.4	11.3					27.2		若
下顎骨	R	14.4	9.2	17.9	11.2					28.6		若
下顎骨	L	-	-	18.7	11.2							
下顎遊離歯	L			19.4	11.9							
下顎遊離歯	L			18.4	11.4							
下顎遊離歯	L			17.7	11.3							
下顎遊離歯	L			16.7	11.1							
下顎遊離歯	L			17.1	11.8							
下顎遊離歯	L			17.4	12.1							
下顎骨	R	-	-	16.5	11.5							成
下顎遊離歯	R			17.5	11.4							
下顎遊離歯	R			17.3	11.6							
下顎遊離歯	R			18.3	11.3							
下顎遊離歯	R			16.4	11.4							
下顎遊離歯	R			18.8	11.8							
下顎遊離歯	R			16.5	11.7							
下顎骨	L	-	-	17.8	10.3	-	11.9					若
下顎骨	L	-	-	-	-	26.8	12.3					若
下顎骨	L	-	-	-	-	30.6	13.6					成
下顎骨	L	-	-	-	-	28.2	12.3					成
下顎骨	L	-	-	-	-	26.2	12.3					成
下顎遊離歯	L					30.1	13.2					成
下顎遊離歯	L					29.3	12.7					成
下顎遊離歯	L					26.1	12.4					成
下顎遊離歯	L					29.4	12.5					
下顎遊離歯	R					29.0	13.4					
下顎遊離歯	R					28.4	12.3					成
下顎遊離歯	R					28.4	12.6					成
下顎遊離歯	R					28.4	12.5					成
下顎遊離歯	R					31.2	13.4					成
下顎遊離歯	R					26.7	12.4					成
下顎遊離歯	R					30.2	13.3					成
下顎遊離歯	R					25.8	12.3					成
下顎遊離歯	R					26.9	13.6					
下顎遊離歯	R					29.0	12.5					
計測資料数		25	26	27	27	18	19	1	1	6		
最小		13.0	8.1	16.3	10.3	25.8	11.9			25.4		
最大		14.7	9.3	19.4	12.1	31.2	13.6			29.4		
平均		13.8	8.7	17.5	11.3	28.4	12.7	37.8	27.5	28.0		
標準偏差		0.431	0.229	0.805	0.424	1.644	0.525	-	-	1.485		

表8. ウシ中手骨・中足骨の計測値・単位はmm (表9～16も同様)

種類	部位	左右	No	残存状態	Bp	SD	Bd	GL
ウシ	中手骨	L	1	w	58.2	31.6	-	188.3
ウシ	中手骨	L	2	w	-	27.7	55.2	196.2
ウシ	中手骨	L	3	d	-	29.8	-	-
ウシ	中手骨	L	4	p	63.1	-	-	-
ウシ	中手骨	L	5	p	62.3	36.4	-	-
ウシ	中手骨	L	6	p	-	32.4	-	-
ウシ	中手骨	L	7	p	63.7	34.4	-	-
ウシ	中手骨	L	8	p	59.5	-	-	-
ウシ	中手骨	L	9	p	52.2	26.7	-	-
ウシ	中手骨	R	1	w	-	-	60.8	195.5
ウシ	中手骨	R	2	p	65.5	33.9	-	-
ウシ	中手骨	R	3	p	58.6	-	-	-
ウシ	中手骨	R	4	p	51.5	28.4	-	-
ウシ	中手骨	R	5	p	52.7	30.4	-	-
ウシ	中手骨	R	6	p	54.3	-	-	-
ウシ	中足骨	L	1	w	43.0	23.1	-	-
ウシ	中足骨	L	2	d	-	-	59.2	-
ウシ	中足骨	L	3	d	-	-	59.0	-
ウシ	中足骨	L	4	d	-	-	53.3	-
ウシ	中足骨	L	5	p	-	28.6	-	-
ウシ	中足骨	L	6	p	46.7	25.3	-	-
ウシ	中足骨	L	7	p	-	27.8	-	-
ウシ	中足骨	L	8	p	-	27.1	-	-
ウシ	中足骨	L	9	p	-	23.7	-	-
ウシ	中足骨	L	10	p	47.8	-	-	-
ウシ	中足骨	R	1	p	46.7	22.7	-	-
ウシ	中足骨	R	2	p	47.6	27.5	-	-
ウシ	中足骨	R	3	p	48.4	26.8	-	-
ウシ	中足骨	R	4	p	-	24.5	-	-
ウシ	中足骨	R	5	p	45.8	-	-	-

表11. ウマ中手骨・中足骨の計測値

種類	部位	左右	No	残存状況	Bp	SD	Bd	GL
ウマ	中手骨	L	1	w	47.38	29.24	43.33	197.20
ウマ	中手骨	L	2	w	46.58	28.61	42.15	202.20
ウマ	中手骨	L	3	d	-	30.64	45.70	-
ウマ	中手骨	L	4	d	-	-	44.80	-
ウマ	中手骨	R	1	p	43.83	33.80	-	-
ウマ	中手骨	R	2	d	-	-	45.89	-
ウマ	中足骨	L	1	p	43.51	27.12	-	-
ウマ	中足骨	L	2	p	42.89	-	-	-
ウマ	中足骨	R	1	w	43.05	25.14	41.84	246.20
ウマ	中足骨	R	2	(d-)	-	-	42.66	-

表14. ネズミ科大腿骨の計測値.

(GL1):遠位端がはずれた状態での最大長、(GL2):大腿骨頭・遠位端がはずれた状態での最大長

種類	部位	左右	計測資料 No.	残存位置	(GL1)	(GL2)	SD	備考
ネズミ科	大腿骨	L	No.1	(p-)-(d-)	-	33.8	4.8	やや大型
ネズミ科	大腿骨	L	No.2	p-(d-)	31.5	30.7	3.3	
ネズミ科	大腿骨	L	No.3	(p-)-(d-)	-	-	3.1	
ネズミ科	大腿骨	L	No.4	p-m	-	-	2.9	
ネズミ科	大腿骨	L	No.5	p-m	-	-	3.5	
ネズミ科	大腿骨	L	No.6	p-m	-	-	3.1	
ネズミ科	大腿骨	L	No.7	p-m	-	-	3.3	
ネズミ科	大腿骨	L	No.8	<p->-m	-	-	3.2	
ネズミ科	大腿骨	R	No.1	p-(d-)	30.8	-	3.3	
ネズミ科	大腿骨	R	No.2	<p->-(d-)	-	27.9	4.0	
ネズミ科	大腿骨	R	No.3	(p-)-(d-)	-	-	3.3	
ネズミ科	大腿骨	R	No.4	(p-)-(d-)	-	-	2.9	
ネズミ科	大腿骨	R	No.5	(p-)-(d-)	-	-	2.4	
ネズミ科	大腿骨	R	No.6	(p-)-(d-)	-	-	2.5	

表9. ウシ距骨の計測値

種類	部位	左右	No	GLm	GLl	Bd
ウシ	距骨	L	1	60.2	68.1	44.7
ウシ	距骨	L	2	64.4	69.8	46.7
ウシ	距骨	L	3	56.8	61.6	38.9
ウシ	距骨	L	4	-	-	40.0
ウシ	距骨	R	1	60.0	66.1	43.0
ウシ	距骨	R	2	56.4	62.5	39.0
ウシ	距骨	R	3	60.1	63.5	40.0
ウシ	距骨	R	4	-	63.5	41.1
ウシ	距骨	R	5	61.5	67.6	41.7
ウシ	距骨	R	6	-	60.1	-

表10. ウシ踵骨の計測値

種類	部位	左右	No	GL
ウシ	踵骨	L	1	133.4
ウシ	踵骨	L	2	121.1
ウシ	踵骨	R	1	122.3

表12. ウマ距骨の計測値

種類	部位	左右	No	GB	GH
ウマ	距骨	R	1	53.67	48.50

表13. ウマ踵骨の計測値

種類	部位	左右	No	GL
ウマ	踵骨	R	1	101.57

表15. イヌの計測値.

種類	部位	左右	計測資料 No.	残存位置	P4L	M1L	GL	備考
イヌ	上顎骨	R	No.1	[P4 M1]	17.5	-	-	
イヌ	下顎M1	L	No.2	-	-	19.9	-	
イヌ	下顎M1	R	No.3	-	-	19.4	-	
イヌ	下顎M1	R	No.4	-	-	19±	-	
イヌ	第3中足骨	R	No.5	w	-	-	64.5	大型

表16. 鳥類の計測値.

種類	部位	左右	計測資料 No.	残存位置	GL	備考
ハト科	上腕骨	L	No.1	w	47.6	
ハト科	上腕骨	R	No.2	w	39.5	
ハト科	橈骨	R	No.3	w	58.5	
ハト科	大腿骨	L	No.4	w	46.1	
カラス属	尺骨	L	No.5	w	80.6	
カラス属	中手骨	L	No.6	w	49.3	
鳥類・未同定	上腕骨	R	No.7	w	27.8	ツグミ科？

表17. イノシシ(またはブタ)遺体にみられた損傷(解体痕・咬痕など)

部位	損傷の種別	位置		方向	数		
頭頂骨	カットマーク?	背面		前後	1		
頬骨	カットマーク	頬骨突起前部腹面		前後	1		
側頭骨	カットマーク	脳窗外壁		前後	1		
		関節結節		前後	3		
後頭骨	カットマーク	後頭顆		-	1		
切歯骨	カットマーク	外面		横～斜	1		
下顎骨	カットマーク	連合部腹面		左右	1		
		下顎体後部外面		横～斜	3		
		下顎角外面		前後	1		
		下顎枝外面		横～斜	1		
環椎	カットマーク	背面		左右	1		
		側面		前後	1		
		腹面		左右	2		
軸椎	カットマーク	-		-	1		
頸椎	カットマーク	棘突起	下部	前後	1		
胸椎	カットマーク	棘突起	上部	前後	1		
			下部	上下	1		
腰椎	カットマーク	横突起	背面	前後	1		
			腹面	前後	2		
肩甲骨	カットマーク	頸部	外面	横～斜	3		
			上側縁	横～斜	2		
			下側縁	横～斜	5		
		肩甲棘	上縁	横～斜	1		
			下側縁中央	横～斜	3		
		骨幹近位部	前面	横～斜	1		
			後面	横～斜	2		
			外面	横～斜	2		
			前面	横～斜	4		
			内面	斜～縦	1		
内面	横～斜		3				
骨幹中央	後面	横～斜	1				
	後面	斜～縦	1				
	外面	横～斜	3				
	前面	横～斜	9				
	骨幹遠位部	内面	横～斜	5			
		後面	横～斜	5			
後面		縦	1				
上腕骨	カットマーク	骨幹遠位部	後面	縦	1		
			前面	横～斜	1		
			内面	横～斜	3		
		遠位端	内面	縦	1		
			後面	横～斜	1		
			外面	横～斜	1		
			スパイラル・フラクチャー?	骨幹中央	-	-	2
				骨幹遠位部	-	-	1
橈骨	カットマーク	骨幹近位部	前面	縦	1		
			前面	横～斜	1		
		骨幹遠位部	前面	横～斜	1		
			内面	横～斜	1		
		切断 *		遠位端	横～斜	1	

(右段につづく)

* 橈骨遠位端を切断された資料は近年のものである可能性が高い。

部位	損傷の種別		位置	方向	数	
尺骨	カットマーク	骨幹近位部	前面	横～斜	2	
			内面	横～斜	7	
			後面	横～斜	2	
			外面	横～斜	2	
		骨幹中央	内面	横～斜	1	
			後面	横～斜	1	
		骨幹遠位部	内面	横～斜	1	
			後面	横～斜	1	
	チョップマーク	骨幹近位部	内面	横～斜	1	
			後面	横～斜	2	
		骨幹中央	内面	横～斜	1	
			後面	横～斜	1	
		肉食獣の咬痕	骨幹近位部	内面	-	2
	McIV	カットマーク	骨幹中央	前面～側面	横～斜	1
寛骨	カットマーク	恥骨	寛骨臼付近	前後	2	
		腸骨中央	下縁	横～斜	1	
		座骨(寛骨臼近く)	外面	横～斜	1	
	チョップマーク	腸骨(寛骨臼近く)	外面	上下	1	
大腿骨	カットマーク	近位端(骨頭直下)	後面	横～斜	1	
			骨幹近位部	内面	横～斜	2
		骨幹中央	前面	横～斜	1	
			内面	横～斜	1	
		骨幹遠位部	前面	横～斜	1	
			内面	横～斜	2	
			後面	横～斜	1	
			外面	横～斜	1	
	スパイラル・フラクチャー	骨幹中央	-	2		
	肉食獣の咬痕	骨幹遠位部	-	2		
	脛骨	カットマーク	骨幹近位部	内面	横～斜	2
				外面	横～斜	1
骨幹中央			前面	横～斜	1	
			前面	横～斜	2	
骨幹遠位部			後面	横～斜	2	
			外面	横～斜	1	
チョップマーク		遠位端	内面	横～斜	1	
		骨幹近位部	外面	横～斜	1	
	骨幹中央	内面	横～斜	1		
腓骨	カットマーク	骨幹遠位部	横～斜	1		
距骨	カットマーク	中央	横～斜	3		
踵骨	カットマーク	関節部	後縁	横～斜	2	
			外面	横～斜	1	
		前縁中央	横～斜	1		
		後縁中央	横～斜	2		
MtⅡ	カットマーク	骨幹遠位部	横～斜	1		
MtⅣ	カットマーク	骨幹近位部	前面	横～斜	1	
肋骨	カットマーク	近位端～近位部	内面	横～斜	4	
			外面	横～斜	7	
		中央	内面	横～斜	1	
		遠位部	外面	横～斜	2	
	チョップマーク	近位部	外面	横～斜	3	
		遠位部	外面	横～斜	2	

表18. ウシ・ウマ遺体にみられた損傷(解体痕・咬痕など)

種類	部位	左右	残存状態	損傷のタイプ	位置	方向
ウシ	肩甲骨	R	関節部	カットマーク	関節部	横
ウシ	肩甲骨	R	関節部	カットマーク	関節部	横
ウシ	上腕骨	L	d	カットマーク	遠位端内面	横
ウシ	上腕骨	R	<d>	カットマーク	遠位端前面・内面?・外面?	横
ウシ	上腕骨	L	<d>	カットマーク?	遠位端内面	横
ウシ	上腕骨	L	<d>	スパイラル・フラクチャー		
ウシ	上腕骨	R	<d>	スパイラル・フラクチャー		
ウシ	上腕骨	R	<d>	スパイラル・フラクチャー		
ウシ	上腕骨	R	<d>	スパイラル・フラクチャー		
ウシ	上腕骨	R	d	肉食獣(イヌ?)による咬痕		
ウシ	橈骨	L	p	カットマーク	近位端内面	斜
ウシ	橈骨	L	p	チョップマーク	骨幹前面	横
ウシ	橈骨	L	p	チョップマーク	骨幹前面	横
ウシ	橈骨	L	p	スパイラル・フラクチャー		
ウシ	中手骨	L	w	チョップマーク	骨幹後内面	横
ウシ	中手骨	R	p	スパイラル・フラクチャー		
ウシ	中手骨	R	p	擦り切り痕	骨幹後内面	斜
ウシ	中手骨	R	p	穿孔	近位端関節面	
ウシ	中手骨	?	d	スパイラル・フラクチャー?		
ウシ	中手骨	?	d	スパイラル・フラクチャー?		
ウシ	大腿骨	R	p	スパイラル・フラクチャー		
ウシ	大腿骨	R	(p)	肉食獣(イヌ?)による咬痕		
ウシ	脛骨	L	d	カットマーク	遠位端後面	横
ウシ	脛骨	R	d	カットマーク	遠位端前面外面	横
ウシ	距骨	L		カットマーク	内面	横
ウシ	距骨	L		カットマーク	内面	横
ウシ	距骨	R		カットマーク	前外面	横
ウシ	距骨	R		カットマーク	後面	横
ウシ	踵骨	L	関節部	カットマーク	近位端内面	斜
ウシ	中足骨	L	d	カットマーク	遠位端前面	横
ウシ	中足骨	L	d	チョップマーク	骨幹-遠位端前面	横
ウシ	中足骨	L	d	スパイラル・フラクチャー		
ウシ	中足骨	L	d	スパイラル・フラクチャー?		
ウシ	中足骨	L	p	スパイラル・フラクチャー?		
ウシ	中足骨	L	p	スパイラル・フラクチャー?		
ウシ	中足骨	R	p	スパイラル・フラクチャー		
ウシ	中足骨	R	p	肉食獣(イヌ?)による咬痕		
ウシ	基節骨			カットマーク	近位端前面	横
ウシ	基節骨			カットマーク	骨幹前面	横
ウマ	橈骨	L	(d-)	チョップマーク	骨幹後外面	横
ウマ	橈骨	R	d	カットマーク	遠位端内面	横
ウマ	中手骨	L	d	スパイラル・フラクチャー		
ウマ	踵骨	R		カットマーク	遠位端	横

表19. 今帰仁城主郭東斜面から採集された脊椎動物遺体の組成 (NISP: 同定標本数, MNI: 最小個体数)

分類群	NISP	MNI
魚類(軟骨魚綱・硬骨魚綱)		
サメ類	52	3
トビエイ科	5	2
エイ類?	2	-
ウツボ科	5	2
ダツ科	26	4
イトウダイ科	7	4
ボラ科	32	3
カマス属	231	13
ハタ科		
ハタ科(マハタ型)	150	49
ハタ科(スジアラ型)	23	7
ハタ科(型不明)	305	-
ハタ科小計	478	56
アジ科		
イトヒキアジ属	65	13
ギンガメアジ属(カスミアジ近似種)	3	1
ギンガメアジ属(ギンガメアジ近似種)	3	2
メアジ近似種	34	5
アジ科(その他)	15	3
アジ科(大型種)	155	-
アジ科属不明	19	-
アジ科小計	294	24
シイラ属	178	8
ヒメジ科	3	2
イスズミ科	5	3
フエダイ科	58	10
コンショウダイ亜科	42	8
タマガシラ属	8	4
クロダイ属	347	68
ヘダイ	7	2
フエフキダイ科		
ヨコシマクロダイ	45	16
メイチダイ属	20	7
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	313	158
フエフキダイ属(アマミフエフキ型)	36	22
フエフキダイ属(キツネフエフキ型)	1	1
フエフキダイ属	219	-
フエフキダイ科属不明	787	-
フエフキダイ科小計	1421	204
ベラ科		
ベラ科(シロクラベラ型)	71	55
ベラ科(タキベラ型)	11	7
ベラ科A	24	16
ベラ科B	22	19
ベラ科(その他)	1	2
ベラ科(型不明)	595	-
ベラ科小計	724	99

(右段につづく)

分類群	NISP	MNI
ブダイ科		
イロブダイ属	131	35
アオブダイ属	1257	294
ブダイ科(属不明)	399	-
ブダイ科小計	1787	1787
スマ	57	4
タチウオ科	1	1
ニザダイ科	105	6
アイゴ属	170	9
モンガラカワハギ科	10	6
ハリセンボン科	22	10
魚類未同定	26	-
魚類小計	6103	2342

両生綱		
カエル類	4	1
爬虫綱		
ウミガメ科	105	5
リュウキュウヤマガメ?	7	1
ヘビ類	9	1
爬虫綱小計	121	7

鳥綱		
カラス属	8	3
ワシ科	1	1
カモ類	2	1
ハト科	7	2
ニワトリ	287	41
鳥類未同定	3	-
鳥類小計	308	48

哺乳綱		
トガリネズミ科	3	2
オオコウモリ科	4	2
ネズミ亜科/ネズミ科	38	9
イヌ	20	2
ネコ	15	2
ウマ	120	4
イノシシ(またはブタ)	1197	31
ブタ*	1	1
ヤギ	4	2
ウシ	346	12
ウシまたはウマ	42	-
小型獣	11	-
ジュゴン	14	1
イルカ	2	1
哺乳類小計	1817	69
総計	8353	1009

* ブタは明らかに最近のもの。

表20. 今帰仁城跡および今帰仁ムラ跡各地区の脊椎動物遺体相のまとめ

MNI比: ●>50%, ◎>25%, ○>10%, △>5%, +≤5%.
屋敷地1・4と東7区の魚類は資料数が少ないため出現種を*で表示.

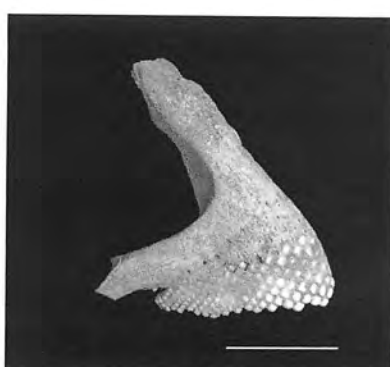
種類		周辺遺跡(今帰仁ムラ跡)						今帰仁城		
		屋敷地1	屋敷地3	屋敷地4	屋敷地2	屋敷地5	東7区	志慶真門郭	主郭	主郭東斜面
出土量(MNI合計)		7	17	15	65	21	13	110±?	870	993
大型魚類	全体中の比率(%)	29	53	27	55	52	23	60±?	79	89
	ブダイ科	*	○	*	○	○	*	◎?	◎	◎
	ベラ科	—	○	—	○	◎	*	○?	○	○
	フエフキダイ科	*	○	—	○	△	*	○?	○	○
	ハタ科	—	—	—	○	△	—	?	△	△
	モンガラカワハギ科	—	—	—	△	—	—	?	+	+
	シイラ属	—	—	—	—	—	—	?	+	+
鳥獣類	全体中の比率(%)	71	47	67	42	48	77	40±?	17	10
	イノシシ類	○	○	○	◎	◎	○	○	●	◎
	ウシ	◎	◎	●	◎	◎	◎	◎	○	○
	ウマ	○	◎	◎	○	△	○	○	△	+
	ニワトリ	—	—	—	+	△	—	+	○	◎
	ジュゴン	—	—	—	—	—	—	+	+	+



1. アオブダイ属前上顎骨 (左)



2. アオブダイ属前上顎骨 (右)



3. イロブダイ属前上顎骨 (右)



4. アオブダイ属歯骨 (左)



5. アオブダイ属歯骨 (右)



6. イロブダイ属歯骨 (右)



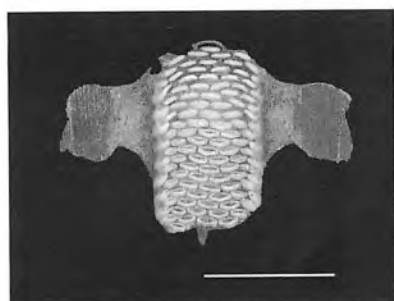
7. ブダイ科主上顎骨 (左・外側)



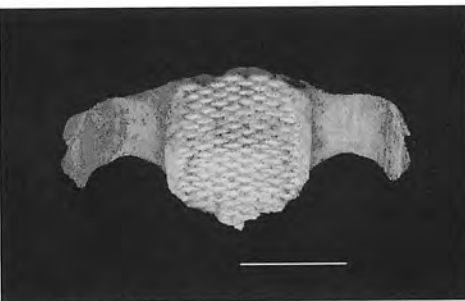
8. ブダイ科主上顎骨 (左・内側)



9. ブダイ科方骨 (左・外側)



10. アオブダイ属下咽頭骨



11. イロブダイ属下咽頭骨



12. ブダイ科角骨 (右・外側)



13. アオブダイ属上咽頭骨 (左)



14. イロブダイ属上咽頭骨 (左)

写真図版1. ブダイ科 *スケールバー: 2cm



1. ペラ科前上顎骨 (右・外側)



2. ペラ科前上顎骨 (右・内側)



3. ペラ科前上顎骨 (左・内側)



4. ペラ科歯骨 (左・内側)



5. ペラ科歯骨 (左・内側)



6. ペラ科方骨 (左・内側)



7. ペラ科主上顎骨 (右・内側)



8. ペラ科角骨 (左・外側)



9. ペラ科角骨 (左・内側)



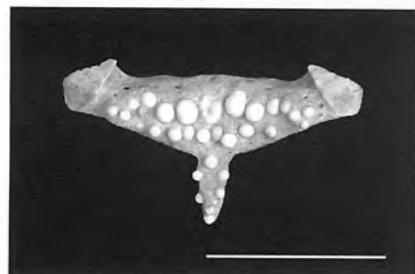
10. ペラ科A型上咽頭骨 (右)



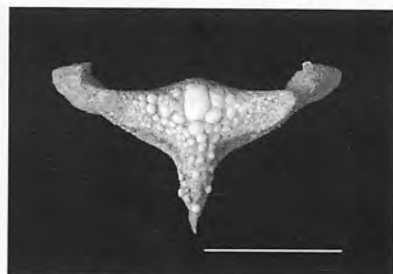
11. ペラ科B型上咽頭骨 (右)



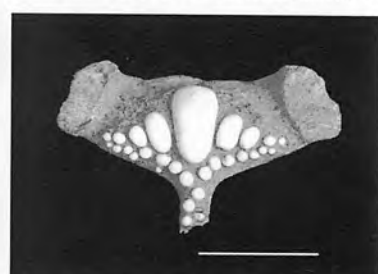
12. ペラ科タキペラ型上咽頭骨 (左)



13. ペラ科A型下咽頭骨



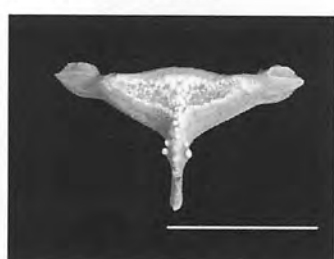
14. ペラ科B型下咽頭骨



15. ペラ科タキペラ型下咽頭骨



16. ペラ科シロクラペラ型上咽頭骨 (右)



17. ペラ科シロクラペラ型下咽頭骨

写真図版2. ペラ科

*スケールバー: 1~9, 12~17/2cm
10, 11/1cm



1. フエフキダイ属ハマフエフキ型
前上顎骨 (左・外側)



2. フエフキダイ属アマミフエフキ型
前上顎骨 (左・外側)



3. メイチダイ属前上顎骨
(左・外側)



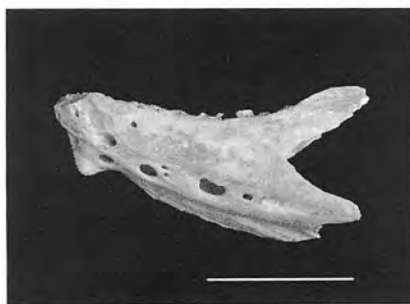
4. フエフキダイ属ハマフエフキ型
前上顎骨 (左・内側)



5. フエフキダイ属アマミフエフキ型
前上顎骨 (左・内側)



6. メイチダイ属
前上顎骨 (左・内側)



7. フエフキダイ科歯骨 (左・外側)



8. フエフキダイ科主上顎骨 (左・外側)



9. フエフキダイ科角骨 (左・外側)



10. フエフキダイ科歯骨 (右・内側)



11. フエフキダイ科主上顎骨 (左・内側)



12. フエフキダイ科角骨 (左・内側)



13. フエフキダイ属口蓋骨 (左・外側)



14. フエフキダイ属口蓋骨 (左・内側)

写真図版3.
フエフキダイ科
*スケールバー：2cm



1. ヨコシマクロダイ前上顎骨 (右・内側)



2. ヨコシマクロダイ主上顎骨 (右・内側)



3. ヨコシマクロダイ方骨 (左・内側)



4. ヨコシマクロダイ歯骨 (左・外側)



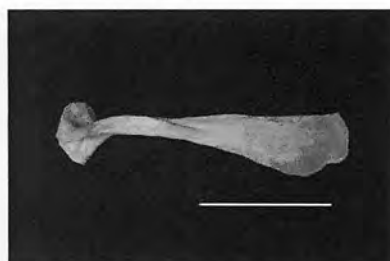
5. ヨコシマクロダイ角骨 (左・外側)



6. ハタ科マハタ型前上顎骨 (右・内側)



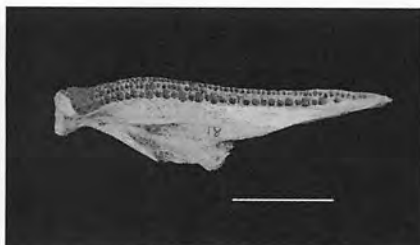
7. ハタ科スジアラ型前上顎骨 (右・内側)



8. ハタ科主上顎骨 (左・外側)



9. ハタ科マハタ型歯骨 (右・外側)



10. ハタ科マハタ型歯骨 (右・内側)



11. ハタ科角骨 (左・外側)



12. ハタ科スジアラ型歯骨 (左・外側)



13. ハタ科スジアラ型歯骨 (左・内側)



14. ハタ科方骨 (左・外側)



15. ハタ科擬鎖骨 (左・外側)



16. ハタ科擬鎖骨 (左・内側)

写真図版4.
1~5: ヨコシマクロダイ,
6~16: ハタ科
*スケールバー: 2cm



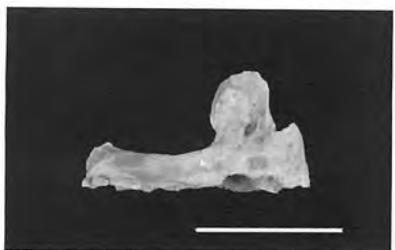
1. フェダイ科前上顎骨 (右・外側)



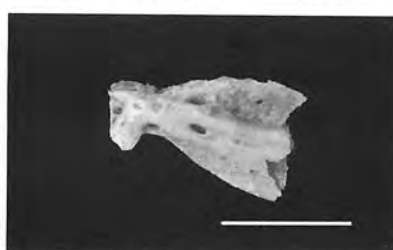
2. フェダイ科前上顎骨 (右・内側)



3. フェダイ科歯骨 (右・外側)



4. フェダイ科前上顎骨 (右・外側)



5. フェダイ科歯骨 (左・外側)



6. フェダイ科角骨 (左・外側)



7. コショウダイ亜科前上顎骨 (右・外側)



8. コショウダイ亜科前上顎骨 (右・内側)



9. コショウダイ亜科歯骨 (左・外側)



10. コショウダイ亜科主上顎骨 (右・外側)



11. コショウダイ亜科角骨 (右・外側)



12. コショウダイ亜科方骨 (右・内側)



13. タマガシラ属前上顎骨 (左・外側)



14. タマガシラ属前上顎骨 (左・内側)



15. タマガシラ属主上顎骨 (右・内側)



16. ヒメジ科歯骨 (右・内側)



17. ヒメジ科主上顎骨 (左・外内側)

写真図版5.

1~6: フェダイ科

7~12: コショウダイ亜科

13~15: タマガシラ属

16~17: ヒメジ科

*スケールバー: 1, 2/3cm

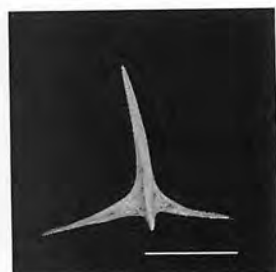
3, 6~15/2cm, 4, 5, 16, 17/1cm



1. ハリセンボン科前上顎骨



2. ハリセンボン科歯骨



3. ハリセンボン科棘



4. ハリセンボン科方骨 (右・内側)



5. モンガラカワハギ科前上顎骨 (右・外側)



6. モンガラカワハギ科前上顎骨 (右・内側)



7. イットウダイ科歯骨 (右・外側)



8. イットウダイ科角骨 (左・外側)



9. イスズミ科前上顎骨 (右・外側)



10. ニザダイ科歯骨 (左・外側)



11. ニザダイ科主鰓蓋骨 (右・内側)



12. ニザダイ科尾部鱗



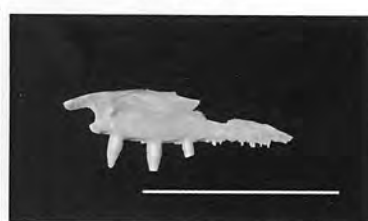
13. アイゴ属擬鎖骨 (右・外側)



14. カマス科歯骨 (右・外側)



15. カマス科歯骨 (右・内側)



16. カマス科口蓋骨 (右・内側)



17. ウツボ科歯骨 (右・内側)



18. ウツボ科方骨 (左・内側)

写真図版6.

1~4: ハリセンボン科

5, 6: モンガラカワハギ科

7, 8: イットウダイ科, 9: イスズミ科

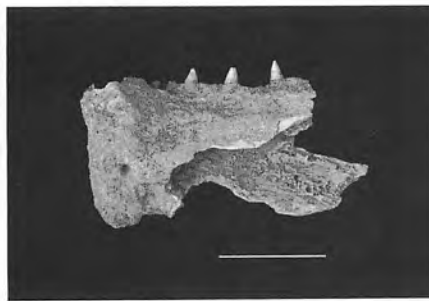
10~12: ニザダイ科, 13: アイゴ属

14~16: カマス科, 17, 18: ウツボ科

*スケールバー: 1, 2/3cm

3~6, 8, 9, 11, 13~18/2cm

7, 10, 12/1cm



写真図版7. 1~12: アジ科、14~16: シイラ属
*スケールバー: 1~10、13、15、16/2cm、11、12、14/1cm



1. クロダイ属前上顎骨 (左・外側)



2. クロダイ属前上顎骨 (左・内側)



3. クロダイ属主上顎骨 (左・内側)



4. クロダイ属歯骨 (左・外側)



5. クロダイ属歯骨 (左・内側)



6. クロダイ属角骨 (左・外側)



7. ヘダイ前上顎骨 (左・内側)



8. ヘダイ歯骨 (右・内側)



9. タチウオ科前上顎骨 (左・内側)



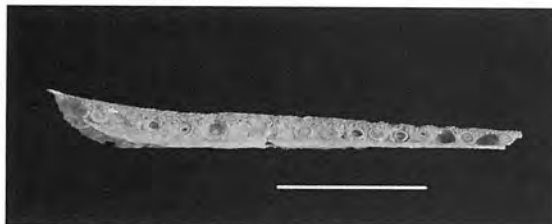
10. ボラ科主鰓蓋骨
(左・内側)



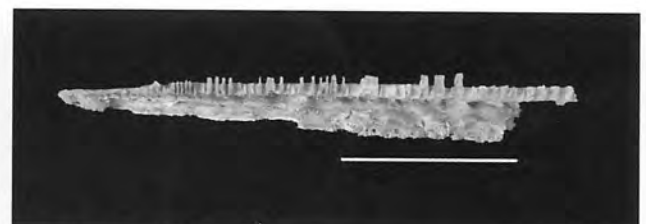
11. カツオ・スマ類主上顎骨 (右・内側)



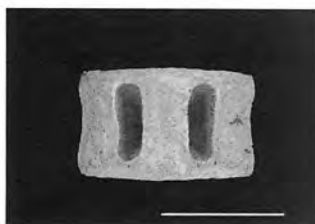
12. トビエイ科歯



13. ダツ科前上顎骨 (右・歯列面)



14. ダツ科歯骨 (左・歯列面)



15. サメ類椎骨

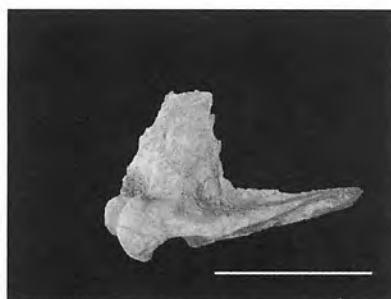
写真図版8. 1~6: クロダイ属、7、8: ヘダイ、9: タチウオ科
10: ボラ科、11: カツオ、12: トビエイ科、13、14: ダツ科、15: サメ類
*スケールバー: 1~8、10~12、14、15/2cm、9/1cm、13/3cm



1. UK-A前上顎骨 (右・外側)



2. UK-A前上顎骨 (右・内側)



3. UK-E方骨 (左・外側)



4. UK-A歯骨 (左・外側)



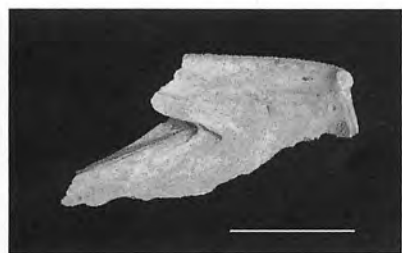
5. UK-A歯骨 (左・内側)



6. UK-E方骨 (間接面)



7. UK-D歯骨 (左・外側)

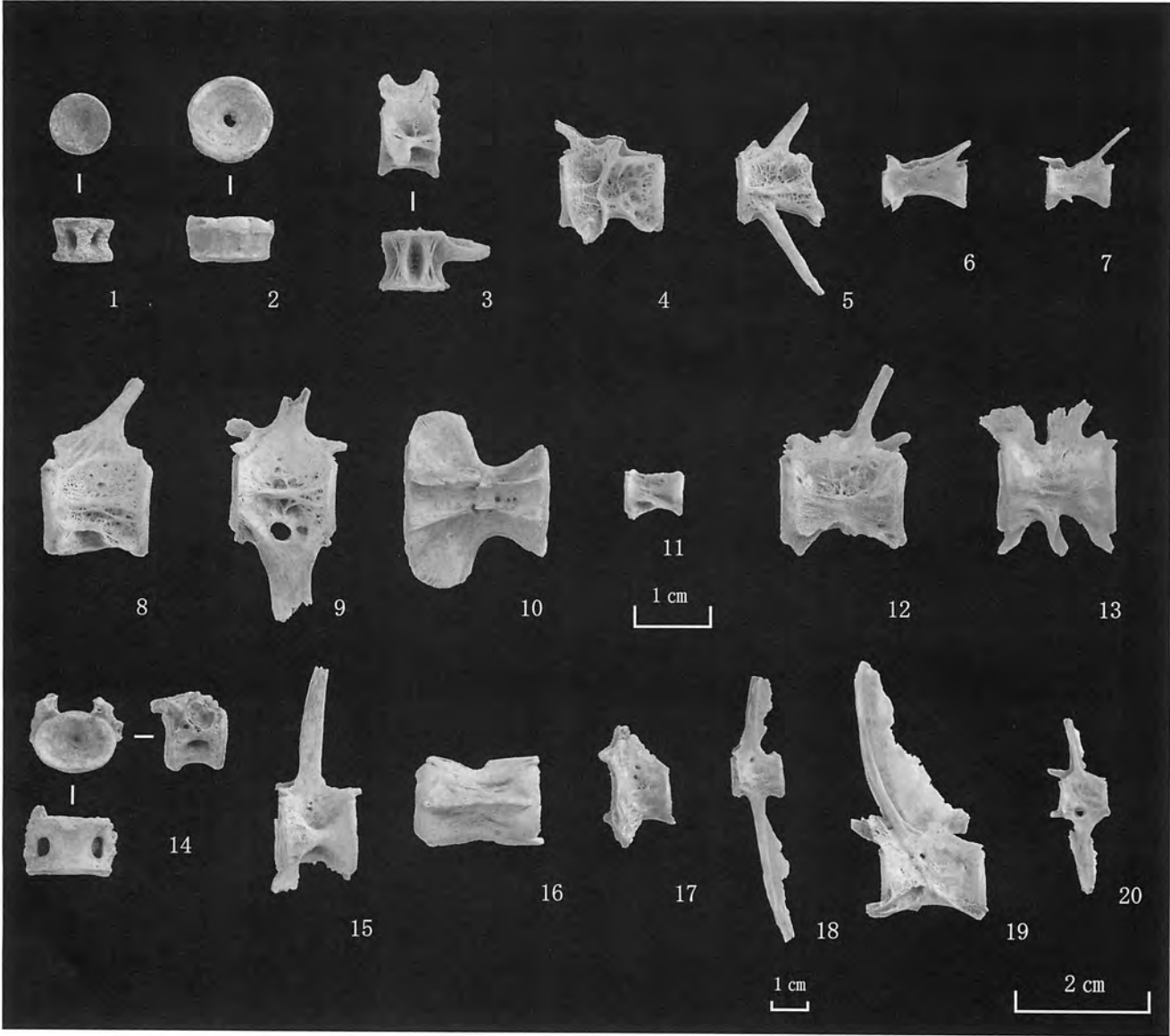


8. UK-D歯骨 (左・内側)



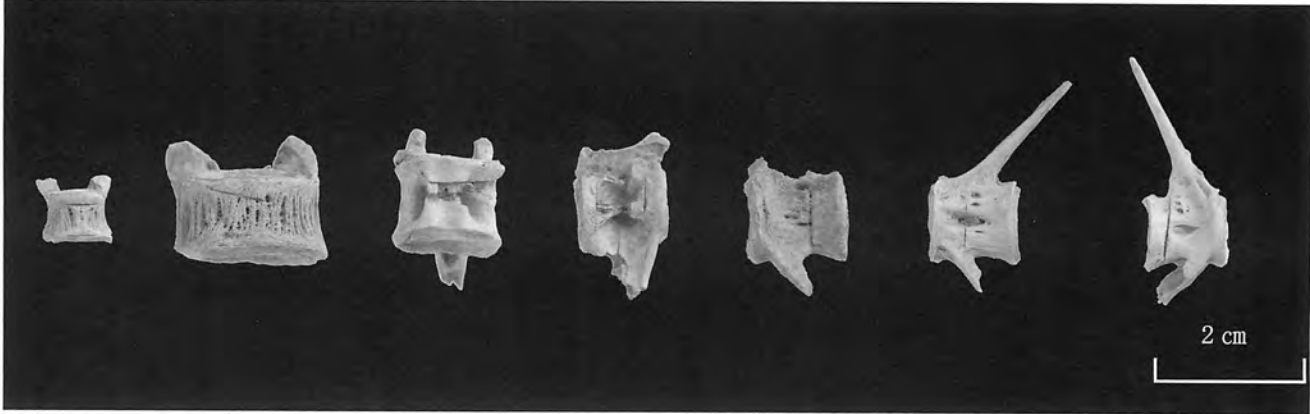
9. UK-C歯骨 (左・外側)

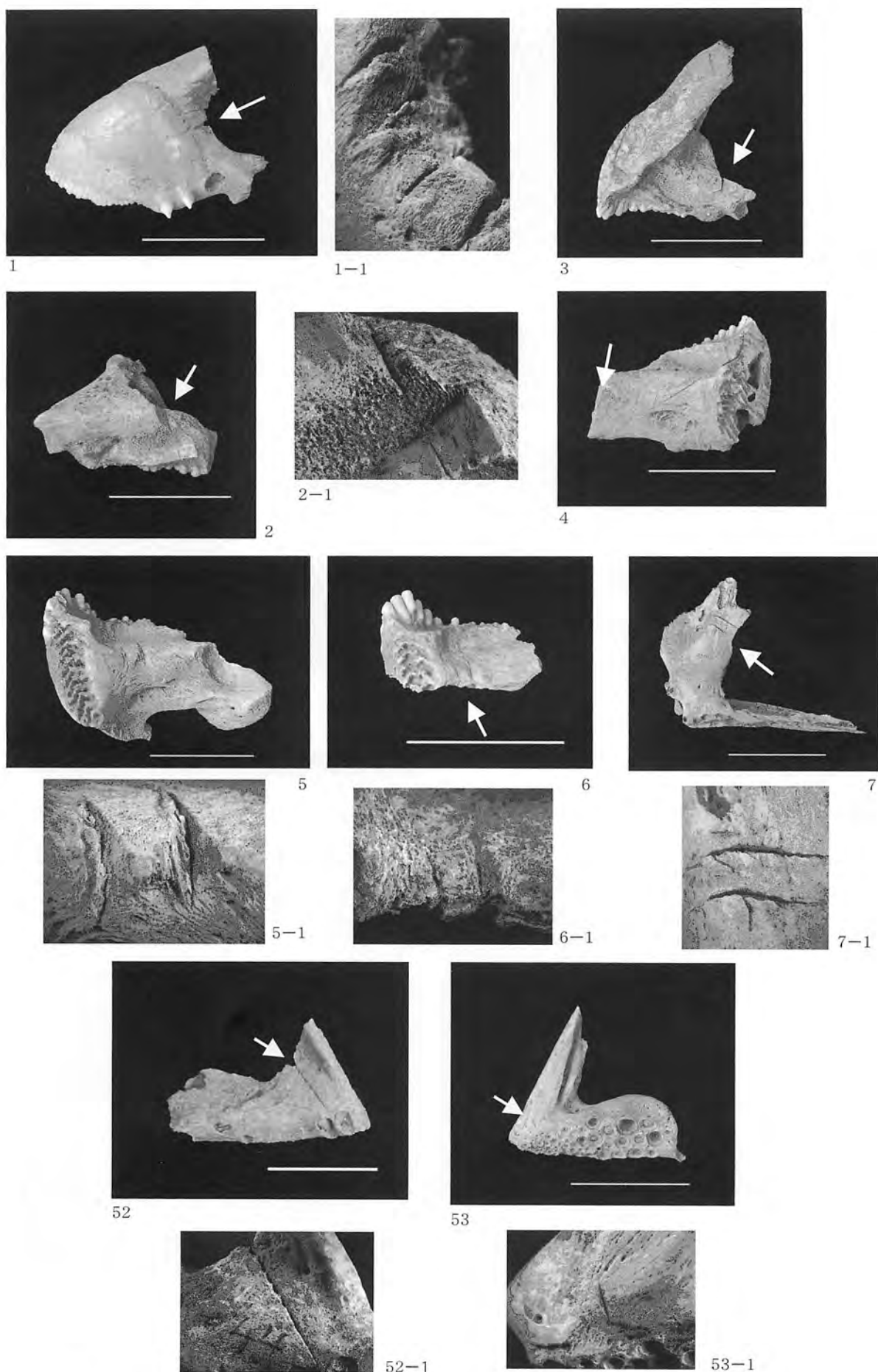
写真図版9. 未同定魚骨資料 *スケールバー: 1~8/2cm、9/1cm



1.サメ類椎骨 2.エイ類椎骨 3.ダツ科腹椎 4.ボラ科腹椎 5.ボラ科尾椎 6.カマス属腹椎 7.カマス属尾椎 8.アジ科（大型種）腹椎
9・10.アジ科（大型種）尾椎 11.メアジ近似種腹椎 12.シイラ属腹椎 13.シイラ属尾椎 14.スマ腹椎 15・16.スマ尾椎
17.ニザダイ科腹椎 18.ニザダイ科尾椎 19.アイゴ属尾椎 20.アイゴ属尾椎
* 11・18のみスケールバー1cm

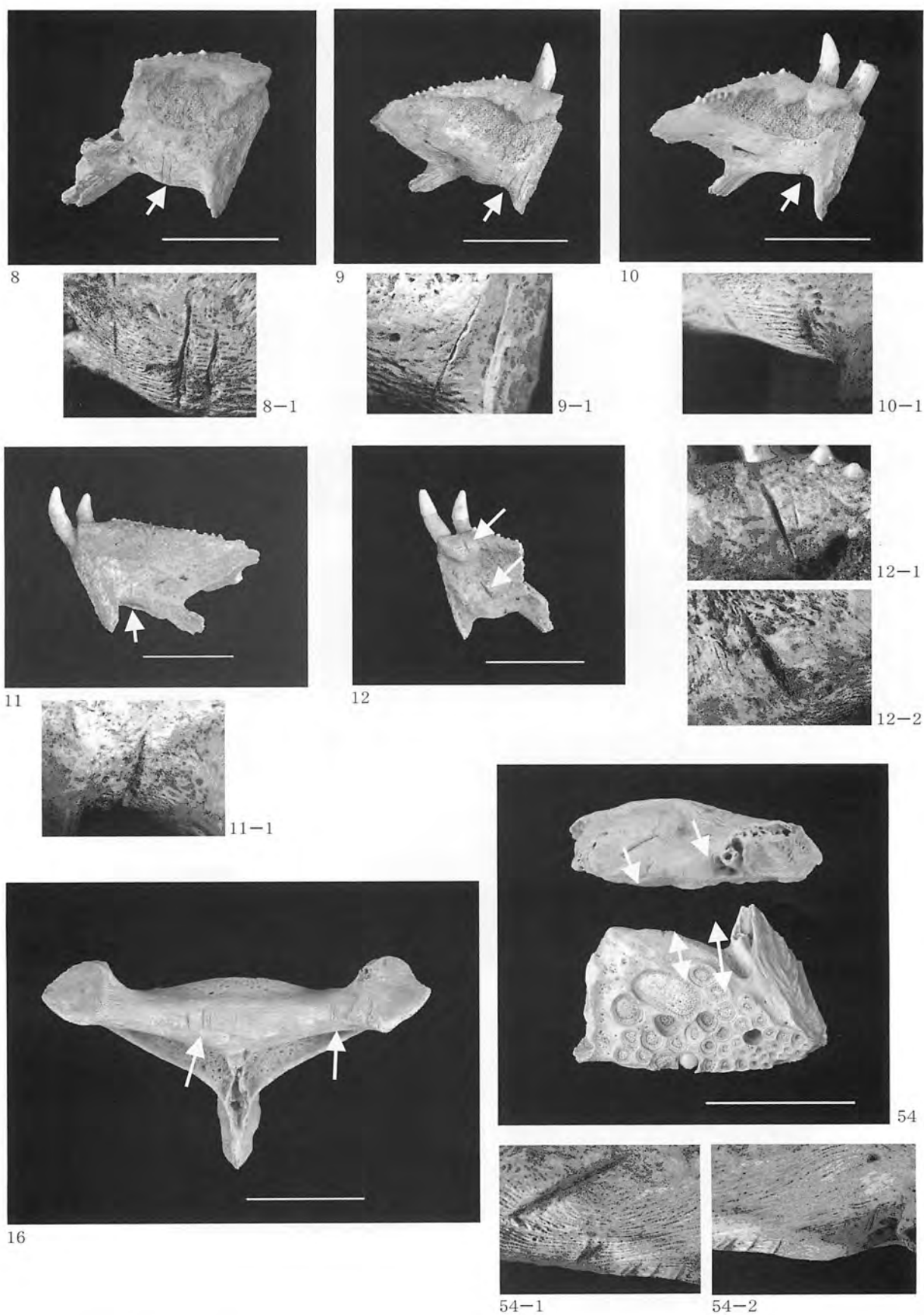
写真図版10-2 椎骨に見られるカットマークの例



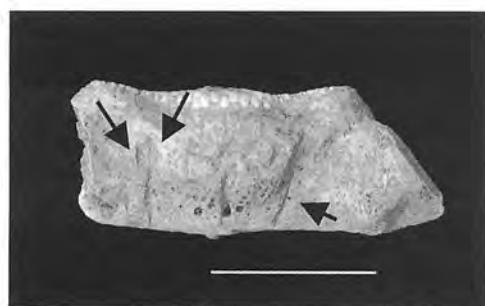


図版11. 人為的損傷資料 No1～7、52、53 (ブダイ科/1～3: 前上顎骨、4～6: 歯骨、7: 方骨、クロダイ属/52、53: 前上顎骨)

*スケールバー/1～7、53: 2cm、52: 1cm)。枝番号をつけたものは傷痕の拡大写真。



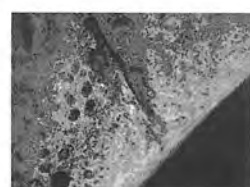
写真図版12. 人為的損傷資料 No8~12, 16, 54 (ベラ科/8~12: 歯骨, 16: 下咽頭骨, ヘダイ/54: 前上顎骨)
 *スケールバー/2cm, 枝番号をつけたものは傷痕の拡大写真。



13



13-1



13-2



13-3



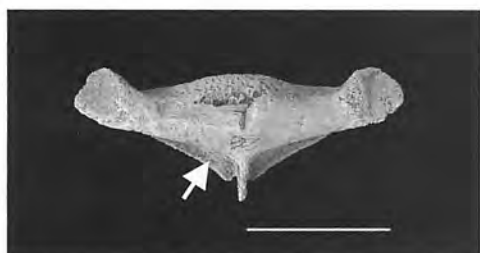
15



15-1



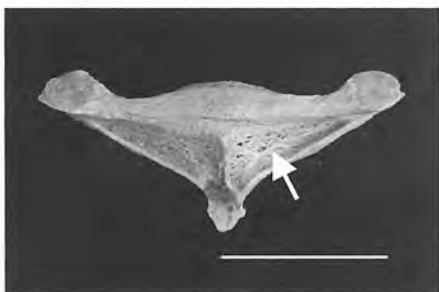
15-2



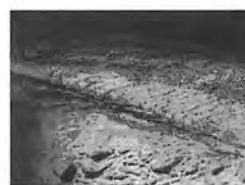
14



14-1



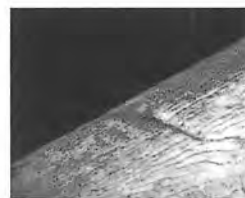
18



18-1

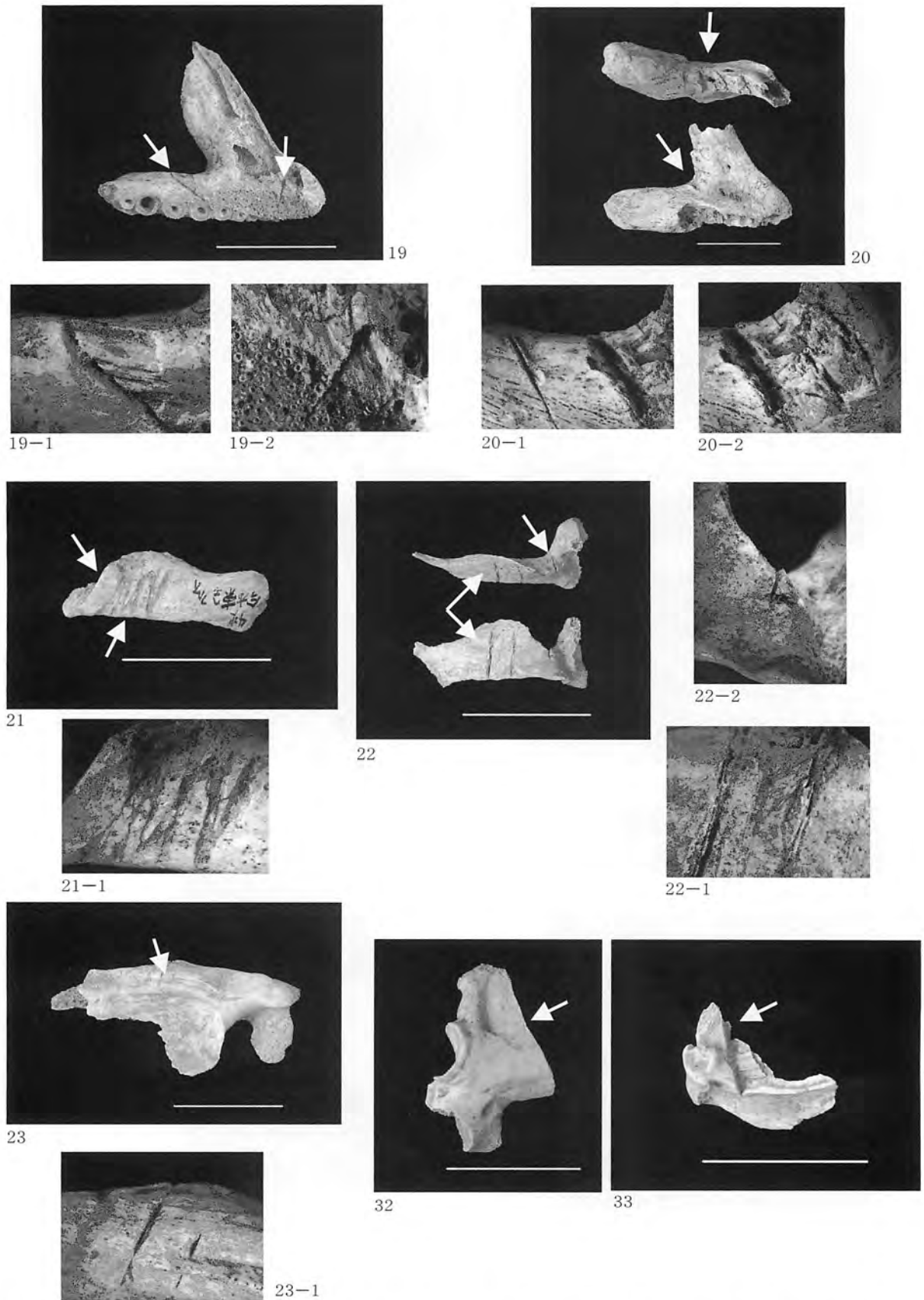


17

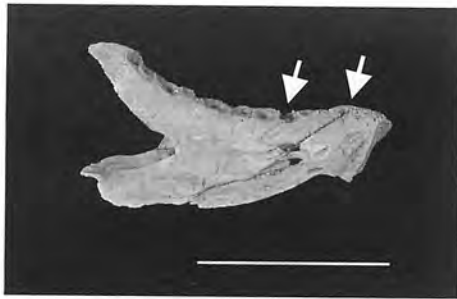


17-1

写真図版13. 人為的損傷資料 No13~15、17、18 (ペラ科/13~15、17、18: 下咽頭骨)
*スケールバー/2cm、枝番号をつけたものは傷痕の拡大写真。



写真図版14. 人為的損傷資料 No19～23、32、33（フエフキダイ属／19、20：前上顎骨、21、22：主上顎骨、23：口蓋骨、フエフキダイ科／32：角骨、ヨコシマクロダイ／33：下咽頭骨）
 ＊スケールバー／2cm、枝番号をつけたものは傷痕の拡大写真。



24



24-1



24-2



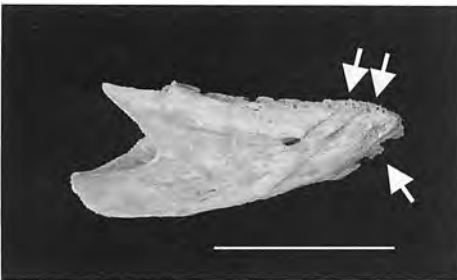
25



25-1



25-2



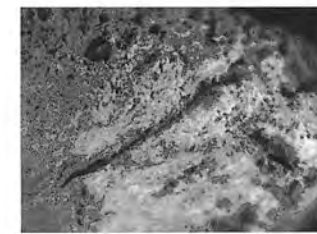
26



26-1



27



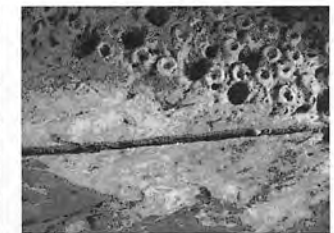
27-1



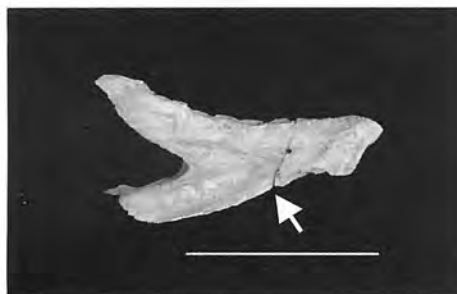
28



28-1



28-2

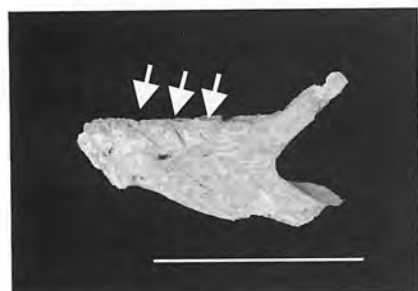


29



29-1

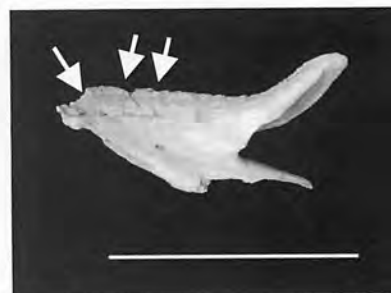
写真図版15. 人為的損傷資料 No24~29 (フエフキダイ科/24~29: 歯骨)
*スケールバー/2cm、枝番号をつけたものは傷痕の拡大写真。



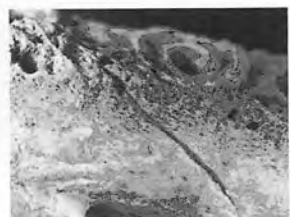
30



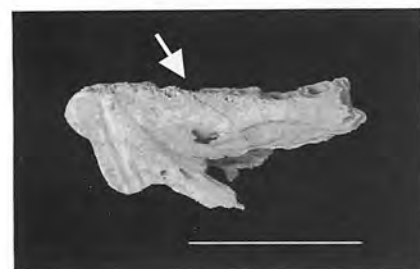
30-1



47



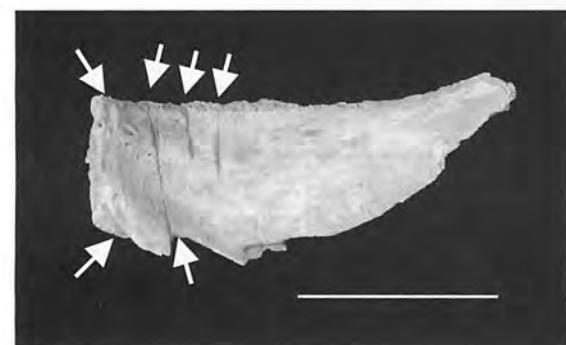
31-1



31



47-1



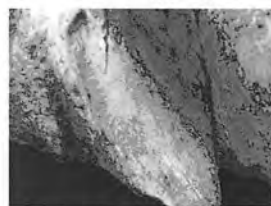
50



50-1



50-2



50-3



51



51-1



51-2

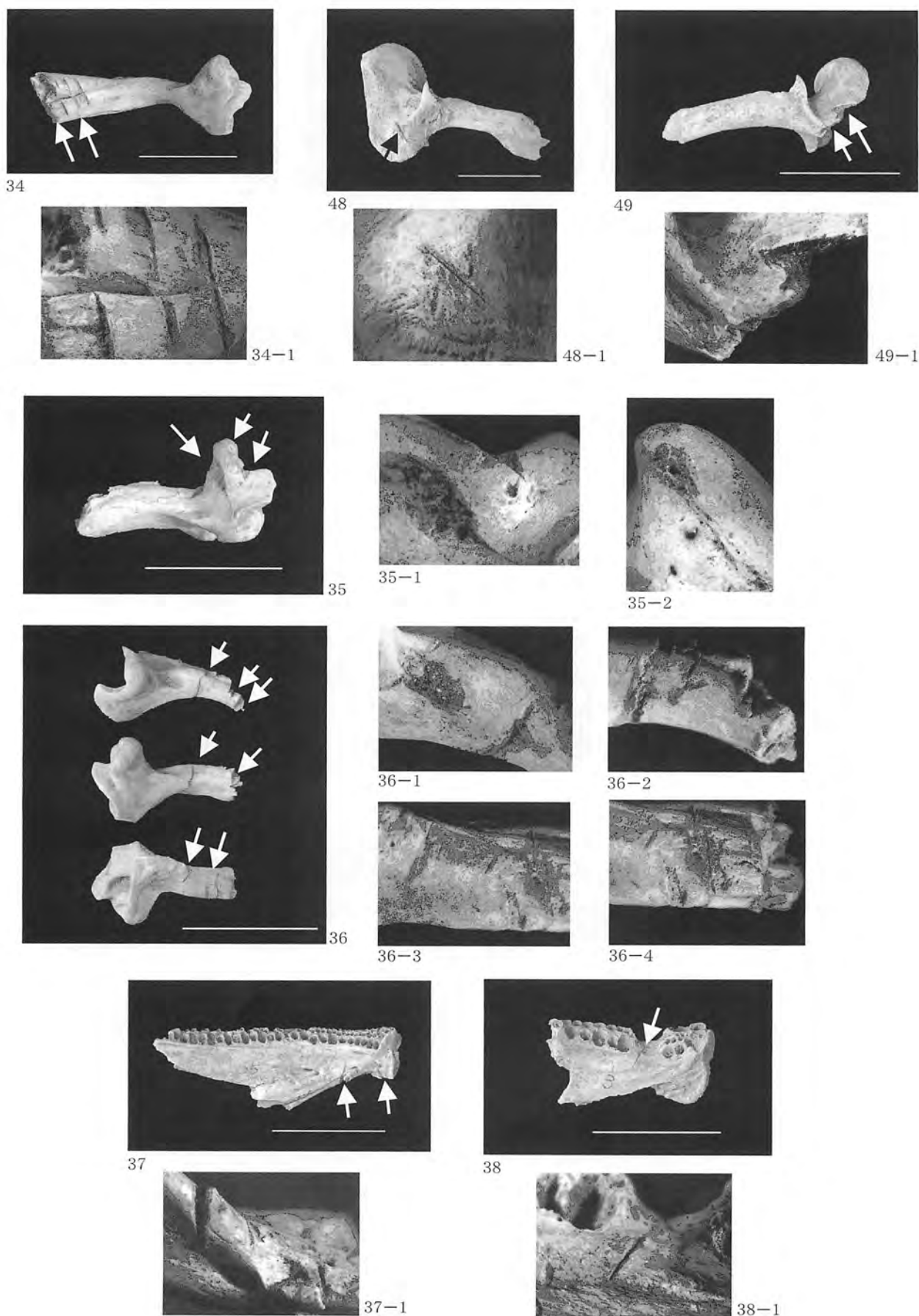


51-3

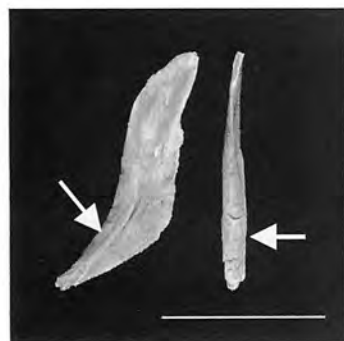


59

写真図版16. 人為的損傷資料 No30、31、47、50、51、59
 (フエフキダイ科/30、31: 歯骨、フエダイ科/47: 歯骨、イトヒキアジ属/
 50、51: 歯骨、サメ類/59: 椎骨)
 *スケールバー/2cm、枝番号をつけたものは傷痕の拡大写真。



写真図版17. 人為的損傷資料 No34~38, 48, 49 (ハタ科/34~36: 主上顎骨、マハタ型/37: 歯骨、スジアラ型/38: 歯骨、イトヒキアジ近似種/48, 49: 主上顎骨)
 *スケールバー: 2cm. 枝番号をつけたものは傷痕の拡大写真。



39



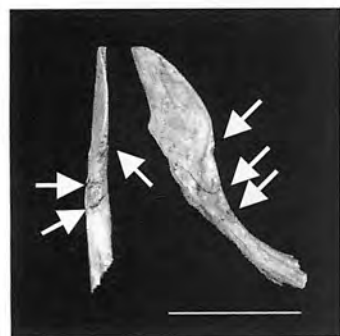
39-1



45



45-1



43



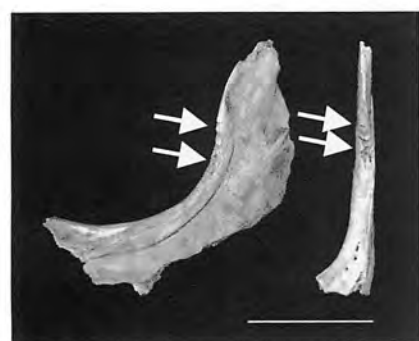
43-1



43-2



43-3



42



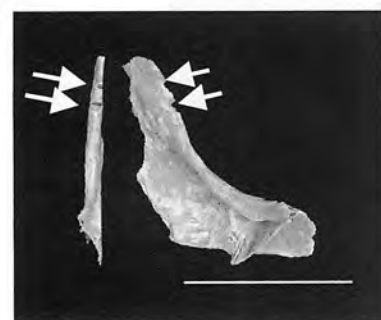
42-1



42-2



42-3



41



41-1



40



40-1



44



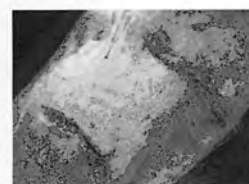
44-1



44-2

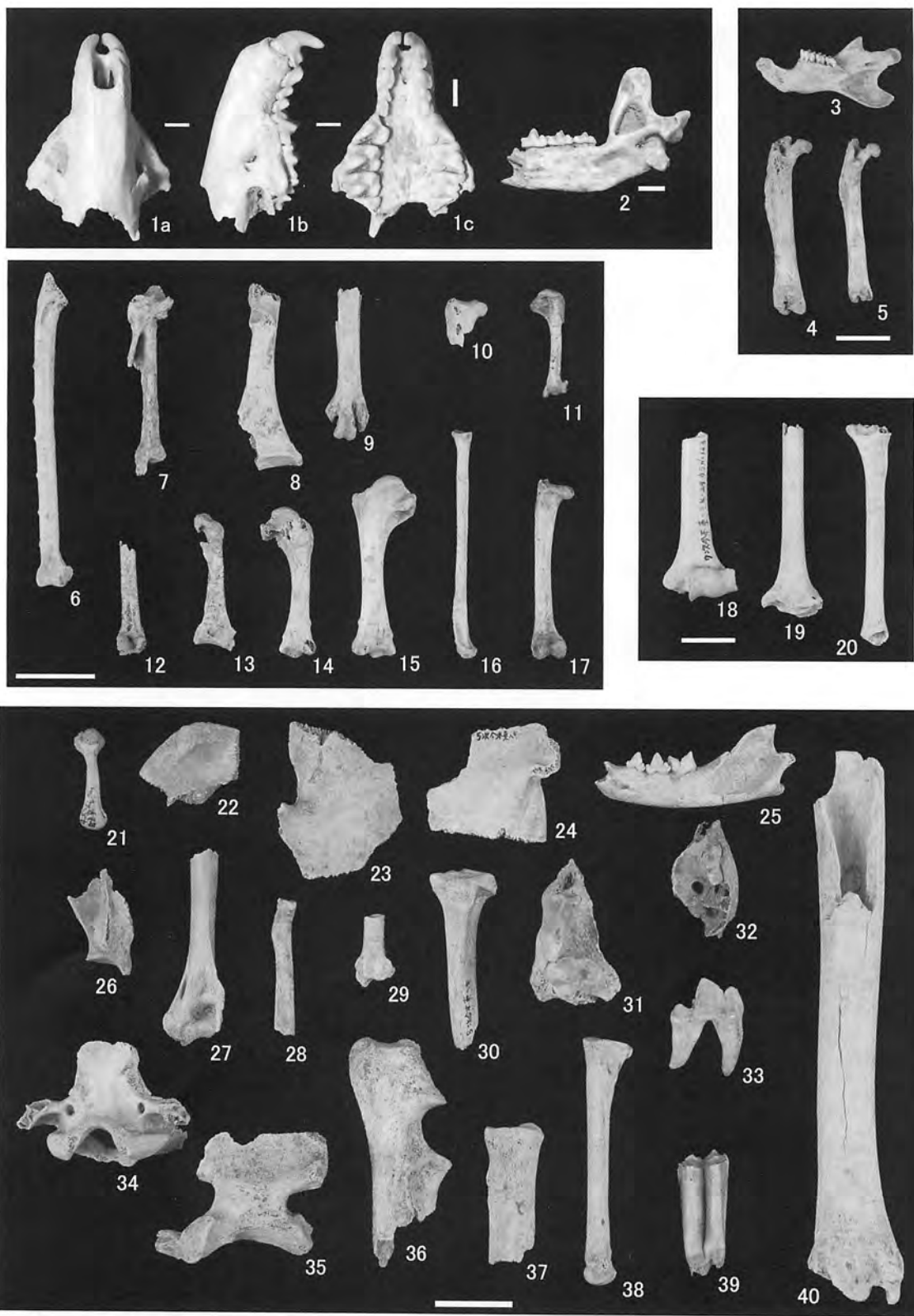


46



46-1

写真図版18. 人為的損傷資料 No39~46 (ハタ科擬鎖骨)
*スケールバー: 2cm、枝番号をつけたものは傷痕の拡大写真。



図版19. リクガメ類・鳥類（ニワトリ以外）・小型哺乳類

1・2トガリネズミ科（1頭蓋骨、2下顎骨R）、3ネズミ亜科下顎骨R、4・5ネズミ科大腿骨L、6・7カラス属（6尺骨L、7中手骨L）、8・9カモ類（8鳥口骨L、9中足骨L）、10ワシ科大腿骨R、11未同定鳥類上腕骨R、12～17ハト科（12脛骨L、13鳥口骨R、14上腕骨R、15上腕骨L、16橈骨R、17大腿骨L）、18～20オオコウモリ科（18上腕骨L、19橈骨L、20大腿骨L）、21～24リクガメ類（21上腕骨R、22上腹板L、23中腹板L、24下腹板R）、25～30ネコ（25下顎骨L、26肩甲骨R、27上腕骨R、28橈骨L、29橈骨L、30脛骨L）、31～38イヌ（31上顎骨R、32上顎骨L、33下顎M1R、34頭蓋骨、35軸椎、36尺骨R、37橈骨L、38第3中足骨R）、39・40ヤギ（39下顎M2R、40脛骨R）

*スケール・バーは、1・2：2mm、3～5・18～20：1cm、その他：2cm

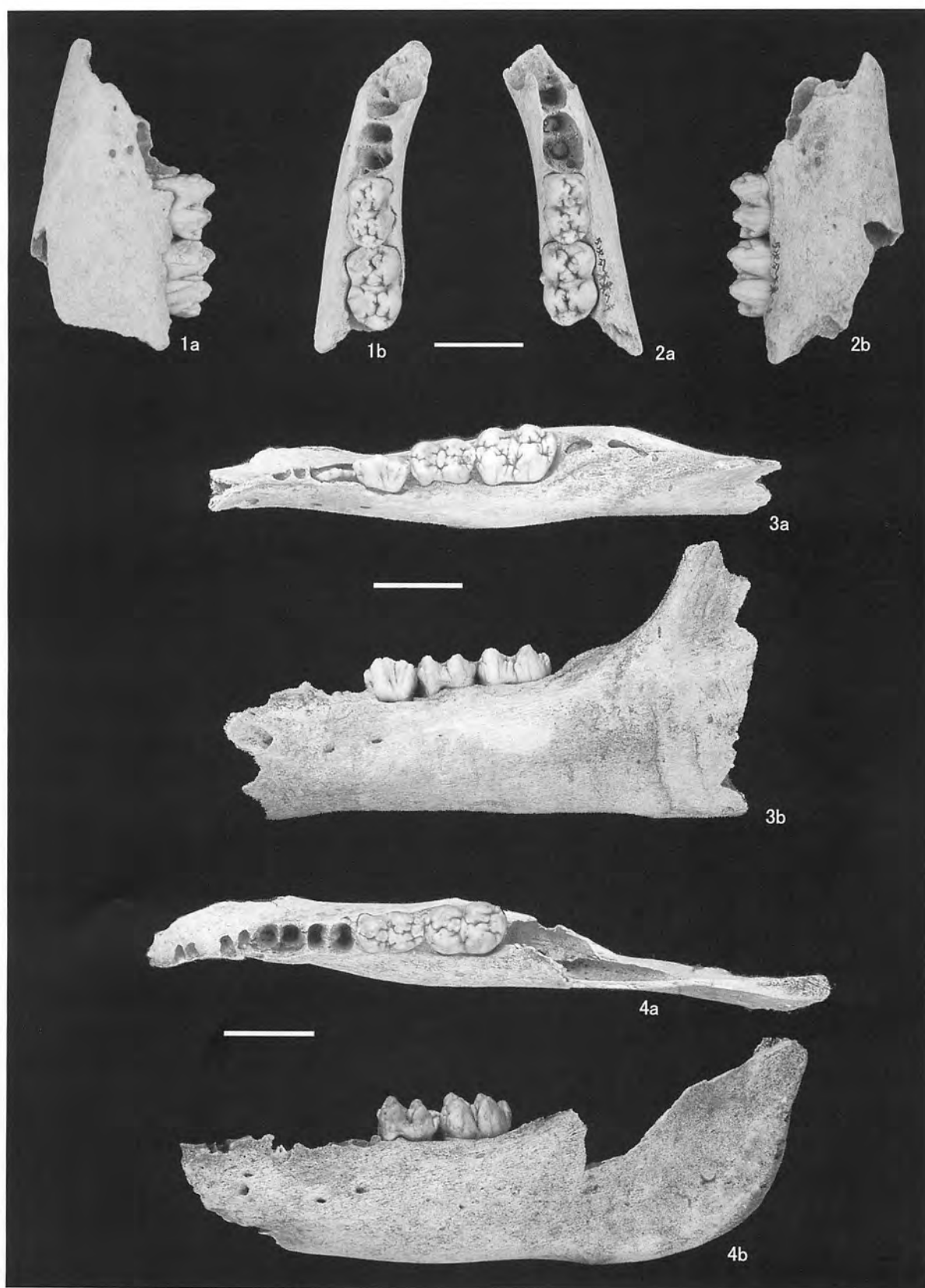


図版20. ニワトリ

1肩甲骨R、2鳥口骨R、3上腕骨R、4上腕骨L、5上腕骨L、6中手骨R、7尺骨L、8尺骨L、9尺骨L、10橈骨R、11橈骨R、12大腿骨R、13大腿骨R、14脛骨R、15脛骨L、16・17脛骨L、18中足骨R、19中足骨R、

5・9・11・13・16・17は若鳥

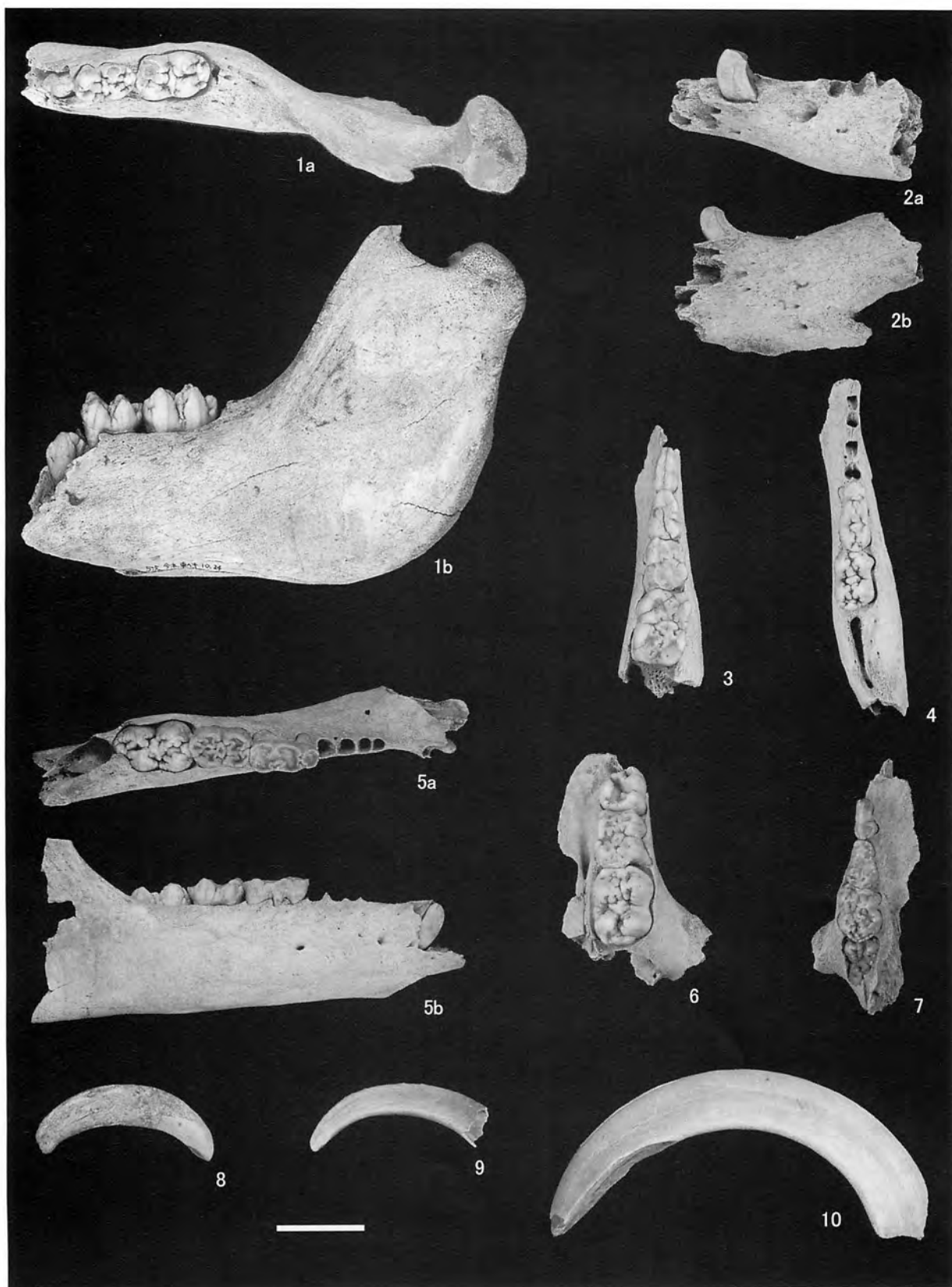
*スケール・バーは2cm



図版21. イノシシ類 (1)

1ブタ?下顎骨L、2ブタ下顎骨R (おそらく1と同一個体)、3・4下顎骨L

*スケール・バーは2cm



図版22. イノシム類 (2)

1下顎骨L、2下顎骨連合部、3~5下顎骨R、6上顎骨L、7上顎骨R、8上顎犬歯R (♀)、9・10上顎犬歯L (♂)

*スケール・バーは2cm



図版23. イノシン類 (3)

1側頭骨L、2環椎、3軸椎、4肩甲骨R、5上腕骨R、6橈骨L、7尺骨R、8第2中手骨L、9第3中手骨L、10第4中手骨L、11第5中手骨L、12基節骨、13中節骨、14末節骨

*スケール・バーは2cm



図版24. イノシチ類 (4)

1寛骨R、2大腿骨R、3・4大腿骨L、5腓骨L、6脛骨L、7距骨L、8踵骨R、9第2中足骨L、10第3中足骨L、11第4中足骨L、12第5中足骨L、13ブタ中手骨または中足骨（最近のもの）

*スケール・バーは2cm



図版25. ウシ (1)

1頬骨L、2下顎骨L、3前頭骨（角芯）、4下顎骨L、5下顎骨R、6上腕骨R、7橈骨L、8尺骨L、9中手骨L
 ＊スケール・バーは2cm



図版26. ウシ (2)

1大腿骨R、2脛骨R、3距骨R、4踵骨L、5中足骨L、6中心第4足根骨L、7基節骨、8中節骨、9末節骨
 ＊スケール・バーは2cm



図版27. ウマ (1)

1~3上顎臼歯L、4~6下顎臼歯L、7下顎骨L、8橈骨R、9肩甲骨R、10上腕骨R、11中手骨L

*スケール・バーは2cm



図版28. ウマ (2)

1寛骨R、2脛骨L、3距骨R、4踵骨R、5中足骨R、6基節骨、7中節骨、8末節骨

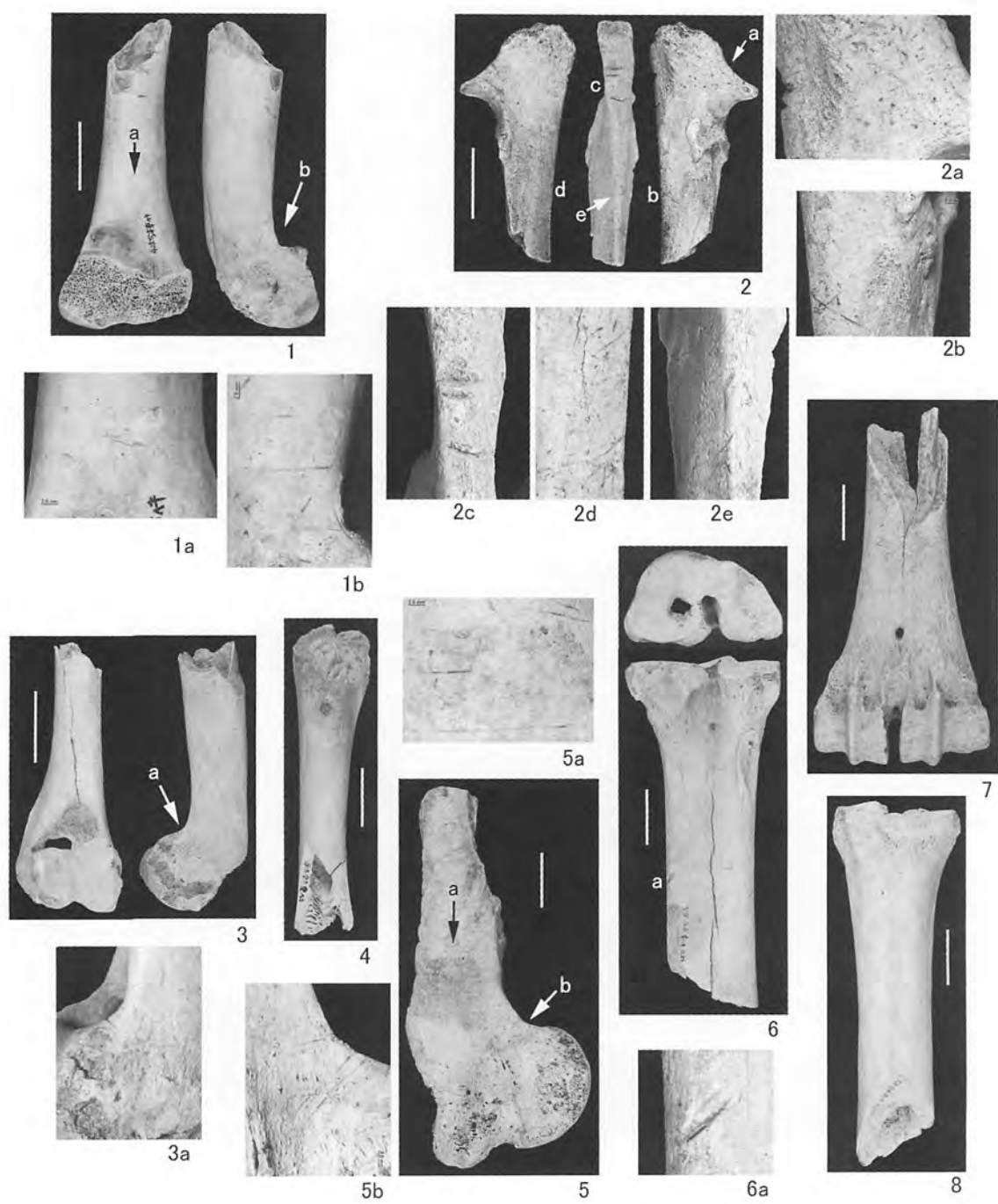
*スケール・バーは2cm



図版29. 海獣類・ウミガメ類

1～6ジュゴン (1前頭骨R、2上腕骨R、3上腕骨L、4尺骨R、5・6肋骨)、7イルカ類椎骨、8～15ウミガメ類 (8前鳥口骨R、9・10鳥口-肩甲骨R、11・12上腕骨L、13大腿骨R、14橈骨L、15尺骨R)

*スケール・バーは2cm



図版30. 獣骨にみられる人為的損傷

1～4イノシシ類 (1上腕骨L、2尺骨R、3・4上腕骨R)、5～8ウシ (5上腕骨L、6中手骨R、7中手骨、8中足骨R)、
1aは写真1のa部分の拡大 (他も同様)

*スケール・バーは2cm